いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
1 月号
No.595

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



新年の花　〈表紙の花〉　櫻子

お正月の準備のため、暮れに花を買い求めるのだが、明るい色の花がなくて苦労することが多い。

赤い実は南天か千両なので決まったスタイルになってしまう。今年は梅擬(うめもどき)が遅くまで残ってくれていて有難かった。

梅擬の艶やかで真っ赤な色は見ているだけでも元気になる。

小さな葉を取る作業が大変で手間をかけて出荷されるが、小枝までたっぷりの実をつけて豊かな実りを感じる。粒の大きな大納言という品種をいけているが、良く日持ちする。

水仙、松、椿は緑の葉の色合いがそれぞれに違うので三種取り合わせても清々しい。梅擬の赤色に「冨春杯」（この器の名）の朱が綺麗に調和している。

お土産に頂いたルーマニア製の刺繍の敷物が素朴で優しい。



金彩花器

櫻子

柳原睦夫さんの花器の底は、ピンクと黄色の雲のような構図の中に金彩を走らせてある。その金が手付となって花器の縁にも現れる。

柳原さんの花器は外側、内側、底にも彩色してあって、どの器も情熱的で個性が強い。花をいける時はかなり緊張して花選びから良く考えねばならない。生け手の事などはあまり考えずに作陶されているのだろう。とてもいけにくい器が多い。

しかし一度でも花が上手くいけられたなら、この花器の魅力にとり憑かれてしまう。父も母も仙溪も私も。

花材　カラー（ホットチョコレート）
スイートピー　シクラメン



同じとし頃？

〈10頁の花〉　櫻子

洋蘭はとても多くの種類がある。世界中に蘭は3万から3万5千種あると言われている中で人の手によって改良された交配種も沢山作られている。

アマリリスと取り合わせた蘭は、オンシジウム・ワイルドキャットで学名はコルナマラ・ワイルドキャットという。

コルナマラ属はミルトニア属×オドントグロッスム属×オンシジウム属との属間交配によって生まれた新しい属。1963年に登録されたという事は同じ年くらいの蘭なのかも。長い歴史を持つ蘭の栽培ではニューフェイス！

人の手によって作られた蘭はこれからも沢山お目にかかるだろう。

アランダやモカラもお稽古でもいける事が多い蘭だが、同じく原産地を知らない。

花材　アマリリス
　　オンシジウム・ワイルド
　　キャット
　　アンスリウム・コーヒー
カップ　ミリオクラダス



なごり雪　〈11頁の花〉　櫻子

胡蝶蘭はラン科ファレノプシス属で原産地は東南アジアを中心にインド、台湾、オーストラリア北部などに広がる。

今でも自生地では高い樹木や岩の上にしっかりと根を張り着生する蘭で仲間のオンシジウムやバンダ、デンドロビュームも野生では過酷な環境であっても人の手など一切必要とせず毎年時期がくれば自然に開花する。

そんな高貴な花は育てるのは難しい。花を咲かせるのは困難だとわかっているので、毎年新種が出ると驚きで魅入ってしまう。

「なごり雪」は花の大きさが3㎝ほどの小さな胡蝶蘭だ。寒さに強いのでこの名前になったとの事。

大好きだった歌と同じ名前で、早速赤いワイングラスに葉牡丹といけて新年の食卓に飾った。

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2013年
2 月号
No. 596

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



似たもの同士で

〈表紙の花〉　櫻子

毎年飾らせて頂く晩白柚（ばんぺいゆう）。ザボンの仲間だが、大きいものは五kgほどあり重さも世界一らしい。厚い皮に包まれているので中身の果肉もいつまでも瑞々しいし、長く鑑賞しても最後まで美味しくいただける。熊本・八代市から届いた本当に有り難い果物。一月に干支の置物と晩白柚を飾り静かに新年を迎えさせて頂いた。

このテキストにはポピーと青麦、蜜柑を取り合わせた。みんな真ん丸で可愛いらしい。早春の彩りと香り。同じ部屋なのに、急にぱっと明るくなった。

花材　晩白柚（蜜柑科）
　　蜜柑（蜜柑科）
　　ポピー（罌粟科）
　　青麦（稲科）
花器　長方形陶水盤



ビル街の中心に 花の山居

いけばな桑原専慶流は江戸初期の元禄期。立花の名手とうたわれた桑原冨春軒仙渓を流祖として、300年の伝統をつなぐ華道の家元。本拠（邸宅）のある界隈は銀行や百貨店、ホテルなどの大型ビルが林立するオフィス街で、家元のある六角通は呉服などの糸偏ビジネスの町である。その中でおよそ半間ほどの格子戸の横に「桑原専慶流」の表札を掲げる家元の控えめさがいっそ潔い佇まいである。

格子戸の内側は清らかに水打ちされた石畳の露地が30メートルほど延び、そのアプローチに促されて左に折れると光が差し込む坪庭。花の養生のための水溜めがあり、二輪の清楚な花が浮かぶ。訪れる人を迎えてくれる花である。さらに奥へ進むと、また庭がある。小ぶりながら手入れの行き届いた清浄な茶庭が風を運ぶ。元、おくどさん（かまど）のある台所だったという玄関から座敷に上がると、縁側越しに緑が目に飛びこむ。いったい、いくつ庭があるのかと思うほどこの家は小さな自然に囲まれ、ビルの真ん中とは思えない静けさで、“つぼ中の天”とか“市中の山居”とも言える風雅な別天地である。磨きこまれた美しい町家の随所に、その場に適った花たちがさり気なく生けられ、少し、禁欲的な京の町家に文字通りの花を添えている。侘びた茶の湯の山居というよりは、明るい花の山居である。

「庭でも家でも、日々目を注ぐことが大切ですね。こんな小さな庭でも季節になれば芽を吹くし、100年経った家でも細やかに掃除をしていれば傷んだ所にも目が届きます。母の口癖ですが、悪くなってからではあかん。早め早めの手当が草木でも家でも、もちろん人でも必要なんやと・・・」と櫻子さん。

自然だけでなく、家や人にも注がれるその思いは、いけばなとどのような関わりがあるのだろうか。

花を生けることは 花を生かすこと

「花ってお料理と通じるところがあると思う」と櫻子さん。野菜であれ、魚であれ、自然から頂戴するものの扱い方の共通点だと言うのだ。

「お花のお稽古に来る方々にもよくお話しするのですが、どうか、花を生けようと思わないでくださいと。上手く生けようとする前に、その花の生い立ちとか、文化的な背景なども考えて、花を生かしてくださいと言っています」。

これは、当家元の創始者・桑原冨春軒仙渓が著した『立花時勢粧』以来の桑原家の家訓ともいえる理念で、植物の出生や生い立ちを深く観察することで花や木の自然の姿を思い描き、それをいけばなに取り入れ、花を生かすというもの。櫻子さんはそれを「花と話をして、心通わせ、花に学ぶこと」だと言う。なるほど、これは料理と通じる。そして、この美しい住まいもまた、その教えを代々伝えてきた家であればこそ、柱にも壁にも温かい目が注がれているのがよく分かる。

西日本新聞 12 月 21 日　広告面「京晴れ MIYAKOBARE」より



桑原櫻子

桑原専慶流副家元

紅葉も散り果て、花も枯れる冬。
そんな季節であればこそ、
草木は健気な営みを見せる。
華道家であり、料理研究家でもある
「いけばな 桑原専慶流」の副家元 桑原櫻子さんに
冬の京都の魅力についてうかがいました。

◎くわはら・さくらこ＝1960年京都市生まれ。両親は華道桑原専慶流の14世家元夫妻。祖父にいけばなの指導を受け、21歳で副家元を襲名し、古典いけばなの生花、立花を今に伝える。国内外で精力的に活動。京都の家庭料理に関する著作やテレビ番組講師などでも知られる。

明日のために日々「備え」を続ける自然。その営みに気づくことも、いけばなの魅力。

ところで、華道の副家元としてだけでなく、料理と花のサロン“チェリー・キッチン”を主宰する櫻子さんは料理研究家の顔も併せ持つ。

「花と同じように、貴重な自然の恵みを調理する時は、その素材の生い立ちを考えて、季節感のない食材やインスタント食品などとはなるべく組み合わさないように心がけています。華道家として花の命を生かすことと料理研究家として素材の味（命）を生かすことはまったく同じ」と言う。

人をもてなす花や料理の専門家である櫻子さんは、花や野菜などの素材だけでなく、その優しいまなざしを人にも注ぎ、京言葉で言う“はんなり”、（花のある）人柄とも相まって、心和む魅力的な京女である。

冬の自然が教えてくれる花の生け方

6歳からいけばなを始め、自然の命を尊ぶ家風を身につけた櫻子さんにとって、すべてが寂び枯れていく冬という季節はどのように映るのだろうか。

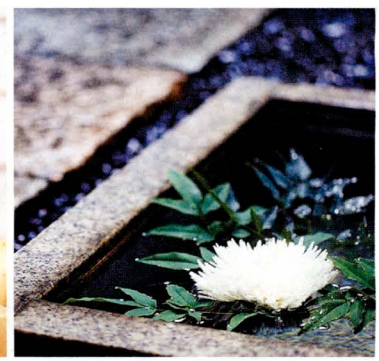
「華道家にとって冬は、とても勉強になる季節なんですよ。花も葉も落ち、幹と枝だけになった木はいわば、その木本来の姿。どのように枝を広げているのかがよく見える季節です。私どもの流派の生花も、じっと自然を観察して出来た型なのです。その意味で、松や銀杏、蝋梅、梅や桜も風格ある大木の多い「京都御苑」は私の勉強場所。ああ、こういうふうに生けるのね、って感じです」と櫻子さんは言う。冬の御所に落ちている松ぼっくりや黄金色の銀杏の葉を「頂戴するのも楽しみ」と笑う。

「ほかには、嵐山の渡月橋から見る大堰川、三条大橋から鴨川の向こうに望む北山など、大きな風景を見るのも好き」だとも。

「わが家の庭をよく観察していると、小さいながら懸命に生きている自然の営みがよく分かります。とりわけ冬は、花も実もないように見えますが、すでに花芽をつけ始めているのです。開花の準備をしているのですね。人も自然のこういう営みに学ばなければいけないと思います。何ごとにも“備える”という日本人ならではの真面目さや細やかな感覚も、実は先人たちがきちんと営みを繰り返している自然から学んできたのではないでしょうか。“備えあれば、憂いなし”ということわざがありますが、それは災害だけでなく、家事でも仕事でも勉強でもすべてに通じる心構えだと思っています。何でも簡単で便利になった現代人は、それを忘れてしまったようですが、自然の方がちゃんと覚えているし、きちんと備えたものには成果が現れることも知っているのですね。いけばなや料理などの私の仕事でもきちんと段取りをしたものは、美しく、おいしく仕上がります」。

いけばなを通じて身につけた、桑原櫻子さんの自然観と生活感である。





いけばなの大事なことをお話しておりますので、転載させていただきました。



エゾノキヌヤナギ

〈10頁の花〉　櫻子

この蝦夷の絹柳は、まだ寒い間にすでに芽鱗片を脱いで花穂が膨らんだ状態で花屋にでてくる。温かそうな可愛らしい花穂なので、春の明るい色彩をとり合わせたくなってしまう。つい撫でたくなるような花穂だが、頬にあててみるととても気持ちがいい。見ても触れても癒される。

花材　蝦夷の絹柳（柳科）
　　ヴァンダ（蘭科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶水盤



雛の花　櫻子

お雛様の横に飾るいけばなは桃と相場が決まっているが、桃のかわりにいけるなら、スイートピーなんかもよく似合う。白色を男雛、ピンク色を女雛のイメージでいけ、葉の緑色とポイントとしての赤色にチューリップを加えた。他には青麦も何故だかよく似合う。どんな花が似合うか、いろいろ試してみよう。



弾むように

〈2頁の花〉　櫻子

白い手毬のような花が弾むように並んでいる。弧を描いて垂れ下がる小手毬の枝は、優雅な空間をつくりだす。長めに使って小手毬がつくる空間の内側に花を入れるのも面白いのだが、飾る場所が大きくない場合は枝を短く切り分けて、足もとを少し撓めながら花瓶に投入にすると、花がきゅと集まって豪華な感じになる。

噴水のように入れた小手毬の動きに添わせるように、紫の濃淡のスイートピーを入れると花が弾み出てくるようだ。この優しい色の広がりに、シンビジュームをアクセントに加えた。小手毬の葉の緑も重要な要素になっている。

花材　小手毬（薔薇科）
　　シンビジューム（蘭科）
　　スイートピー二種（豆科）
花器　青色細口陶花瓶



伸び上がる

〈3頁の花〉　櫻子

三種類の薔薇をいけたくてあれこれと考えていたが、ビバーナムの濃青色の実をみつけたので、とりあわせてみた。ところが実の色が暗いため薔薇の鮮やかさが沈んでしまう。そこで白のカラーを加えることにした。清楚な白い花とみずみずしい緑色の茎が爽やかで、全体が明るくなった。

カラーの茎の線をどこから見てもそろっているように立てると、力強く上に伸び上がる勢いが生まれる。線をそろえるためには茎の曲がりを真っ直ぐになおす技術が必要だが、他の花材では出せない魅力がある。

花材　カラー（里芋科）
薔薇三種（薔薇科）
ビバーナムの実（ずいかずら）（忍冬科）
花器　四足陶花器



立てる・集める・隠す

〈11頁の花〉　櫻子

9頁の家元の投入が「立てる・広げる・隠す」いけばなであるのに対して、「立てる・集める・隠す」を意識していけた花。

ライラックは切り花では水揚げの悪い花で、いける時には必ず足もとの皮を削っておく。そのようにした上で作例のように短く集めていけると、一旦水が揚がれば結構長持ちする。色を集めるように使うのに向いた花材だと思う。

カーネーションとライラックだけではふわふわした感じになるので、引き締め役にシーグレープの色づいた葉を加えた。

花材　カーネーション（撫子科）
　　ライラック（木犀科）
　　シーグレープ（蓼科）
花器　濃紺ガラス花器



二種でいける

櫻子

今月のテキストには七作の投入、盛花があるが、そのうち四作が三種類の花材でいけられていて、のこり三作は二種類の花材でいけられている。それぞれを見直すと、なるほど三種でいけられた花はそれぞれに役割があって、二種では物足りない。それは面としての葉であったり、季節感を加えるためのワンポイントとしての実であったりしている。

いけばなは花材の種類が多くなるほどそれぞれの個性は薄れていく。とり合わせを考える時は、互いの個性が際立つような組み合わせを大事にしたい。もし二種で納得のいく組み合わせをみつけたら、余計なものを入れずに花型を工夫することで充分見応えのあるいけばなになる。

青いガラス器の上に雪柳の枝を四方へ広げておいてその中にアネモネをさしてゆく。

春を告げてくれるアネモネは色鮮やかで大好きな花の一つ。茎の曲がりも面白く、咲いたときのことを考えながら長短をつけていける。赤い敷物に飾るとアネモネの赤色がより強さを増してくれる。雪柳とアネモネ数色。私の好きなとり合わせだ。

花材　雪柳（薔薇科）
　　アネモネ（金鳳花科）
花器　青色ガラス花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
4月号
No. 598

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





カエルの目線

〈表紙の花〉　櫻子

背の低い花のとり合わせの時には、自分の目線を地面すれすれにしたところを想像しながらいけてみると面白い。私達は普段、そんな目線で物を見ることは無い。だからこそ新たな発見があったりすると思うのだ。上から見ていても見えないところが見えてくる。こんなところにこんな花が咲いている！。そんなわくわくするような気持ちで小さな花をいけてみよう。

春の温もりに誘われて伸びてきた薇（ぜんまい）。この薇を主役にして苺（いちご）の株を足もとに加えると、小さな苺の花も色づき始めた赤い実も、薇のクルクルもじっくり間近で楽しめる。カエルの目線でいけたいけばな。

花材　薇（薇科）
　　苺（薔薇科）
花器　三角柱花瓶

鉢植を生かす

〈2頁の花〉　櫻子

可愛い鉢植えを見つけたので買ってしまった。この小さな白い花の名前は西洋雲間草（くもまぐさ）。雪の下科の常緑多年草で北ヨーロッパの原産。花色は白のほかに赤とピンクもある。日本には雲間草が自生していて、北アルプスなどの高山で雲がたちこめるような中に咲くところから名づけられた。

西洋雲間草は切って小さくいけること



もできるが、鉢植のような華やかさはなくなる。鉢ごと黒いビニール袋で包み、底の深い花器にそのままいけてみる。左図のように吸水性スポンジを切って枕にすると安定した。とり合わせた椿と黒百合は鉢と花器の隙間に吸水性スポンジをはめこんで、そこに挿していけている。



焦茶色の花器の上で、白い小花が自然の表情を見せてくれた。

花材　西洋雲間草（雪の下科）
　　黒百合（百合科）
　　椿（椿科）

オーストラリアの豆豆

〈3頁の花〉　櫻子

アカシア（俗称ミモザ）のフワフワした黄色い花に橙色の小花が連なったコリゼマを合わせてみた。コリゼマはオーストラリアのユーカリの森に生える豆科の常緑低木で、作例では鉢植から切っていけている。ミモザもオーストラリア原産で豆科の常緑高木。同郷の豆科どうしのとり合わせ。

花材　銀葉アカシア（豆科）
　　コリゼマ（豆科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　細口陶角敏



波紋の器

〈11頁の花〉　櫻子

この青白磁は宮永東山氏がつくられた器で、どっしりとした六角柱をしていて大きな丸い口があいている。器の表面には波線が斜めに重なって、あたかも水面に風がつくる波の模様のよう。椿をいけると、深山の水辺にいるような澄んだ空気を感じる。

器の装飾にもいろいろあるが、宮永氏がつくる器のように、自然との接点を感じられる器には花がしっくりと合うように思う。きっと自然を敬う心がいけばなと共通しているのだろう。大好きな器。

花材　喇叭水仙（彼岸花科）
　　椿（椿科）
花器　六角柱青白磁（宮永東山作）



スカビオーサとアカシア

櫻子

花屋で見つけたら必ず買いたい花がある。スカビオーサもそのひとつ。複雑な花びらのかたち、薄紫から暗紫色、赤紫やピンクまでの色の変化も綺麗で、頼りなげに咲く姿も良い。しかし日持ちもする。松虫草の仲間なので、優しい趣を残している。日本では松虫が鳴く頃に咲くので松虫草と呼ばれているが、スカビオーサは疥癬（かいせん）という意味で皮膚病に効く薬草として使われていた。ヨーロッパ西部に自生する花である。

最近は春先にも出回るようになった。本来は初夏から秋に咲く花なのに。その上黄葉のアカシア！。初秋に飾れば、素敵な取り合わせなのに。花の魅力に負けて買ってしまった事をお許しください。

花材　アカシアの黄葉（豆科）
　　スカビオーサ（松虫草科）
花器　ブルーガラス深鉢

ＮＨＫ「趣味Ｄｏ楽」
～ハンサムウーマン～
桑原櫻子

３月12日放送の「趣味Ｄｏ楽」に櫻子副家元が出演。花と料理によって、自然を見つめ季節を感じながら豊かな心を育む様子が紹介されました。





ＪＲ京の冬の旅
センス・ザ・ミヤビ

キャンペーンポスターに櫻子副家元が協力。約３ヶ月間、全国のＪＲ駅及び車内に掲示された。



「日本人の忘れもの
京都、こころここに」
京都新聞社　編

大震災後の二〇一一年七月から一年間、京都新聞に連載された一〇二人のエッセー集。

櫻子副家元もリレーエッセーと記念フォーラムで参加しています。

これからの日本をどうしてゆくかということを考える上で、経済成長の代償として日本人が忘れてしまったものは何だったのかを考える作業は、その手がかりになる。

定価本体一八〇〇円。





花菖蒲と鴇芍薬（ときしゃくやく）

〈3頁の花〉　櫻子

花菖蒲に芍薬はとてもよく映る。作例のように二種で盛花にしてもいいし、株分け生花にするのも調和が美しい。

作例の芍薬はトキシャクヤクと呼ばれている。まだあまり多く出まわっていないようだが、咲くと白に淡いピンク色がさして、鴇が羽を広げた時のような色合いなのでこの名前がつけられたのだろう。葉も小さくて上品である。今後増えてほしいなと思う。

花材　花菖蒲（菖蒲（あやめ）科）
　　オクロレウカの葉（菖蒲科）
　　鴇芍薬（牡丹科）
花器　交趾（こうち）焼鉢



ボーンチャイナ　櫻子

写真の器はイギリスのコープランド社製と聞いている。白地に金とトルコブルーで装飾されて、台座の三方には田園風景が細かく描かれている。ボーンチャイナのコンポートである。

ヨーロッパに中国の陶磁器が伝わったのは十三世紀頃。それ以降、東洋の陶磁器は盛んに研究されて、ヨーロッパで最初に磁器の製造に成功したのは十八世紀ドイツのマイセン地方だった（一七〇九年）。日本の有田焼（柿右衛門様式）も大きな影響を与えている。

ところが当時イギリスでは白磁器の主成分であるカオリンが手に入らず独自の製法を工夫し、一七四八年、ボウ窯のトーマス・フライがイギリスで採れる原料の中に牛の骨灰「ボーンアッシュ」を加えることによって良質の磁器を作ることに成功した。これが白磁器とは違う温かみのあるボーンチャイナの誕生だ。

ヨーロッパの人と話す時にはこの違いを知っておいたほうがいいだろう。白い洋食器はみんなボーンチャイナだと思っていては馬鹿にされてしまう。骨灰を用いてつくられた磁器をボーンチャイナと呼ぶと覚えておこう。

花材　ベラドンナ二種（金鳳花科）
　　スプレー薔薇（薔薇科）
　　「フェアビアンカ」
花器　ボーンチャイナ・コンポート

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
6月号
No.600

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





路地　〈表紙の花〉　櫻子

「路地を通ってくる間に気持ちが切り替わります」とお弟子さんによく云われる。三十㍍の石畳に水を打ってお迎えをするのだが、そのご褒美に爽やかな風が吹き抜けて行く。水まきは迎える側も心地よい。

花材　七竈（薔薇科）
　　芍薬（牡丹科）
花器　陶花器（清水美菜子作）

玄関花　〈3頁の花〉　櫻子

ビバーナム・スノーボールは和名を西洋手鞠肝木という。ビバーナムは忍冬科・莢蒾属の総称である。

玄関の間には少し大きめの花をいけている。この朱塗りの円卓は、季節を感じつつ華やいだ雰囲気の花が似合う。

花材　カラー四種（里芋科）
　　スノーボール（忍冬科）
花器　カットガラス花器



庭のテーブル

〈11頁の花〉　櫻子

父と母は玄関前のこの空間で時々朝ご飯を食べていた。たっぷりの紅茶とイギリスパン。表通りから深く入っているので閑(しず)かなのだ。庭の花の蜜や虫を食べに鳥たちもよくやってくる。草むらの中はレモンちゃんの昼寝場所にもなっている。レモンちゃんは昨夏から居る猫である。前のゴンチャンはシャイな猫だったが、レモンちゃんは人なつっこい。たまに稽古場にやってくるのをどうしたものか思案中。

以前のテキストでも甥っ子たちの作った猫と一緒にこの場所で薔薇をいけたことがある。花は折々の記憶を色彩豊かにしてくれる。

花材　薔薇(ばら)（薔薇科）
紫陽花(あじさい)（紫陽花科）
花器　ガラス花器（クリシー製）



水を感じる

〈12頁の花〉　櫻子

たとえ水が見えなくても、いけばなの水はとても大切である。花にしてみれば、いつもきれいな水を吸っていたいにきまっている。花の水をいつもきれいにしている人には、いい花がいけられる。それは花の気持ちになれるから。それはもてなしの気持ちを持っているから。

美しい水を感じる花がいけられるようになろう。

花材　バンダ二種（蘭科）
　　レースフラワー（芹科）
花器　彩泥玉型花器（宮下善爾作）

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2013年
7月号
No.601

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





ヒマワリとズッキーニ

〈表紙の花〉　櫻子

まん丸のズッキーニは賀茂茄子やトマトと同じように、しばらく食卓に飾って眺めている。

向日葵（ひまわり）は日本では食用油くらいしか知られていないが、中国ではお茶を飲みながら向日葵の種を食べる。殻を割るのが面倒だし、中身も少ないので苦手だなと思っていたが、実はすごい健康食品なのだ。ビタミンE、鉄分、亜鉛他多くの栄養素が含まれる。コレステロールを下げ高血圧や貧血を防ぎ若返りの効果もある。

ズッキーニはペポカボチャの仲間。こちらもビタミンBや食物繊維を多く含む。鑑賞してもお料理しても元気一杯の夏の花と野菜。

花材　向日葵（菊科）
　　柏の斑入り葉（山毛欅（ぶな）科）
　　ズッキーニ（瓜（うり）科）
　　粟（稲科）
花器　ガラス花器

下向きに咲く内気な花

〈2頁の花〉　櫻子

以前はアリウムの仲間に分類されていたが、今は百合科で、ネクタロスコルドゥム・シクラムという学名で呼ばれている。買った時から花が枝垂れていて、上を向いた！と思ったら、花が枯れていた。花が終わると上を向くのだ。不思議な花だった。夏はガラス器にいける事が多い。花茎が花器の下まで着かないように浅く挿



して、ガラス越しに茎を見えにくくしている。

夜に水温が上がって花が萎れてしまう事が多いので、夕飯の片ずけをしながら水を替える事にしている。朝起きて花がきれいだと気持ちがいいから。

花材　ネクタロスコルドゥム・シクラム（百合科）
　　トルコ桔梗二種（竜胆科）
　　ディフェンバキア（里芋科）
花器　紺色ガラス花瓶

エレガフミナ

〈3頁の花〉　櫻子

今年初めて出会ったアフロディーテ・エレガフミナ。クレマチスの仲間である。とても優しくしなやかで、ワインディキャンタに飾った。暑い部屋でも時折通りぬける風に揺れながら、長持ちしてくれた。

北半球の温暖な地域には原種が約300種はあるクレマチス（金鳳花科クレマチス属）。その中で「鉄線（中国名・鉄線蓮）」と呼ばれるのは中国原産の一種だけなのに、つい何でもテッセンと呼んでしまう。改良種であっても野生のような雰囲気を持っているからだろうか。フランスの個人の庭で作例に似た小さな花のクレマチスが石壁に這わせて育てられているのが美しかった。

花材　クレマチス・アフロディーテ・エレガフミナ（金鳳花科）
　　アガパンサス（百合科）
　　野葡萄（葡萄科）
花器　ワインディキャンタ



平籠にいける

櫻子

穂咲七竈が出回ると祇園祭も近いなぁと感じる。夏の草花をいける時に足元に使ったり、花型に広がりを感じさせるには必ず添えたいと思う。

まん丸の小さな蕾が、ぱっと咲いて綿帽子のような真っ白の塊になる。七竈に葉が似ているのでこの名前がついた。七竈とは同じバラ科であっても属は違う。木ではあっても涼しげで軽いので籠花にも良く似合う。

白竹の平籠に矢筈薄（やはずすすき）、桔梗、撫子と取り合わせた。穂咲七竈を足元に添えると、左右に長く横張りの花型にいける事が出来る。そうする事で他の草花も伸びやかで生き生きとした姿になり、それでいて軽やかである。夏は風通しの良い花をいけたいと思う。

花材　矢筈薄（稲科）
　　穂咲七竈（薔薇科）
　　撫子（撫子科）
　　桔梗（桔梗科）
花器　白竹平籠

町家に暮らすありがたさ

京の町家で暮らしていると、時折ありがたいなと思うことがあります。

30㍍もある長い石畳の路地に水を打つのは、小さな頃からの私の日課でした。ジョウロとバケツにたっぷりの水をくんで何度も往復します。お花のお弟子さんや客人のある時は、いつもこうやってお迎えするのですが、そのご褒美に爽やかな風が吹き抜けて行きます。それがとても気持ち良いのです。

それから3カ所ある水溜(みずたま)に季節の花を浮かべます。季節ごとに花の種類も変わりますが、今なら鉄線(てっせん)や紫陽花(あじさい)でしょうか。新しい水に入れ替えた水溜の浮かし花、暑さで元気がなくなっていても、もう一度生き返って目を楽しませてくれます。

中京区に住まいしているので、お隣も裏もマンションやホテルに囲まれてしまいました。小さな庭ですが、目隠しするように木々が青々と茂ってくれています。この美しい緑に清められた風が家の中を通り抜けて行くときには、この細長い町家の造りに感謝することも。

13歳で両親と離れ、この家で祖父母と共に暮らしてきました。お花の稽古を通して、物を大切に思う気持ちが何よりも強くなったと思います。

いけばなの家として毎日教室もあり、家族の生活もしています。家に来られた方にはお玄関の掛け花や床の間のいけばなを通して心地よい澄んだ空気を感じてもらいたいと思いますし、同時にそうすることが私自身のリフレッシュにもつながります。路地に水を打った時のように、気持ちがスーッとするのです。

花と共に生きた祖父や両親の大変さやしんどさを見て育ち、少しでも手助けになればとやってきたことも今では日常の何でもない習慣となり、これもまたご褒美なのだと受けとめています。

この家に住んで、家から学んだことも多くあります。

私にとって、いけばなは花との関わりを深めるだけでなく、暮らしそのものであるとも考えています。「家が傷んでくる前に早く気づいて直しなさい」は母の口癖でした。毎日の暮らしに余裕がないとなかなか気づけないので、今でも手強い言葉です。

父は大工さんと良く相談し家の修理をして、古い物と新しい物を調和させ、美意識の高い住みやすい家にしてくれました。この家を大切に美しく暮らし、守っていくことも大切な仕事だと思っています。(華道桑原専慶流副家元)



くわはら・さくらこ　京都市生まれ。甲南女子大仏文学科卒。江戸時代前期より続く桑原専慶流のいけばなを15世家元の夫と共に継承する。料理研究家としても活躍。

【京都新聞6月23日㈰朝刊1面　カラー掲載】



三種の花で

〈9頁の花〉　櫻子

アンスリウムと薔薇は一本ずつ、オンシジウムは二本使っていけてみた。少ない数ほどまとめにくい。

薔薇一輪の葉を二段に分けて水際をきれいにみせる。薔薇を買う時は茎が太くて葉の生き生きしたものを選んでいる。日持ちの良いアンスリウムとオンシジウムも艶やかな薔薇の葉のお陰で元気に咲き誇る。

壊れそうなほどに薄く焼かれた白磁の花器。口元に繊細な絵付がされている。アクリル製の花台。特別な花として飾りたい。



蒲（がま）の穂

櫻子

日本全土の池や沼に生息し夏に花を咲かせる蒲の穂。自然に生えているのを見ても美しいとは思わないが、水をたっぷり張った水盤にいけるととても涼しげな花となる。

雄花は黄色い花粉となって飛んでしまうので、雌花だけを残していける。昔は因幡の白うさぎの話をしながら雄花穂を取ったが、最近の蒲は雄花穂が綺麗に取り去られている。さらに雌花穂の上の軸が切られていることもある。

今年の夏の稽古は雄花穂を観察したいからと、産地に連絡してもらい自然のままの蒲の穂をいける事ができた。

考えてみれば、日本神話に登場する蒲は１３００年以上前から生息しているのだ。（古事記の成立は７１２年）そんな植物をいけばなでは大切にいけている。

蒲と小蒲は、上の雄花穂と下の雌花穂がくっついているが、姫蒲は雄花穂と雌花穂が離れて付いている。きちんと距離を置いているのだ。

昔の人は良く観察して名前をつけている。

花材　蒲（蒲科）
　　オンシジューム（蘭科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　ガラス鉢



バターのお店

櫻子

フランスの伝統発酵バター「エシレ」のクッキーを頂いた。

京都では買えない珍しいお菓子。箱があまりにきれいなので、おとしを入れてカラーとカラジウムをいけた。

もったいないからと仕舞い込んでしまえば、そのまま忘れてしまうだろうし、捨てるのも耐え難い、花をいけることで、心に留める事になる。

「軽やかなゆきずりの意匠花」と表現したのは祖父だった。

1973年のテキストに「アダム&イブ」のショッピングバックにフリージアをいけていた。この店はたち吉の洋食器部門で、最初京都にオープンした時は、憧れのショップだった。まだ外国からの洋食器が少ない時代、花を飾りテーブルセッティングしてのディスプレイは珍しかった。

祖父の時代も今も変わらない。京都人は特に新しい物が好きだが、祖父も私も同じだ。

私の頼りない文章に十三世専溪の言葉を。

「この様な意匠花も繰り返せば鼻につく。が、こんな瞬間的な思いつきはいけばなのある部分にはいつも必要とされている。こんな風に利用することも考えるといけばなも又楽しいということになります。」

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2013年
9月号
No.603

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





暑さを乗り越えて

〈表紙の花〉　櫻子

今年も切りたての新鮮な葡萄を送って頂いた。

すぐに食べてしまうのは勿体無くて、撮影してから！という事になる。

両親も色んな生り物を花と合わせていた。柏葉紫陽花と葡萄、バナナとカラジウムなど上手い組み合わせが沢山あった。

いけてから頂戴するのが桑原家の常でした。

今回はあかのまんまの仲間、大毛蓼と取り合わせた。葡萄と大毛蓼、同じ季節で同じ場所にいたかもしれない顔見知り同志。暑い夏を元気に乗り越えてきてくれた。

あかのまんまは別名犬蓼という。辛みがなく食べられない蓼の意味。犬の字がつく植物には他にも、犬胡麻、犬辛子、犬薺（いぬなずな）、犬稗（いぬひえ）、犬蕨（いぬわらび）というのもある。どれもみんな食べられない。

花材　葡萄（葡萄科）
　　大毛蓼（蓼科）
花器　陶水差し（インドネシア）

雪笹　〈2頁の花〉　櫻子

山野草は中々見る機会が少ない。咲く場所を選び、決まった季節のほんの短い間しか咲かない花は名前も美しいものが多い。

誰がつけたのか、よほど考えられた

のだろう。雪笹も山地の林の中に生えていて初夏の頃花を咲かせる。白い小花を雪に、葉を笹に見たてて、この名前がついた。

花の後は赤くて小さな実ができる。実は小豆に似ていて、葉も湯がいて食べると小豆のような味がするので小豆菜ともいうらしい。

秋の黄葉した雪笹を女郎花（おみなえし）と取り合わせた。

花材　雪笹（百合科）
　　女郎花（女郎花科）
花器　染付広口花器



蝦蔓（えびづる）

櫻子

表紙には大きな葡萄の房をいけたが、こちらには葡萄のような実がぶらさがった野生の蔓をいけた。どちらも太陽が育んだ結実。

この小さな黒い実はエビヅルで、ノブドウやヤマブドウなどとともに古くからエビカズラとも呼ばれ、日本に自生する葡萄の仲間。エビヅルとヤマブドウの実は食べられる。また、古事記にも登場する、日本古来の植物である。

イザナギノミコトが黄泉（よみ）の国から逃げ帰る時、追ってきた鬼にエビカズラを投げつけて、鬼がその実を食べている時に難を逃れた。

エビヅルに含まれるポリフェノールは普通の葡萄の数倍、酒石酸は血を増やしたり滋養強壮作用があると言われている。鬼もこの実を食べて力が湧くのを知っていたのだろう。

自然の野山は、太古につながる植物の宝庫だ。

花材　蝦蔓（葡萄科）
　　紐鶏頭（ひもけいとう）（莧科）
花器　鶴首陶花瓶（清水正次作）



木の器

櫻子

マンゴーの木をくりぬいて作られた器。タイでつくられたものだ。マンゴーは漆(うるし)科の常緑高木で樹高40m以上にもなるそうだ。あの赤い実を無数にぶらさげた大木は圧巻だろう。ぜひ一度見てみたいが、開花後には強烈な腐敗臭がするとのことなので、実ばかりになった頃合いを調べてからがいいだろう。

マンゴーの原産地はインドからインドシナ半島周辺と推定されている。インドでは四千年以上前から栽培が始まっており、仏教の経典にもその名が見られる。マンゴーをよく食べるようになった現代の若者（10～20代）世代をマンゴー世代と呼ぶそうだが、その名にあやかってマンゴーのように逞しく、たわわに美果をみのらせてほしいと切に願う。

そんなマンゴーの幹をくりぬいて作られた器に、深紅の毬栗のようなベニノキと黄金色のマリーゴールドをいけた。麻で織ったオレンジ色の敷物に飾ってタイ風供花(くげ)といったところか。マンゴーの大木を想像しながら見ると、趣も増してくる。ちょっと高いが、真っ赤なマンゴーも買ってこようか。

花材　マリーゴールド（菊科）
　　メキシコ原産
　　紅(べに)の木（紅の木科）
　　熱帯アメリカ原産
花器　マンゴー製鉢

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2013年
10 月号
No.604

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





七竈（ななかまど）　鳥兜（とりかぶと）　竜胆（りんどう）

〈表紙の花〉　櫻子

紅葉した七竈の葉が、斜め後ろからの光を受けて鮮やかに浮かび上がる。

竜胆の純白と鳥兜の優しい青紫色が、七竈の色彩のうつろいを際立たせる。

奥行きのある葉の重なり。伸びやかな花。家にいながらこんな風景を目にできることのなんと贅沢なことだろう。

花を育てる人、大切に届けてくれる人、器をつくる人。永い歴史のなかで培われた豊かな文化。

古の人たちはどんな思いで花をいけていたのだろう。

自然との一体感。

もてなしの気持ち。

木々や草花への敬いの心。

なによりも、器の上でにっこり笑ってくれたように感じられたときの、あの爽やかさ。

うまく言葉にできないけれど、花たちへの感謝をこめて、写真で残しておこう。

花材　七竈（薔薇科）
　　鳥兜（金鳳花科）
　　竜胆（竜胆科）
花器　陶花瓶

晒菜升麻（さらしなしょうま）

〈2頁の花〉　櫻子

晒菜升麻はキンポウゲ科の植物で山中の林下に生える。高さが一メートルにもなり、白い花が長いブラシの様に咲く。

若菜を茹でて水に晒して食べるので晒

菜。根の部分は升麻と呼ばれる漢方薬になる。まさに自然の恵みを与えてくれる植物だ。

晒菜升麻と取り合わせた丸葉の木や竜胆を格の高いものにしてくれる。

いけばなとしていける事が第一義なのだと思わせる花だ。

花材　丸葉の木（満作科）
　　晒菜升麻（金鳳花科）
　　竜胆（竜胆科）

花器　陶水盤



檜扇（ひおうぎ）の実

〈10頁の花〉　櫻子

檜扇の実は和花とも洋花とも相性がいい。

この明るい緑色にふくらんだ実は、やがて茶色く枯れて割れると中から漆黒の丸い種子が並んで現れる。この黒い種子は「ぬばたま」「うばたま」と呼ばれる。射干玉、烏羽玉と書く。万葉集には81首も詠まれているくらい好まれたことが伺える。艶やかな黒い色に、小さいのに強い個性を感じる。

作例ではまだ若い檜扇の実の爽やかさに深紅の薔薇と赤い縞模様のアンスリュームをとり合わせた。花器は衝立のような平たい形で、小石を入れた上に細長い剣山を置いていけている。

日本古来の植物と、熱帯の個性的な花と、赤い薔薇。色彩と花の形で選んだ感覚的ないけばなだが、不思義と調和している。

こんな出合いを楽しむのもいけばなの面白さだと思う。

盛りだくさんのお買物

〈11頁の花〉　櫻子

京都市左京区鹿ケ谷特産なので鹿ケ谷かぼちゃという。

瓢箪のかたちをした南瓜で、上の部分は繊維が多く水っぽいのでスープなどにする。



下の方は普通に炊いたり、丸ごと詰め物をしてオーブンで焼いても美味しい。上と下の調理方を変えなければならない、少し手間のかかる野菜だ。だから中々食べられない。

京都の人でも食べた事のある人は少ないと思う。

今年は岡山で作られた鹿ケ谷かぼちゃが届いたので早速奥の座敷に飾らせてもらった。

いつお料理しようかと悩んでいたら、花屋さんで角のようになったオクラと黒い唐辛子（ブラックフィンガー）を見つけた。どちらも鑑賞用なので食べられないが、愛用の買物籠に盛り込んだ。私の普段のお買物は、食べ物を買う量がとても多い。

気がつくと袋からはみ出して持てない状態にまでなっているので、それをいけばなで表現したようだ。

料理の連載をしていた雑誌でピッタリと思うようなイラストを描かれたこともあるくらい。

花材　鹿ケ谷かぼちゃ（瓜科）
　　ザクロ（柘榴科）
　　オクラ（葵科）
　　黒唐辛子（茄子科）
　　葉鶏頭（莧科）
花器　エコクラフトの買物籠





喜樹

〈2頁の花〉　櫻子

数十年ぶり蔵や花器置場を整理して久しく使っていない花器が沢山出て来た。9月号のテキストから順番に花をいけている。

この三彩の壺は祖父も母も好んで使っていた記憶があるが、いけにくいのか、いつも奥に仕舞われてしまって中々出てこない。剣山も入らないくらい口が小さいのに水盤のように浅く平たい。大きな枝のかんれんぼくをいけるのは難しかった。しかしいけ終えてみると、二種の枝ものと大輪の薔薇に負けない強い壺だなと感じる。口が小さくても少しだけ花をいけて満足する性分ではないので困るところだが。

中国原産のカンレンボクは秋になるとミニバナナをつけたような球形の集合果となる。

果実、根、茎葉に抗癌効果があり、薬用とされてきた。それで英名はｃａｎｓｅｒ　ｔｒｅｅとかｈａｐｐｙ　ｔｒｅｅというのだ。中国では実の形から子孫繁栄を表す喜びの木ということで喜樹と呼ばれている。意味は違っても希望を与えてくれる木であったのだと思う。

花材　旱蓮木（かんれんぼく）（沼水木科）
　　丸葉の木（満作科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶扁平壺



トゲのない薔薇

〈3頁の花〉　櫻子

今年の鈴薔薇の実は野薔薇の実よりも早く出回ったので、花会やお稽古に何度もいけさせてもらえた。野生の薔薇の実なのに年々棘が減って、扱いやすくなってくるのは有り難い事。

木苺は同じバラ科の植物。鈴薔薇の葉は取られているので必ず艶やかな緑を添えたい。ネリネの花も茎も瑞々しさを与えてくれる。

花材　鈴薔薇の実（薔薇科）
　　木苺（薔薇科）
　　ネリネ（彼岸花科）

花器　あけび籠



浜辺葡萄

櫻子

写真の団扇のような丸い葉はシーグレープ。アメリカのフロリダ州南部から西インド諸島、南アメリカに分布する常緑小高木。海岸や砂丘に生えるので、和名をハマベブドウという。芳香のある小さな白い花を咲かせ、葡萄に似た果実は濃赤色に熟し食用になるそうだ。

昔からこの葉はよくいけられてきた。祖父も両親もシーグレープがあると目の色が変わっていた。

特に紅葉が綺麗で大きな木のままで鮮やかな色の花と取り合わせてきたのを覚えている。珍しくて固い丸葉だが、向きを工夫すれば花器と花との接点を上手く繋げて強くまとまる。

いけばなは何でもよいから足元を緑で隠してという発想にならないようにしたいと思う。安易に花器の口元に突っ込まれた葉を見てそう思う。とても大切な場所なのにと。

アンスリウムもピンクッションもありきたりな花で、すでに珍しいものではない。でも取り合わせや器や敷板でとても良い花となる。私にとっては良いか悪いかどちらかしかない花なので、よほど良い花に出会った時しか取り合わせしない。そんな想いもあって良いかな。

花材　アンスリウム（里芋科）
　　ピンクッション（ヤマモガシ科）
　　シーグレープ（蓼科）
花器　金属花器



落ちない実

櫻子

秋になると色んな実をいけるが、赤い実で特に好きなものは、梅もどきや七竈、ガマズミだ。

日本には十五種類ほどのガマズミがある（ガマズミ、ミヤマガマズミ、コバノガマズミなど）。葉は丸葉で実より遅く紅葉するものもある。

梅もどきのように小葉を全部取り去ってから出荷される実も多いが、ガマズミは虫食い葉も残っていて、それが素朴で可愛らしく実の赤さを一層引き立ててくれる。

山では二メートル位の低い木なので日頃は目立たないが、実の季節には見つける事が出来る。

ガマズミで果実酒を作ると赤いお酒になるらしい。昔から天然の着色料としても使われてきたくらい、赤い実の色は鮮やかで透明感がある。

ガマズミの語源は噛み酢実とか神ツ実（神の実）が転化したものと言われる。古くから日本の山に育っていて、寒くなると甘みを増す甘酸っぱい実で豊かな山の幸であったのだろう。

いけていても、実は落ちないし、甘くなるまではしっかりと実のっていてくれた。そんな力強い実りに上品な糸菊を添えた。

花材　莢蒾（がまずみ）の実（忍冬（すいかずら）科）
　　糸菊（菊科）

花器　濃紫色陶花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
12 月号
No.606

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





漆器の鉢にいける

〈表紙の花〉　櫻子

塗りの器に花をいけると、あらたまった感じになる。作例の大鉢は果物を盛ったりして使っているが、水仙や椿との相性がいい。梅擬の赤い実もよく映る。

花材　梅擬（黐の木科）
　　水仙（彼岸花科）
　　寒菊（菊科）
花器　溜塗大鉢

赤い釉薬の花器

〈2頁の花〉　櫻子

焼き物の赤色は出しにくい色だそうだ。金を使うこともあるそうで、そうするととても高価なものになる。でもどうしても赤い器にいけたい時がある。この器は無理を言ってつくってもらったものだ。

花材　月桃の実（生姜科）
　　薔薇二色（薔薇科）
花器　赤色釉陶花器
　　白椿（椿科）



出合い花　（３）　櫻子

サンバとポインセチア

サンバとは兵庫県で開発された新しいオリジナルの菊で「ひょうごサンバマム」という。２００６年から品種改良が続けてこられた。

サンバのように華やかな洋種の菊で、踊る花びらということらしい。私が選んだのはウエディング・サンバ。白の一文字菊といっても良いと思う。

京都の花屋さんには今年初デビューだ。他にもオータム・サンバやプリティ・サンバなどの色違いがある。

ネットをかけて売られているので、アナスタシアと同じようによく目立つ。特別扱いの花だが、糸菊や嵯峨菊のように日本的な菊と合わせるのは難しいと思う。

ポインセチアも園芸品種としては毎年ニューフェイスがお目見えする。

あれこれ悩んだ末に、アンティーク調のガラス器に短く並べてみた。どちらが主でも従でもなく、花の形の対比と色の対比がはっきりして、意外にいい感じ。新鮮な花型。

クリスマスの粉雪が舞う中で咲く二種の花。

花材　菊「ウエディング・サンバ」
（菊科）
ポインセチア（燈台草科）
花器　ガラスコンポート



こま型の花器

〈2頁の花〉　櫻子

20年ぶりくらいに蔵の整理整頓を行なった。奥に仕舞われていて、中々お目見えしない花器も多いのだが、久しぶりに懐かしい花器も出てきた。

この花器は1976年に、両親が祖父へのお土産にローマで買ってきたもの。（テキスト156号で紹介）

イタリアらしい明るい色使い、ユニークなかたち。祖父は気に入って、よく花をいけていたことを思い出した。小さいけれどぴりっと強い感覚をうける花器とテキストには書かれている。花のことは丁寧に書かれていたが、花器の話はそれほど多くない。もっと書いて欲しかったなと思う。

花材　若松（松科）
　　葉牡丹（油菜科）
　　オンシジウム（蘭科）
花器　細口陶花器



彫刻の花器

櫻子

この花器も祖父が好んで良くテキストで花をいけていた。

横長の平たい形だが、生花をいける事もあったし、洋花や和花どちらも合わせていたようだ。

お稽古用の花器で、普段に使っていた。

どっしりと重いので、砂利、剣山、水、花を入れると気合なくしては持ち上げられない。それほどに重い！だが安定の良い花器は安心して花もいけられるし、どんな形にも作る事が出来る。

焦茶色で菊の柄のように彫刻された図案だ。

力強いけれど、主張しすぎず、いける花の事を考えて作られた良い花器だなと思う。

小豆柳、椿、臙脂菊と冬らしい静かな取り合わせだが、花器のお陰で足元がしっかり支えられて温かみも感じられ、長い間飾っておくことも出来た。

花器が美しいと花との接点も気をつかう。

祖父も足元には焦茶色に合う綺麗な色の花を置いていた。

椿の葉が多くかかり過ぎないように、重くならないように何度もカメラのレンズを覗いた。

花材　小豆柳（柳科）
　　椿（椿科）
　　スプレー菊（菊科）
花器　方形陶花器



立派な金魚草

櫻子

10月の関東支部いけばな展で、いろんな色の金魚草を主材にしていけておられる人がいたが、細い横長の花器の口から舞出るような金魚草が印象的だった。さて、京都の花屋でも見事な金魚草が売られていたので私もいけてみることにした。12月初旬にこんな金魚草が手に入ることを覚えておこう。

作例では黒地に銀と金で彩色された箱形の陶花器に濃赤色と純白の金魚草を立て、足元に大輪のダリアを添えて花器の口元を整えた。花器の模様を隠したくないので、ダリアを短く挿しただけで、余計な葉ものは加えていない。

金魚草で思い出すのは、「花ふたり旅」の本の中で、母がドイツのケルンでいけた花。赤色、臙脂色、オレンジ色の金魚草に白色とクリーム色のストックを混ぜていけられている。器は葉でつくられたリースでこれも又濃い臙脂色なのだが、ブロンズのモニュメントの前でそれらの強烈な色彩がとてもよく合っている。この感覚は流石だと思う。異国の地で限られたスケジュールの中、場所を探し、花と器を手に入れて写真に撮るのは至難の業。「花ふたり旅」は両親の宝物であり、また私たちみんなの宝物だ。両親に感謝。

花材　金魚草（胡麻葉草科）
　　ダリア（菊科）
花器　金銀彩箱形陶花器



耳付花器

櫻子

花器に耳が付いているのと付いていないのとでは、何がどう違うのだろう。

今月号には二つの耳付花器に花をいけている。どちらも絶妙なバランスで耳が付いている。見ていて飽きない。器によっては、耳が無いほうがシンプルでいいのになと思うような耳がとってつけたように付けられた器もある。器の耳は奥が深い。

耳の役割は装飾性にあると思う。耳の雰囲気が器の印象を決定づけると言ってもいい。

このページの花器のように、付けられた耳がお洒落な形だと、花の取り合わせや花型も垢抜けた感じになる。また、表紙の花器のように獣の顔の耳がついていたりすると、格調高い雰囲気が要求される。知らず知らずのうちに、器の耳が私たちのいける花に影響を与えているとすると、耳おそるべしだ。

というわけで、チョコレート色のカラーと深紅のレナンセラ、白い実の南京櫨という取り合わせには、きっとこの花器が合うと思っていけてみると、やっぱりいけ映えがする。きゅっと締まった足のくびれが、花型に動きを与えてくれている。そして腰に手を当てたような形の耳は、全体の引き締め役だ。

花材　南京櫨（燈台草科）
　　チョコレート色のカラー（里芋科）
　　レナンセラ（蘭科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　耳付陶コンポート（宇野仁松作）



古清水の器

〈2頁の花〉　櫻子

松竹梅の舟鉢に蘭（オンシジウム・オブリザタム）とシクラメンをいけた。

この器は古清水（こきよみず）写しの器。古清水とは江戸時代前期に確立された焼きものである。清水焼に磁器が登場する幕末期以前の焼きものをこのように呼んでいた。

京焼の野々村仁清（にんせい）を起源とし、優雅で美しく、その当時のお公家さんの好みや宮廷文化の影響がある。それまでは茶道文化の影響で侘び寂び的な焼きものが多かったこともあって、華やかなものへの要望も強く、色絵や絵付けの美しい器が作られている。

京焼清水焼は今も同じ技術で引き継がれ次の世代も育っている。

花材　オンシジウム・オブリザタム（蘭科）
　　シクラメン二種（桜草科）
花器　古清水舟鉢



銀色に輝いて

〈4頁の花〉　櫻子

日を増す毎に花芽が大きくなり銀色に輝いてきた。初春の会での迎え花にいけた赤芽柳と薔薇、胡蝶蘭の盛花。赤芽柳は20本だが、枝分れも数えると40本ほどになると思う。

三彩釉の水盤は、花材を沢山用意していけ終えても、足りないかな?と思うくらい大らかに包み込むような大きな器だ。清水保孝さんの作品だが、花器として作られたのだろうか。それとも大鉢だろうか。私としてはいつも沢山の本数が挿せて有り難いと思って花をいけさせて頂いている。

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2014 年
3 月号
No. 609

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





花器　白色陶鉢

雪の中で

〈表紙の花〉　櫻子

今年の立春は、前日に比べて急に気温が下がって真冬の寒さが戻ってきた。

その週末の岡山行きの新幹線は、京都の雪も溶けていたので、安心して乗り込むと姫路辺りから雪景色になってきて、相生、岡山と雪は降り続く。

いつもなら京都に雪が積もっていても、晴れている土地なのに。珍しい風景に何度も写真を撮った。岡山駅に着くと改札辺りは大混乱、電車の発着も大幅に遅れていた。

2月は結局3週間近く寒い日が続いた。

1月の下旬にいけた雪柳とチューリップの盛花は、春の温かな兆しを感じるようにといけたのに、まるで雪の中で咲いているようだ。

少しでも花が開くように雪柳の足元を割って、皮を削って枝を少し短めにして剣山に挿し直している。そうすることで再び寒い日がやって来ても最後まで力強く咲いてくれる。

雪の中でタクシーを長い間待ち続けて、やっと稽古場にたどり着いた。

今そんな事を思い出しながら、この花の原稿を書いている。

花材　雪柳（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
　　プリムラ・ポリアンサ
（桜草科）

器の選択

〈2頁の花〉　櫻子

連翹（れんぎょう）の花を見ていると、春のやわらかで温かな日射しを感じる。オレンジ色の立派な薔薇（ばら）を取り合わせて、アンスリウムの小葉でみどりを足した。

いけばなで最も大きなウエートをしめるものに器がある。いい花材で、いい取り合わせで、いけ方にも工夫があるのに、何かハッとする感動がない場合は、器の選択が良くないことが多いように思う。

逆にとてもシンプルないけばななのに、なにか心に残る趣がある場合は、器の選び方が抜群だったりする。

いけばなの印象は器によって左右されると言ってもいい。

いける技術を磨く一方で、もっといける器についても研究する必要がありそうだ。

この三月に、京都のやきものの窯元との企画イベントがある。魅力的な器に出合えるように、互いにいい刺激になればと思っている。

花材　連翹（木犀科）
　　薔薇（薔薇科）
　　アンスリウムの葉（里芋科）

花器　格子柄陶花器



白花満作

櫻子

糸状の白い花が枝の先端に無数に集まってブラシのような形をしている。初めて出会う不思議な花なので、葉の出ていない枝の姿をそのまま見せるように、小さな花の黒百合を取り合わせ、足元に庭から蕗の薹を切ってきて加えた。小さな蕗の葉も入れている。

花屋では穂咲満作と呼んでいたが、一般には白花満作、もしくはフォザギラ・マヨールと呼ばれている。

北アメリカ原産の落葉低木で、春に咲く白い花は花弁ではなく雄しべである。花は甘い香りがする。花に少し遅れて出る葉は、秋に美しく紅葉するらしい。

日本の林に咲く一人静に花の感じが似ている。日本の野の花と合わせても違和感がなさそうだ。白花満作はアメリカのどんなところに咲くのだろう。そこにはどんな動物がいるんだろう。鳥の鳴き声。風の音。想像をふくらませて、花の故郷に思いを馳せるのも楽しい。

花材　白花満作（満作科）
　　黒百合（百合科）
　　蕗の薹（菊科）
花器　水色ガラスコンポート

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2014 年
4 月号
No.610

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





花は自分そのもの

〈表紙の花〉　櫻子

「いけた花は自分そのもの」。私はいつもそう思って花をいけている。

そんなふうに思えば、いけたあとも水をかえ、いけ直し、短くなっても最後まで世話をするようになる。花に対する敬意と愛情を大切にしたい。

客観的に見ても、花を選び器を選んでいけた花には、いけた人の好みや内面が表れる。皆さんにも自分の好きな色の組みあわせみたいなものがあるだろう。ご自分で花を買っていけた花は貴方そのものだ。

表紙の青麦とアネモネの盛花も、赤色のクロトンを選んだ時点で、アネモネは赤色だけにして器は白がいいなと直感した。赤い花と葉から伸びる青麦の柔らかな緑が目に優しい。自分にこんな雰囲気があったのかと驚いたが、これもまた私の花なんだと愛着が湧いてくる。

花材　青麦（稲科）　アネモネ（金鳳花科）
　　クロトン（燈台草科）
花器　帽子型陶水盤（ドイツ製）

木製の器

〈2頁の花〉　櫻子

生活用具として作られた民芸品も花器として使うと花を引き立ててくれて、又郷土的な面白さも加えてくれる。祖父が何度も花生けに使っていた中に韓国製の木鉢があった。

米を選別する器で、側面に段々の刻みこみがあって、この器に米を入れ、振りながら選別する器具で、農具のうちの一つである。

材質は松の木のようだ。長い間仕舞いこまれていた。古くて素朴すぎるので、両親は使わなかっ



たんだろうか。私は思い出の器として、又使っていきたいと思う。

陶の水盤を入れて剣山を使い、ミモザアカシアとチューリップ、スイートピーをいけた。畑で育った健康的な花なら調和すると思う。

たっぷりとした容器なので、大きく派手に咲く花も受けとめてくれる。パーロット咲き（オウム咲き）のチューリップもミモザアカシアも軸が太く、長い間きれいに咲き続けてくれた。

花材　ミモザアカシア（豆科）
　　チューリップ（百合科）
　　スイートピー（豆科）
花器　木製鉢（韓国製）

花の気品

〈10頁の花〉　櫻子

スカビオサ（松虫草科）にはいろんな色がある。私が選んだのはワインレッドのスカビオサ。静かに人を惹きつける魅力がある。なんて綺麗な花なんだろう。風格と気品も感じられる。とり合わせには同系色の大輪の薔薇（薔薇科）とライラック（木犀科）を選び、淡いブルーと白のベネチアン・レース・グラスにいけた。

薔薇もライラックも思い切って短くいけ、スカビオサを主役にしている。気品のある花をいける場合は、それに見合う品格の高い器を選びたい。

花器　ベネチアン・レース・グラス

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2014 年
5 月号
No.611

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



大輪のクレマチス

〈表紙の花〉　櫻子

クレマチスと呼ぶと洋花。鉄線と呼ぶと和花。呼び方で洋と和にイメージが変わるけれど、やはり私は鉄線と呼んでしまう。

日本や中国では大輪の鉄線を鉢に仕立てて鑑賞する事が多いが、ヨーロッパ原産のクレマチスやその交配種は家の壁に這わせたりアーチに絡めたりと随分景色も変わる。どちらもそれぞれに鉄線の優しい姿が表れて美しいと思う。

この花も満天星の枝に絡ませて広げたり下げたりして鉄線の自由にさせていけてみた。

花材　満天星（燈台躑躅・躑躅科）
　　鉄線（金鳳花科）

花器　長首陶花瓶



ポインセチアの仲間

〈3頁の花〉　櫻子

枝だけのような植物はミルクブッシュと言ってトウダイグサ科・ユーフォルビア属で、ポインセチアの仲間であり多肉質の枝を持つ。

茎に傷をつけるとそこから白いミルクのような樹液を出すのもポインセチアと同じだ。緑色の茎が多いが、今回のものは優しいピンク色をしていた。

同じような形で立ち上がっているのはアンスリウムの蕾。二種ともユニークな姿で先が尖っている。

海中深くピンク珊瑚の間を魚が自由に泳ぐような景色を思い浮かべて。

花材　ミルクブッシュ（燈台草科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　御影石花器



カラーと薔薇

〈10頁の花〉　櫻子

花材　カラー（里芋科）
　　薔薇（薔薇科）
　　ニューサイラン（竜舌蘭科）
花器　ガラス水盤



カンガルーポーと海葡萄

〈11頁の花〉　櫻子

花材　カンガルーポー（ハエモドルム科）
　　シーグレープ（蓼科）
　　カーネーション（撫子科）

花器　白釉陶花器



カラーとアジサイ

〈9頁の花〉　櫻子

花材　カラー（オレンジ、黄色）
　　紫陽花（あじさい）（紫色、白色）
花器　カットガラス花器



初夏の山

〈10頁の花〉　櫻子

花材　裏白の木（薔薇科）
スイートメモリー（百合科）
撫子（撫子科）

花器　染付花器



いばら二種

〈11頁の花〉　櫻子

花材　難波茨（なにわいばら）（薔薇科）
　　浜茄子（はまなす）（薔薇科）
　　アスチルベ（雪の下科）
花器　ガラス花瓶



芦屋の花屋さん　櫻子

　ＪＲ芦屋駅の近くに、芦屋マダム御用達の素敵な花屋さんがある。三ヶ月に一度はこちらの歯医者さんに通っているので、この花屋さんに立ち寄るのを楽しみにしている。

　小さなお店に所狭しと枝もの、花、観葉植物が置かれているのだが、買うよりも何時までも眺めていたいお店なのだ。

　店内の中央には白～ピンク～紫色にかけての花が盛るように配置され、裏に回ると黄色からオレンジの花が鮮やかに飾られている。大きな枝はそれらの花々の上で広がり、窮屈に括られていない。

　綺麗に見せるコツとセンスが有るのだと思う。

　観葉植物や多肉植物なども数は少ないが、見たこともない様な珍しい物が多い。それら全てが鉢のままで売られていない。ベルギーやフランスの焼きものに入れられている。

　今日はユーフォルビア・オンコクラータというトウダイグサ科の植物を買って帰った。茎が棒状に伸びるのが本来の姿なのに、左の茎は石化して珊瑚のような形をしている。植物が石化する理由はよくわからないが、ちょっとふてくされた様にも見える。

　そういえば最近石化している花（鶏頭やアンスリウムの花の部分など）を好んでいけている。

　ユーフォルビアは育てたいので、根付きのまま深い鉢に入れ、ゼラニウムと取り合わせた。



市松模様の器

〈2頁の花〉　櫻子

おやつをいれておきたくなる器。色とりどりの飴のかわりに、3色の蛍袋をいけた。

花材　珍至梅（薔薇科）
　　蛍袋三色（胡麻の葉草科）
花器　釉彩市松蓋物（横山武司作）



撫子が主役

〈3頁の花〉　櫻子

たった一本の撫子だけど、配色と花形次第で主役にできる。

花材　猿捕茨（さるとりいばら）（百合科）
撫子（なでしこ）（撫子科）
紫陽花（あじさい）「紅（くれない）」（紫陽花科）

花器　澱青釉紫紅斑花瓶
（宮下善爾作）



スモークツリー

〈11頁の花〉　櫻子

向日葵の黄色と、花器のモザイク柄にある黄色との関連性が面白い。

花材　スモークツリー（漆科）
　　向日葵（ひまわり）（菊科）
　　アンスリウムの葉（里芋科）
花器　石垣手花入（森俊次作）



出合い花（10）

櫻子

薔薇

フランネルフラワー

家元がはじめた「出合い花」だが、いざいけてみるとなかなか難しい。「テキスト」のために写真撮りをする以上、普通の一輪挿しではだめだと思うからかもしれない。

たった二本のいけばなのに、とても奥が深い。

新鮮な出合い。

とっておきの器えらび。

この二つのテーマをクリアしなければならない。

でも、日常の中で、たとえば来客前に急いで花のいけかえをしているような時に、いい感じの出合い花を自然にいけていることも多い。そんな時には、「新鮮な季節の花を、洒落た器に」と考えながらいけている。

「出合い花」にはいけばなのエッセンスが凝縮していると思うので、是非みなさんにも挑戦してみてほしい。新たな発見がきっとある。

大好きなイブピアッチェという薔薇に、優しいフランネルフラワー。あまり考えすぎずに、本能的に好きな花を組み合わせてみた。

花材　薔薇（ばら）「イブピアッチェ」
（薔薇科）
フランネルフラワー
（芹科・オーストラリア原産）

花器　結晶釉細口花瓶
（前田保則作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
8 月号
No.614

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





サラセニア　〈表紙の花〉　櫻子

サラセニアは、長い筒状の葉で虫を捕らえる、いわゆる食虫植物だ。北アメリカ東部からカナダの湿地に分布する。

珍しく切り花でサラセニアが売られていた。筒と蓋の部分にある赤い網目模様が綺麗だったので、それが目だつようなとり合わせにした。

花材　サラセニア（サラセニア科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　スモークグラス（稲科）
花器　赤黒ガラス花器

タニワタリノキ　〈3頁の花〉　櫻子

谷渡の木は茜科の常緑小高木。日本の九州中部以南から中国、東南アジアまで分布する。球形の花が愛らしく、鉢植や切り花でもお目にかかるようになってきた。

作例の枝はアメリカタニワタリのようだ。こちらは北アメリカ原産の落葉低木。明るい葉色が爽やかだ。いずれも谷などの湿地に生える。

花材　姫百合二種（百合科）
　　谷渡の木（茜科）
花器　通草蔓手付籠



グリーンカトレア

櫻子

知性があり完成度が高く、最も調和のとれたかたちである植物は蘭の花らしい。昆虫に与える花蜜も、正確に運んでもらう花粉も、緻密に計算して失敗のないように考えて、自分達の美しい姿を守ってきた頭の良い花の一族。

カトレアは熱帯の植物だが、ブラジルから苔や地衣類を運び出す際に、それらを梱包するために使われたらしい。この荷物を受け取ったカトレイ氏は梱包用に使われた葉の厚い植物に興味を持ち、育てたところ大輪の花が咲き人々を驚かせたという。１８２４年の事である。その蘭は増殖が遅く栽培に多くの経費がかかった。

特にカトレアは高嶺の花だが、こんな劇的なデビューだったとは！

その後、この蘭は高値で取り引きされ、西欧で品種改良が進んで、今では四輪立ちのグリーンカトレアも栽培されている。

この珍しい花を咲かせるまで何年かかったことだろう。

同じ蘭科のオンシジウムと取り合わせて、ミントグリーンの色を際立たせた。

花材　グリーンカトレア（蘭科）
　　オンシジウム（蘭科）
　　葱坊主（ユリ科）
花器　紺色ガラス花瓶



明るい洋花

櫻子

ブルーベリーは夏櫨の仲間だが、北アメリカ原産。南アフリカ原産のグラジオラスと北アメリカ原産の向日葵を合わせると、明るいいけばなになる。

花材　ブルーベリー（薔薇科）
　　グラジオラス（菖蒲科）
　　向日葵（菊科）
花器　角形花瓶（ヘレンド）

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2014 年
9 月号
No.615

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





山の風情

〈表紙の花〉　櫻子

山地の夜風の冷たさに色付き始めた七竈。夏の名残の高砂百合と、弾けはじめた山芍薬の実、山野草の鉢植で売られていた田村草といっしょに水盤に低く広がるようにいけてみた。水際に見えている七竈は、かなり前へ張り出している。器に水をはると、草木がほっとした表情を見せてくれる。

花材　七竈（薔薇科）　高砂百合（百合科）
　　山芍薬の実（牡丹科）　田村草（菊科）
花器　黒花模様水盤

秋色のアンス

〈3頁の花〉　櫻子

丸葉の木が秋色に色付きはじめた、かと錯覚するが、これはアンスリウムで、みんな少しずつ色が違う。季節の草花とあわせてみるとまさに秋の風情。「花の色は、こだわりをもって生かす。」ことができるかどうかが鍵になる。

花材　三島紫胡（芹科）　黒稗（稲科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　手付陶花瓶



花と葡萄

櫻子

花屋さんに一輪だけ柳蘭（やなぎらん）が残っていた。

背が高くてピンクの濃い色の花なので、とてもよく目立つ。空気のきれいな信州の草原から送られてきたのか。多分近くに咲いていたであろう鬼百合、金水引も一緒にいけたいと思って買って帰った。

岡山から届いた新鮮なもぎたての葡萄とカラフルな高原の花。暑さも少し和らいで、秋の気配を感じる。

柳蘭は葉が柳に似ていて、花を蘭にたとえてこう呼ばれる。北米では針葉樹林帯の山火事の跡にこの花が大群落となるのでｆｉｒｅ　ｗｅｅｄ（火の雑草）と呼ばれている。夏の終わりには雪のような真っ白な種子が風にのって舞い、それは雪のようにも見えるらしい。多数の種子を作り、風で飛ばし、常に新しく群生できる場所を探す花なのだ。

花材　柳欄（豆科）
　　鬼百合（百合科）
　　金水引（薔薇科）
　　葡萄（マスカット）
花器　陶茶碗　塗盆

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
10 月号
No.616

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



花梨（かりん）

〈表紙の花〉　櫻子

花屋さんで花梨を見つけた。しなやかな枝の雰囲気に惹かれて活けたくなった。かりんの実はとても重い。重すぎて枝から落ちることもあるらしい。その実を支える枝はとても硬い。

硬くて重い木を活けるのは難しいので、そんな時は盛花はまずやめた方が良い。投げ入れで安定の良い花器を選ばないと倒れる事もありうる。

余分な葉は取り去り実の艶やかな美しさを見せたいと思う。この秋一番の大輪の一文字菊と赤いボリスベッカーを取り合わせて。

花材　花梨（薔薇科）
　　菊2種（菊科）
花器　焼締花器



稲科の植物

〈2頁の花〉　櫻子

夏の終わり頃から好んでグリーンスケールを活けている。

偽小判草（にせこばんそう）という和名だが、本来の小判草よりも花穂が平たくて艶がある。稲科の植物だが、葉も花穂も良く日持ちしてくれて、少しずつ枯れ色になりながらも足元の花を引き立ててくれた。

稲科の植物たちも多彩になってきた。昔から使われてきたのは薄（すすき）や粟（あわ）、唐黍（とうきび）、パンパスグラスなどだが、今回のグリーンスケールを始め、オバタス、バニカム、スモークグラス、などはまだ知らない人も多いかも。

1本ならとても優しく弱々しいが、集めていけると稲科らしい強さが現れる。実際見た目だけでなく丈夫な草花だ。取り合わせた花が終わっても、又新しい花といけ直したり、ドライフラワーとして暫くの間飾って楽しんでいる。

稲科は、食物としていけばなとして、本当に感謝すべき植物。

花材　グリーンスケール（稲科）
　　ビバーナムの実（忍冬（すいかずら）科）
　　鶏頭4色（莧（ひゆ）科）

花器　波文陶花器



仁清生地（にんせいきじ）の花入れ

櫻子

仁清生地とは京都の清水焼を形にした野々村仁清の作風を生かした生地の事。淡い卵色の生地で暖かみのある焼き物である。

縦線の柄が素朴で優しいので、秋の風情を感じる花を取り合わせた。

花材　チョコレートコスモス（菊科）
　　アスチルベ（雪の下科）
　　オランダセダム（弁慶草（べんけいそう）科）

花器　仁清線模様花瓶

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2014 年
11 月号
No.617

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



山野草の紅葉（こうよう）

〈表紙の花〉　櫻子

山芍薬（やましゃくやく）の葉はバラバラで間が空いていけにくいと思っていたが、見事に茂ってしかも色づいている。２本花瓶にいけただけでも充分迫力がある。長くは持たないが、一時（いっとき）でも山の命を感じることができる幸せ。山採りか栽培か、いずれにしても採る人や育てる人に感謝の気持ちをもって、大切に花をいけたい。

特別な花材には、いい器を。蔵の奥から大きな花器を出してきて、山芍薬をいけるとぴたりとおさまった。鍾馗水仙（しょうきすいせん）（リコリス）と紅葉した薄（すすき）の葉は、季節の色と空間のひろがりに。

花材　山芍薬の実と葉（牡丹科）
　　薄（稲科）
　　鍾馗水仙（彼岸花科）
花器　掛分花瓶（清水保孝作）



西洋陶器にいける

〈3頁の花〉　櫻子

糊空木（のりうつぎ）の園芸種「水無月（みなづき）」は、白い装飾花が無数に集まって大きな花序をつくっている。どこか外国の香りのする花なので、花器にはデルフトを選んだ。デルフト陶器はオランダの焼き物。「花ふたり旅」ではこの器に母が二種類の向日葵をいけている。絵付けに赤色が入っているためか、秋色の花が似合う。私も母と同じ色合いを合わせている。

水無月の優しい秋色はあえて後ろに配置し、木苺の濃い秋色を前に重ねて全体を引き締めた。明るい黄色の薔薇で、色調にメリハリをつけた。

花材　糊空木（のりうつぎ）（紫陽花科）
　　薔薇（薔薇科）
　　木苺（薔薇科）
花器　デルフト陶花瓶

和食〜京と広島　世界が認めた自然の恵み（詳報）

広島・京都文化フォーラム2014

■ 冒頭発言

祝いや弔事の場に不可欠　荒木さん



京都の伏見で、魚三楼という料亭を営んでいます。1764年に初代が四国の讃岐（香川県）から出てきました。江戸時代、伏見と京都は違う町でした。江戸、大坂、京、の三都に次ぐ都市の一つで、伏見港という港がありました。

伏見は、幕府の直轄地です。参勤交代で西国の大名は、三十石船に乗り大坂湾から1日がかりで川を上って来た。そこに藩邸があり、休んでいくんですね。そういう歴史の中で私どもは、できるだけ瀬戸内海の魚を使った料理を提供しようと今も目指しています。

タイという魚は、日本中で珍重されますし、おいしい魚です。昔は、タイのことを魚（うお）と呼んでいました。高級魚を表すのが、魚三楼の「魚」です。

京都の料理とはどんなものでしょう。宮中料理である有職料理、武家の本膳料理、京都には数多いお寺の精進料理、そしてお茶の懐石料理。それらが全て合体して、町衆に食べやすくしたのが今の京料理といわれています。有職料理といっても、食べる機会はほとんどない。本膳料理も今はなかなかありません。けれども、そのエキスは京料理に入っていると思います。

京都は、本当に四季が表れやすい。冬は芯から冷えます。春は桜を楽しめる。夏は、嫌というほど暑いです。秋になると紅葉ですね。それをいかに料理に落とし込み、目で楽しむかというのが、京料理です。

和食が無形文化遺産となりました。季節感があり、多彩な食材があり、いろいろな調理法があるのが日本料理です。正月は一族で祝い、春は花見でうたげをする。そうした多様なお祝いや弔い事がある。家族や知人が集まり、会食をする。そうした役割も文化遺産に選ばれた理由の一つです。

もう一つは、口の中で調理するということ。つまり一汁三菜。白いご飯を食べるために、おかずを食べ、ご飯を食べ、みそ汁をする。いろんな食材を複雑に食べるのは日本人ぐらいだそうです。京料理はそうした和食らしさを多く含んでおり、次の世代に伝えていこうと頑張っています。

普段のご飯作りを大切に　桑原さん



私は、京都の真ん中、中京区に住んでいます。まだまだ京都には、街中にも町家がたくさんあります。江戸時代から続く、いけばなの家に生まれ、夫が15世家元を務めています。

玄関を入ったところに細い路地があり、長さは30㍍あります。路地を入ってくる皆さんは、最初は緊張して来られるのですが、水を打ってあり、季節の花を飾っているので、ほっとされるようです。そんな思いをしてもらえたらと、いつも打ち水をしています。

家の至る所に花があり、稽古で残った花は、玄関や高卓の上に飾り、もちろん床の間にもあります。中庭には白川砂を敷き、季節の木、花を植えています。

うちの流派を始めた桑原冨春軒仙溪は、立花の名手でした。自然をうまく取り入れた花を立てた人です。立花は、いけばなの元の姿。お寺の本堂や仏壇の供花などで、これに近い形をご覧になったかと思います。立花は江戸時代中期になると、もう少し生けやすい生花という形になりました。

私は、こういう家に生まれ、小さい時から花と一緒に暮らしてきました。一見、優雅なようですが、花器の出し入れや花を挿したり抜いたりと、休みなし。何て大変なんだろう、とずっと思っていました。

そこで、毎日のご飯を私がちゃんと作ってあげたら、きっとみんなもっと健康になれるし、重たいものも担げるのではと思いました。そうして自然に料理の道に入っていきました。

私は小さいころからおばあちゃんにご飯を作ってもらい、昔ながらのおばんざいを食べてきました。それがあまり好きではなくて。でも今は、常備菜にもなり毎日の食事にうまく取り入れたい、と思っています。

何でもない普段のご飯を作ることを大切にしたい。いけばなも本職で大切な仕事ですが、私は数カ月に1回、料理サロンといって、いろんな人に料理の魅力を伝える教室を開いています。そこでは、楽しくなるような料理を提案しています。自分ではかっぽう着姿のようなスタイルが1番似合うと思っています。

広島湾北側は「箱庭の海」　川上さん



広島の海の魚介類で1番に挙げられるのがカキ。養殖の始まりは、江戸時代の初め、広島に移封された浅野長晟（ながあきら）が紀伊（和歌山県）から持ち込んだとされる。石に種を付けて沖にまいて大きくするので、家で食べるくらいしか採れなかった。それが、浅瀬に置いた竹や細い枝に幼生を付着させて育てる「ひび建」が導入されて発展した。

私が長年暮らしてきた広島市南東部の丹那地域では、1780年ごろにひび建ができたようです。南風を受ける広島湾では地域ごとに建て方が違います。

今の若い人には想像できんでしょうが、私が子どものころは丹那沖にも広々とした干潟があり、すごい数の生き物がすんでいた。波止場を抜けて一歩外へ出ると、もうシャク（アナジャコ）の穴がある。20匹、30匹と釣って、天ぷらにしてもらう。そのうまいこと。今の若い人は魚離れして、海のものに見向きもせんようなけど、そういう人に食べさせてあげたら、すぐ海に戻って来る。絶対。それぐらい、おいしかった。

じっちゃんと櫓をこいで島に渡り、ガザミというワタリガニを捕る。前の晩に仕掛けて朝に揚げると、15匹も20匹も捕れた。

貝もオオノガイ、マテガイなど。これらも天ぷらがうまかった。タコでもマダコや手長ダコがおって、ウナギもよう釣れた。

広島湾の魚介類で1番目がカキなら、2番目は小イワシ。刺し身、天ぷらがうまい。3番目はチヌ（クロダイ）。独特のにおいがするが、調理してそれを除けば味そのものはタイよりうまいと思う。チヌ飯という丹那に伝わる伝統的な炊き込みご飯もある。

私は広島湾北側を「箱庭の海」と名付けた。カレイやアイナメアナゴ、ウミタナゴ、ギザミ、キスと、いろいろな魚がカキいかだの周りにいる。近年はアマモ場が少なくなり、メバルやカレイ、カワハギが減ってきた。箱庭の海で取れた地物の魚は最近、広島の市場でもごくわずか。近海物といっても、山口や岡山などから来る。私たち漁師にはどうにもならない面もありますね。

多彩な味わいやヘルシーさから、海外の人たちも魅了する和食文化を再発見しよう。「和食〜京と広島　世界が認めた自然の恵み」をテーマに9月20日、広島市中区の中国新聞ビルで「広島・京都文化フォーラム2014」（中国新聞社、京都新聞社主催）が開かれた。

京料理店の主人、華道副家元の料理研究家、広島のベテラン漁師が昨年、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録された和食を未来に伝えていくヒントを探った。

パネリスト

「魚三楼」主人
荒木稔雄

華道桑原専慶流副家元・料理研究家
桑原櫻子

元広島市丹那漁協組合長
川上清

コーディネーター

中国新聞社文化部長
渡辺拓道

目と舌で季節を味わう

だしのうまさ膨らませ 心こめた調理で絆強め 自分で作った味が最高

荒木さん　桑原さん　川上さん

■幸せな思い出

―皆さん、食にまつわる幸せな思い出をお持ちだと思います。紹介していただけますか。

川上　18歳からカキ養殖をし、現在84歳。元気にこられたのは、ずっとカキを食べてきたからでしょう。大自然の恵みであるカキやイワシ、そういうものをしっかり食べてください。

十数年前、日本全国から干ぐらい集まる魚料理のコンクールに「カキの3点盛り」を持って行き、それが入賞しました。その2年後には、あなご丼でも入賞、それはうれしかった。

千葉県の銚子市長さんから、小イワシ料理を教えてほしいと現地に招かれたこともある。海流の影響か、大きなイワシが捕れなくなって小イワシが揚がるようになった。でも、食べ方を知らんのじゃいうて、刺し身に天ぷら、ぬた…、奥さん方に喜ばれました。

桑原　昼夜のいけばなの稽古などで忙しく、私の小さいころは家族それぞれが出先で食事をして帰っていた。学校から帰ると誰もいなくて、寂しい思いをしました。それで大学生の時、母に代わって私が料理を担当しようと決めたんです。

初めのうちはカレーライスやグラタンしか作れなかったけれど、楽しみにして帰って来てくれる。みんなが夕食の時間に集まってご飯を食べる。いろんな話ができ、食事の時間は大切なものなんやな、ほんまに家族の絆が強まるんだなと実感しました。それに、料理好きの父から作る楽しさを教えてもらったことで、今の私があるのだと思います。

荒木　私は家内と長男、長女、次女と5人家族。食についてしゃべっていると、みんなが台所に寄ってくる。夜は、おかみの仕事を終えて家内が帰宅するころまで娘たちが何か作っていたり、長男がそこに帰って来たり。そんな光景を見ることがうれしいなと。家では京料理みたいなものは出てきません。何かというとチーズだったりハムだったりしますけれど、家族が和気あいあいとしている姿というのが、本当に幸せなことじゃないかと考えています。

■食習慣はいま

―ファストフードが当たり前になるなど、日本人の食習慣が変わってきました。食文化について気になること、心配なことをお聞かせください。

荒木　ライフスタイルの変化といいますか、特に若い人たちは走り回っているような時世です。何かをかじりながら電車に乗っている。行儀は悪いけれど、そんな時しか食べられへんのかなとも思います。

日本食のそば、天ぷら、すしも、江戸時代はファストフードです。スローフードでなければ、ということもないでしょう。

だしのもとなども、使いようやと思うんですね。もしなかったら、今の家庭でおみそ汁はどうなっているだろうかと。だしのもとも日本料理の一翼を担っている部分はあるわけです。

ただ、十把ひとからげにしない。ええもんを食べに行くときはええ格好して、いい雰囲気で。忙しいときは、牛丼店でささっとかき込んでというのもありやと思うんですね。忙しい中でも食べるときの楽しさは一緒。それを共有していけたらなと考えています。

桑原　みんながもっと家の味を大切にしてくれたらいいのにと思います。どの都市でも行列ができるようなお総菜屋さんは、同じような味です。売れている分、ちゃんと管理されているというか、その土地の特色の味はないんですよね。家庭を考えてみてください。例えば卵焼き。それぞれの家で違う。甘かったり塩辛かったり、形が悪かったり、軟らかかったり。

また、料理は勘を養ってくれると思うんですよ。肉や魚の焼き加減、野菜のゆで加減は、レシピでは表記しにくい。大きさや量も、その都度変わる。自分で料理して慣れてくると、外へ食べに行っても、大体のことは分かるんですね。おいしいとか、まずいというだけではなく、料理が、心を込めて作られているかということが分かるようになる。そこが、自分で料理する一番大切なポイントであると私は思っています。

―冒頭で若者の魚離れを指摘された川上さんは、かき料理で76の創作レシピをお持ちです。おいしく食べるこつは何でしょう。

川上　公民館で「漁師の作る魚料理」の講師をしていて、カキも時々やります。コンテストで入賞したカキの3点盛りのうち一番簡単なのは二ンニクオイル炒め。薄切りにしたニンニクをサラダ油でちょっと焦げ目が付くぐらい炒める。それを取り出して、次にカキに小麦粉を付けて両面をうっすら焼く。中に火が通ったところで、かきしょうゆをぱっとかけ、混ぜて食べる。これが一番うまい。

どの料理も、カロリーや栄養分がどうこうというよりも、作って自分の味で食べてほしい。私は、それが最高だと思います。

■何ができるか

―これからの和食文化はどうあるべきか。また、何が期待され、私たち市民には何ができるのでしょう。

荒木　日本料理で一番大事なのは、だしの文化です。いりこ、カツオ、スッポン、フグ…。いろんなだしがあります。中でもカツオと昆布のだしがとりわけ重要だと思います。

フランスでは近々、かつお節を作る話があるそうです。世界ナンバーワンレストランのシェフは、シカ肉を使って、しか節を作っています。北海道ではサケで節を作っています。

なぜ、だしが世界でもてはやされるのかというと、だしはゼロカロリー、健康的です。だしのうま味成分は、満腹中枢を刺激する物質を含んでいる。外国人が日本料理を食べていると、そんなに食べていないのに、おなかがいっぱいになったような感覚になるという話をよく聞きます。

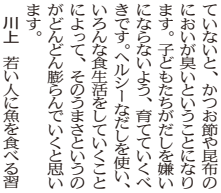
だしは、小さいときから慣れていないと、かつお節や昆布のにおいが臭いということになります。子どもたちがだしを嫌いにならないよう、育てていくべきです。ヘルシーなだしを使い、いろんな食生活をしていくことによって、そのうまさというのがどんどん膨らんでいくと思います。

川上　若い人に魚を食べる習慣をどうつけてもらうか。結論は出ません。戦時中は米ぬかと麦ぬかをベースにヨモギを混ぜた蒸し団子がうまかった。戦後は米も野菜もなく何でもおいしかった。だから私は嫌いなものがない。今の人はぜいたくに慣れていますが、昔の食べ物も知ってほしいですね。

桑原　先日出演したNHKの「きょうの料理」のテーマが「おふくろの味」。おにぎり、親子丼、いなりずしを作りました。その後、皆さんからメールやお手紙をいただいた。驚いたのは、いなりずしが皆さんそれぞれ、おふくろの味やと。その家の味が、ある程度の年齢になると懐かしくなり、自分で作ってみようとなるのでしょう。私は今まで、自分の家の味を守ってきました。こういうことを言い続けないといけないなと感じています。

海外で日本料理が認められるのは、日本人の勤勉さや器用さがすごく関係している。例えば繊細さから生まれた松花堂弁当は和食の文化やと思います。

皆さんが、毎日の食事を大切に思う気持ちを持ってくだされば、日本の食文化はずっと尊敬してもらえるはずです。



桑原さんの創作料理「焼き栗ご飯と里芋の田楽」



来場した人たちは、和食の奥深さに触れ、興味深そうに聞き入った



広島や京都の豊かな食材を生かした和食の魅力や継承について語り合うパネリストたち
（広島市中央区の中国新聞ホール）

あらき・しげお　1960年京都市生まれ。愛知学院大中退。伊勢長帝国ホテル店を経て、87年、料亭・魚三楼入社。2008年から魚三楼代表取締役。日本料理アカデミー総務委員長、日本レストラン協会理事、京都料理組合理事などを務める。

くわばら・さくらこ　1960年京都市生まれ。甲南女子大卒。両親は華道桑原専慶流の14世家元夫妻。祖父にいけばなの指導を受け、21歳で副家元を襲名。古典の立花、生花を今に伝える。NHK「きょうの料理」の講師を務め、家庭料理のサロンも開いている。

かわうえ・きよし　1930年広島市生まれ。広島一中（現国泰寺高）を卒業し、48年から地元の丹那町でカキ養殖を中心に漁業に従事。78年から2004年まで丹那漁協組合長。公民館講座で魚料理を教え、江戸時代の「かきコース料理」を復元した著書に「箱庭の海」「続・箱庭の海」など。

主催　中国新聞社、京都新聞　　後援　広島県、広島市、京都市観光協会

第47回 日本いけばな芸術展

テーマ「花という未来。」
会期　10月8日(水)～13日(月)
会場　大阪高島屋7階





白玉椿をいけて

〈3頁の花〉　櫻子

今年は庭の山茶花や椿が例年よりも早く咲き始めた。蔵の前の山茶花が大好きで、咲く時期をいつも心待ちしている。蕾も早い時期から沢山つけ始めて、十月末には一斉に咲き始めた。いつもなら十一月に入ってから先ず最初の一輪が開くのだが。

昨年植えた白玉椿も同じ頃にひと花咲いた。椿の木は庭に多いのに、今まで白玉椿が無かったのは不思議なくらい。椿の種類は多いが、葉が形良く格好も良くていけやすい椿はそんなに多くない。藪椿や白玉椿はさり気なく足元に収まってくれる。

台切りデンファレと若松と取り合わせた。

花材　若松（松科）
　　白玉椿（椿科）
　　デンファレ（蘭科）
花器　陶花器



シチュー鍋にいけて

櫻子

シチューの中味がブクブクと煮え立つ様な雰囲気で青文字や枯れ紫陽花をいけてみた。

青文字は枝が折れやすく、先が尖っていて枝を集めるようにいけるのは難しい。

もっと沢山枝を買えば良かったなと反省。

青文字は早春の頃花を咲かせる。一つの蕾の中に3～4個の花が内包されていて、咲き出すと全体がボリュームアップして可愛らしい。

クスノキ科の木なので良い香りがする。切り口は山椒（さんしょう）の香りに似ているようにも思う。種子は辛いので、生姜（しょうが）の木ともよばれる。木肌が青いので青文字なのだが、黒文字よりも柔らかい気がする。

時折よく確認せずに黒文字の楊枝を買うと青っぽい木肌の楊枝であったりして要注意！これは青文字だと思う。

シチューの中味が冷めない様に、暖かそうなショールで包んで。

花材　青文字（楠科）
　　紫陽花（紫陽花科）
　　薔薇（薔薇科）

花器　陶製シチュー鍋

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2015 年
1 月号
No.619

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元









冬の彩り

〈表紙の花〉　櫻子

葉牡丹は冬の花壇も彩るアブラナ科の植物でキャベツの仲間だ。ヨーロッパ原産の「ケール kale」と呼ばれる結球にならないキャベツが祖先である。中心の葉の色がピンク→白→グリーンと変化し、まるで薔薇の花のよう。春先には黄色の花が咲くのだが、葉だけで充分美しい。お正月は松や梅の足元に押し込められて窮屈そうに飾られている葉牡丹が気の毒だが、私はいつもスイトピーやチューリップと飾りたいと思う。今年は切れ葉で縮緬状の葉牡丹を多く見かけた。山羊型のトルコ水差しにもとてもよく似合う。

花材　葉牡丹（油菜科）
　　オンシジウム（蘭科）
　　スイートピー（豆科）
花器　山羊型陶水差し（トルコ製）



森の宝石

〈2頁の花〉　櫻子

バンダも、エピデンドラムも蘭の中ではとても好きで良くいけさせて頂いている。昨年秋の日本いけばな芸術展では根付きのバンダをコウモリ蘭に絡ませた。バンダという名前は「まとわりつく」という意味なので木や枯れた羊歯に絡みつくようにいけるのも違和感がなかった。根はとても空気を好む性質なので、霧を少し吹く程度で乾燥した会場でも元気で有り難かった。エピデンドラムはカトレアの近縁種でエピ（上）とデンドロン（樹木）で樹の上に着生するという意味になる。エピデンドラムもバンダも野生の姿を見た事はないが、名前から読み取れる雰囲気を大切にしている。

花材　エピデンドラム（蘭科）
　　バンダ（蘭科）
　　カーネーション（撫子科）
花器　洋陶器（ローゼンタール）



花の進歩

〈3頁の花〉　櫻子

紅葉のヒペリカムが珍しくてピンクカラー、赤薔薇と取り合わせた。昨年の11月下旬の花である。赤薔薇は一輪だけ。それで充分なくらい花も茎も葉もしっかりしていて、ヒペリカムの紅葉に負けていない。本数が少なくても花の向きを考えていけると良い。秋の日本いけばな芸術展でも横田慶重先生がいけられた花は、仏手柑に三本の赤薔薇と胡蝶蘭を取りあわせておられた。昔の赤薔薇なら10本はいけないと強さがなかったが、今の赤薔薇は強く丈夫で栽培技術の進歩に驚くばかりである。

花材　ヒペリカム（弟切草科）
　　カラー（里芋科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶コンポート（前田保則作）



黄色に紫をそえる

〈10頁の花〉　櫻子

黄色と紫色は反対色で、黄色は若々しい明るさ、紫色は大人びた高貴なイメージがある。作例では緑色と黄色の構成に、鮮やかな紫色をポイントで加えて色彩をひきしめている。

リューココリネ（レウココリネ）は南米チリのアンデス地方に分布する百合科・リューココリネ属の多年草。切り花でもいくつかの花色があるが、紫の花色が多い。ほのかに良い香りがある。

花材　ミモザ（豆科）
　　チューリップ（百合科）
　　リューココリネ（百合科）
花器　結晶釉水盤（前田保則作）



楽しくなる器

櫻子

器を買いに街に出ましょう。

私が器を探すとき、何のために花をいけるかによって、見方を変えている。花展用なのか、テキスト撮りのためか、料理教室のテーブル飾りか。飾る場所をイメージして、その場の雰囲気に似合う器を探す。

春らしいラナンキュラスと菜の花をいけた器は、私のイタリアン・レッドのキッチンでよく使っている。どんな色の花でもモダンに飾ることができるのと、摩天楼のような形が楽しい。

花材　ラナンキュラス（金鳳花科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶花瓶（伯耆葉子作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
3 月号
No.621

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



金魚草の秘密

〈表紙の花〉　櫻子

今年も寒い頃から立派な金魚草が売られていた。小、中くらいの丈の花は花壇に植えられているが、大きいものは切り花に向いているらしく色も多彩になってきた。地中海沿岸（南欧～北アフリカ）の園芸種の花で本来は5月頃が咲く季節だと思う。

日本や中国では金魚草だが、アメリカでは噛みつく龍、ギリシアでは鼻のような、フランスでは狼の口という名前で呼ばれる。古代の文明では霊的な力があるとされた。庭に植えると災いから守られ、食べると若さと美しさを取り戻すとか！。エディプルフラワーとして良く料理に添えられている金魚草だが、そうと知ってはいても食べようとは思わない。

花材　金魚草（胡麻の葉草科）
　　小手毬（薔薇科）
　　ドラセナ（竜舌蘭科）
花器　ペルシャ花瓶

ポピー

櫻子

今年は立春を過ぎても寒い日が多く、花屋さんに並ぶ春の花達も咲くまではしばらく時間がかかったよう。固いつぼみのポピーは最初は下向きで頼りなさげ。水切りして暖かい部屋に置いておくと、くっと顔を上げて蕾が二つに割れ、あっという間に大きな花が咲いてきた。

この瞬間が楽しくて春は必ずポピーをいけている。少し細かったので、連翹と取り合わせた。枝ものと合わせる事は珍しいが、連翹の優しい線がポピーの動きを助けてくれる。

スイスの公園で澄みきった青空の下、光を集めたように咲く連翹と初夏の小麦畑でしっかりと力強く咲くヒナゲシの花は、今でもはっきりと目に浮かぶ。

花材　ポピー（罌粟科）
　　連翹（木犀科）
　　スイートピー（豆科）
花器　白磁花瓶



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
4 月号
No. 622

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



貝母（ばいも）　〈表紙の花〉　櫻子

貝母は漢名で、中国原産の多年草。球根が漢方薬にされる。和名ではアミガサユリとも呼ばれ、花の内側に網状の模様がある。球根は二枚貝のような形をしている。

父の文章といけばなを纏（まと）めた「仙齋彩歳」には初夏にいけられた貝母の実と仙翁（せんのう）、鳴子百合（野生種）の投入がおさまっている（71頁）。6枚のプロペラのような実の面白さと、繊細な葉の枯れ色は、いかにも父好みの不思議な美しさがある。

仙翁は撫子（なでしこ）科に属している。記憶の中から父の花が作用したのか分からないが、春の貝母には撫子と鳴子百合を選んでいた。父は白黒の陶花瓶にいけていたが、私は軽やかな漆器にいけて剣山を苔で隠してみた。漆器に花をいけると、特別な感じがする。上品な金彩の花模様、底面の朱色が優しさを添えてくれる。

花材　貝母（百合科）
　　撫子（撫子科）
　　鳴子百合（百合科）
花器　金彩高台漆器



ガイラルディア

〈3頁の花〉　櫻子

花屋で「これはルドベキア？」と聞くと「それはガイラルディアです」と教えてくれた。どちらも北アメリカ原産の初夏から秋まで咲き続ける多年草。ルドベキアはスウェーデン人の、ガイラルディアはフランス人の名前に由来する。明治時代に渡来している。

品種により天人菊（てんにんぎく）、大天人菊（おおてんにんぎく）という和名がつけられている。花弁の色が先端で切り替わる不思議な花だ。

はじめていける花なので、相手の選択に迷ったけれど、同じ色が虹のように入るアイリスを選んで、白黒の器にいけると、優しい暖かみを感じさせてくれる花になった。

花材　アイリス（菖蒲（あやめ）科）
　　ガイラルディア（菊科）
花器　印花文陶花器（近藤豊作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
5 月号
No. 623

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



緑から白へ

〈表紙の花〉　櫻子

紫陽花（あじさい）にも近い植物で、日本の山野にみられるガマズミや大手毬（おおでまり）の仲間であるビバーナム・スノーボール。ビバーナムには他にも種類があるが、葉の先が3つに裂けているのがスノーボール。

咲きかけのつぼみの頃は若草色の花の固まりだが、真っ白へと変わっていく。柔らかくてフワフワの花で、姿も優しいので出逢えるこの季節が待ち遠しい。

水揚げは良くないので、ライラックなどと同じように足元を削ってよく割り、水切りしてたっぷりの水につける事。花が下向きだが、ちゃんと元気に咲いている。最後は本当に雪の玉のようになって、はらはらと花びらを散らす。紫陽花よりも繊細で頼りないけれどやっぱり好き。オランダ製のガラス器にバンダと取り合わせた。

花材　ビバーナム（忍冬（すいかずら）科）
　　バンダ（蘭科）
花器　淡紅紫色ガラス花瓶



ライラック

〈2頁の花〉　櫻子

四月末に岡山の桑原専慶流展に行くと必ずと言ってよいほどライラックをいけておられる。庭に咲いたライラックを切ってこられるので、大きく伸びやかで良い香り。いつも羨ましく拝見している。

ヨーロッパ原産で、フランスでもよく庭に植えられている。フランス語ではリラ。シャンソンにも「白いリラの咲く頃」があり、宝塚歌劇の「菫(すみれ)の花咲く頃」はこの曲が元になっているそうだ。

ドイツやフランスでお世話になった方の庭にはライラックとともに薔薇や蔓薔薇も必ず植えられていた。ともに芳(かぐ)しい初夏の花だ。

花材　ライラック（木犀(もくせい)科）
　　薔薇2種（薔薇科）
花器　青色ガラス花器



初夏籠花

櫻子

宝鐸草（ほうちゃくそう）を庭から切ってきた。鳴子百合に似た花の付き方で、百合科・稚児百合（ちごゆり）属の多年草。水揚げもいい。

花屋で初夏の草木を買い足して籠にいけた。白い小さな花は姫空木（ひめうつぎ）。花が2本立つのは二人静（ふたりしずか）。淡紫色は都忘れ。野に咲く姿を想像しながらいけるのは楽しい。繊細な籠花生けには優しい風情の花が似合う。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
6 月号
No. 624

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





「水生華」

この度、縁あって陶芸・美術作家の近藤高弘さんと、当流副家元の桑原櫻子との二人展を「冨春軒」で開催させていただいた。

近藤さんは京都清水で磁器の染付で人間国宝となられた近藤悠三氏の孫にあたり、伯父様の近藤豊氏の死去を機に陶芸の道に入られた。制作にあたっては「水」を常に意識されて、水滴を表した「銀滴」シリーズで独自の境地を開拓してこられた。

櫻子は京都で330年の歴史をもつ花道・桑原専慶流の14世家元の長女として、幼少より花の道に携わる一方で、料理研究家としての顔ももち、自然の恵みと美しさを伝える活動を続けている。

今回の「水生華」では、近藤さんの「水」をテーマにした作品群が、和の暮らしの中でどんな反応を見せてくれるのか、そこに「華」が加わることで何が生まれるのかを体感する中で、アートについて、花道について、深く考える機会を得ることができた。

「水生華」の余韻を今後に生かすため、写真と文章で記録に留めたいと思う。

「水生華（すいしょうか）」特集

水の町家に　風を感じて

会場となった「冨春軒」は花道の道場であり、花道家元の住居でもある。祖父の代で花を養う細長い水溜が土間につくられ、父と母の代で水溜は3つに増えて、季節の葉や花を浮かべるようにしている。

今回、近藤高弘さんはこの家を「水の町家」と表現してくださった。日頃とくに意識していなかったが、言われてみると「水」を生かして暮らしていることに気付く。母がうるさく花の水換えの大切さを言ってく



近藤髙弘　ガラス・インスタレーション　　桑原櫻子　花：黄金板屋楓（おうごんいたやかえで）　鉄線数種　八角蓮（はっかくれん）　白花敦盛草（あつもりそう）

れていたことも、「水の町家」の要素になっているとも思う。

二階の上段の間は一尺だけ高くなっている。そこがタイトル「水生華」の舞台になった。氷のような、雪のような作品を近藤さんが配置していく。「僕の作品を水だと思って花をいけてください」との投げかけに応えて、季節の自然を櫻子がいけていく。

そして「水の器」と花たちが明かりに浮かび上がる。

このイベントには、近藤さんの推薦で、現代アートの旗手の一人、大舩真言（おおふねまこと）さんにも協力をお願いし、一階の2つの床の間に大舩さんの絵が加わった。

表紙掲載の絵は深い青色に縦に白い筋、9頁の絵は淡い青色にぼんやりと横に白い帯。事前に床の間を見に来られて描いてくださったもので、材料は天然岩絵具である。空間にも近藤さんの器にもぴたりと調和していた。

その床の間に櫻子が花をいけた瞬間、見ていた大舩さんは「風」のようなものを感じたと、後で教えて下さった。そんな風を自分の作品にも吹かせたいと。

「命は水から生まれいずる」水から生まれいずる華。水生華。近藤さんの水の表現は、水の町家を潤し、櫻子の生けた花たちは、水を得た命の美しさを見せて、人の心に風を送ってくれた。家と器と花と絵とが心地よく響き合った。

桑原専慶流十五世家元　桑原仙溪

「水生華」　桑原櫻子×近藤髙弘
日時：5月9日(土)・10日(日)　11時～17時
場所：冨春軒［桑原専慶流家元宅］
入場料：５００円

近藤髙弘　坐像：Reduction - 滝 -　　桑原櫻子　花：乙女百合　　屏風：山田古香筆「赤壁の賦　前編」







階段を上がった二階、上段の間が「水生華」の舞台に。



近藤髙弘　器：Mist」　桑原櫻子　花：有馬の馬の鈴草

瞑想　（4頁）

玄関の間で迎えるのは、滝に打たれて瞑想する坐像。組まれた手の上で可憐に咲く乙女百合。震災と原発事故を経て、人と自然との関わりを問い直す近藤さん自身の姿に、東北ゆかりの花が寄り添う。

屏風に書かれているのは中国・宋代の詩人、蘇軾（蘇東坡）が、長江の戦場趾を訪れ、人の儚さ愚かさと、自然の雄大さを対峙させた韻文。

文字の滝の前で、人と花とが一つになる。





Tradition and Modernity: "*Suishoka* (Water, Life, and Flowers)"

Takahiro Kondo, ceramic artist

Kyoto often makes me feel and consider its deep and essential traditions that have been passed down for generations. Such an encounter with traditions is very inspiring for me, as I am always seeking new and modern ways of expression, and it drives and motivates me to create art standing face-to-face with each key element of such traditions. While it is often said that Kyoto is a city of "traditions and innovations" , I believe that innovations only come from authentic traditions that live on in the historical city and not from those that appear to be traditional on the surface.

It was two years ago that I first visited Fushunken, the house of Mr. Kuwahara, the Grand Master of the Kuwahara Senkei School of Ikebana. After going back and forth along the Rokkaku Street, I finally found and entered Fushunken' s front gate. I walked down a long and narrow path, when suddenly, I saw flowers floating in a small stone pond glowing in the sunlight. At that moment, it felt as if my entire body was taken into a completely different dimension. I was also impressed by the greenness of maple leaves in another pond near the front door, and I instantly thought that this place is a "*Machiya* of Water" . I was also amazed by the inside of the *Machiya* where the space and atmosphere were created meticulously with fine materials including lamps and shades of discerning taste, and flowers in vases of different materials, colors and shapes. When I saw the upstairs salon used as a room for learning *Ikebana*, I thought that "the students here must be very lucky to have the opportunity to learn *Ikebana* in such a place."

At the age of 25, I left the company employment in Tokyo and decided to start my career as a ceramic artist, driven by the shocking death of my uncle Yutaka Kondo (ceramic artist) who took his own life. Up until then, I was an athlete, a table tennis player, and had little interest in art, and it was only when I came back to Kyoto that I started learning ceramics and art from the beginning. It was around the age of 30 when I acquired the minimal standard of the basic ceramic skills and techniques I needed for my work. However, I had been struggling for a long time to find my own unique theme for my art. Around 1994, when Kyoto commemorated the 1,200th anniversary of its foundation, I came up with the idea of "fusing contradictory elements" inspired by the city of Kyoto where old and new elements are all mixed and combined. Then, I began to create my artworks with the keyword of "representation of water born from fire (kiln) through earth" , based on the image of **fire** and its opposite, **water**, which are both essential elements of ceramics. Since then, I have been working on various expressions of water using glass and *Gintekisai* (silver mist overglaze), my original patented technique.

When Mr. Kuwahara asked me if we could create some kind of exhibition at *Fushunken*, it was easy for me, whose main theme is water, to visualize the installation of artworks in this *Machiya*. Accordingly, we collaborated to create this exhibition and demonstration of *Ikebana* (*Hanademae*) with the concept of "*Suishoka* (Water, Life, and Flowers)" . This event was also a part of "PARASOPHIA: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015" the first international art festival in Kyoto, and was held on the last day of the art festival. I believe we have succeeded in presenting some of the interesting aspects unique to Kyoto where tradition and modernity integrate. The number of foreign tourists visiting Kyoto continues to rise every year, and I think that it will become increasingly important to introduce our culture through the presentation of Japanese aesthetics and sensibility from Kyoto to the world.

The devastating earthquake that hit Japan in 2011 made us, the Japanese people, reconsider our way of living and the relationship between nature and the human. In our hectic daily lives, we sometimes forget about simple and natural things such as a flower (life) living in **water**. However, there is sometimes a brief moment where you realize that nature, body and soul have become as one; for instance, when you are arranging flowers in a vase, or for me, when I am working with clay and fire. I want to cherish such momentary feeling and let them permeate every cell of my body.

Takahiro Kondo

1994 Kyoto City Emerging Artist Award.
2002 supported by Japanese Ministry of Culture grant for overseas study.
Public Collections
Metropolitan Museum of Art,N.Y.
National Museums of Scotland,Edinburgh etc.

Sakurako Kuwahara

Born in Kyoto as the first daughter of the Grand Master of Kuwahara Senkei School whose history dates back to the 17th century, Sakurako has learned *Ikebana* since the age of six.
Currently, teaching *Ikebana* as the Vice Grand Master, she also runs the cooking salon "Cherry Kitchen" .

翻訳：佐藤美奈子



伝統と現代

近藤髙弘

京都は、深く本質的な伝統が脈々と流れていると体感することがある。現代の新たな表現を模索してきた私にとって、それは、とても刺激的な出会いであり、そこからその重要な要素のモノやコトと対峙しながら、制作へと向かう意欲へと駆り立てられることがある。　京都が、「伝統と革新」の都とよく言われるが、うわべだけの伝統的なものではなく、本当の伝統が息づいているからこそ、革新が生まれるのだと思っている。

さて、ご縁があって桑原さんと知り合い、２年前に初めて冨春軒におじゃまさせていただいた。六角通りで何度か入り口を通り過ごしてしまい、やっと見つけて長い路地を入っていくと、パッと光がさし水のはられた石囲いの中に迎え花が浮かべてあった。その瞬間、私はまったく異次元の世界に引き込まれたような感覚が身体に走ったのを記憶している。そして、次に中玄関でも水の中に沈められた楓が青々としているのが、また印象的でその時、ここは「水の町屋だ」と思った。家の中にも、様々な花器に花が生けられ、またセンスの良い照明器具など、細部にこだわった素材や空間造りがされている町家に驚くとともに、２階大広間が、お花のお稽古場になっていることを見せてもらって、「ああ、ここでお稽古される生徒さんたちは、なんて幸せなことだろう」と、思った。

私は、叔父（陶芸家・近藤豊）の自死の衝撃で、２５歳の時に東京の会社を退職して、この道に進むことを決めた。スポーツ選手（卓球）だった私は、若い時は美術にはほとんど興味がなく、京都に戻ってから陶器やアートのことなど一から学ぶこととなった。３０歳を過ぎてようやく、何とか基本的な技術は身に付き始めたが、個人作家としてどのようなテーマで自分独自の作品を作っていくのかという暗中模索が続いていた。ちょうど１９９４年京都が建都１２００年の年を迎えるころ、古いモノと新しいモノが混然一体となっている京都の町を客観的に捉えることで、「相反する要素を融合する」というテーマが生まれ、その後、焼きモノの重要な要素である「火」と対極にある「水」をイメージし、「土を媒介に火（窯）の中から生まれる水の表象」というキーワードを素に、作品を制作するようになった。そこから、銀滴彩のオリジナル技法（特許取得）やガラスなど水をテーマに様々な表現を試みている。

桑原さんから、この冨春軒で「何か展覧が出来ませんか」という打診をいただいた時、水をテーマにしてきた私にとって、それは、直ぐにこの町家での展示イメージが拡がり、今回の「水生華」というコンセプトも生まれ、コラボレーションの展覧会と華手前というイベントが実現した。丁度、京都国際現代芸術祭２０１５「パラソフィア」という京都で初めての国際アート展が開催されている、その最終日に合わせての関連イベントということにも連携でき、京都でしかできない伝統と現代が融合する面白さの一端を提示できたのではないかと思っている。

年々、京都には多くの海外からの観光客が増え続けているが、京都から日本人の美意識や感性を世界に伝えることは、今後益々重要な文化発信となるであろう。

２０１１年３・１１の災害と事故を経験した我々日本人は、改めて自らの生き方や自然と人間の関係を考えさせられる大きなきっかけとなった。「水」に生きる華（いのち）という当たり前の事に、つい日常に追われて忘れてしまうことも多いが、たとえば、花を生けるという行為や時間、私であれば、土や火に向き合って制作しているときに、ふっと立ち現れる自然と身体と魂の一体感の余韻に気が付くときがある。そんな瞬間の感覚を大切にして、その一瞬を自らの細胞の中に染みわたらせたいものである。











近藤高弘　器：銀滴彩器　　桑原櫻子　花：薔薇　板屋楓　　大舩真言　絵：「STILL WAVE #7」

華手前

近藤さんの銀滴碗（ぎんてきわん）を使った少人数での茶会を行って、櫻子による華手前をご覧頂いた。

水を打った路地を入り、庭をめでてお茶室へ。はりつめた空気の中に、亭主が花を切る鋏の音が心地よく響く。季節の花のみずみずしさが、部屋の空気を優しくしてくれる。

謙虚な心で、精一杯のもてなしの演出を。亭主の気持ちを花がかわりに伝えてくれる。なによりも花をいけた櫻子が感動していた。花道の本質に触れたのだろう。

櫻子が選んだ花は朱鷺芍薬（ときしゃくやく）と斑入葉（ふいりば）の紫蘭（しらん）。折り鶴に似た器に乗って空を飛んでいるようだ。

お茶は冷煎茶。使われた水は近藤さんが大峰山から持ち帰って下さった「ごろごろ水」。菓子は「青洋（せいよう）」青山洋子（ひろこ）さんがこの日のために作った「潤（うるむ）」。丁寧に削られた青竹の楊枝を添えて。









近藤髙弘　「雫（しずく）」　桑原櫻子　花：金鎖（きんぐさり）

水生華を終えて　　櫻子

近藤さんの銀滴碗（ぎんてきわん）を初めて拝見して手に取った時、零（こぼ）れ落ちる様な水滴が表現された美しき器に驚きました。

自然が生み出す一瞬の造形のような姿が銀の滴（しずく）となって表れ、焼きものとして完成されていました。

今までに見たこともないような作品でした。

ガラスインスタレーションも溶けていく氷に見立てた作品でした。

儚（はかな）く溶けて追いかけても追いかけても消えていく美しい雪の結晶。

どんな花が似合うかしら。

この器のように繊細で、出逢う事の少ない特別な花。敬意と愛情を込めていけたいと思う。

ずっと想い描いていた夢を実現出来た三日間でした。

氷達に包（おり）まれて、木や花達がしなやかに力強く咲いてくれました。

水生華に関わって下さった方々の想いが、花と器と家を生き生きと輝やかせたのだと思っています。



季節の洋と和

櫻子

カットガラスにいける

〈10頁の花〉

花材　向日葵（菊科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　ヒペリカム（弟切草科）
花器　カットガラス花瓶

宗全籠にいける

〈11頁の花〉

花材　竹島百合（百合科）
　　珍至梅（薔薇科）
　　下野（薔薇科）
　　岡虎の尾（桜草科）
花器　宗全籠　手なし

10頁のガラス花瓶は口が広く、厚みがあってかなり重い。このガラス花瓶も11頁の籠も、どちらも夏むきの涼を感じる器だが、一方は重量があり、一方は軽いので、おのずといける花もそれなりのものを選びたい。

ガラス花瓶にはアクリルの石を入れ、剣山を使って重厚な感じにいけている。大好きな八重咲きの向日葵を主材に、臙脂色のアンスリウムと赤い実が可愛いヒペリカム。色の組みあわせを楽しんだ。さらに、明るい緑色を加えたくて、アクリル製のランチョンマットを敷いている。



宗全籠は江戸時代前期の茶人、久田宗全が作った置籠で、本来は篠の手が付いている。籠の中では安定がいい方なので、竹島百合もしっかり受け止めてくれる。その足元には軽やかな珍至梅、下野、岡虎の尾を選んだ。籠の雰囲気に合わせて野趣を感じる花で統一している。

両方の写真を見比べてみる。花器はそのままで、左右の頁の花だけを入れ替えたところを想像してみると、どちらも微妙な違和感を感じてしまう。重量的なバランスだけではなくて、自分が表現したい雰囲気との違和感。

表現したいものが何なのかがはっきりしていれば、それにあった器を選ぶべきだし、花材のとり合わせもそれに随えばいい。洋花・和花という区別よりも、花の風情を統一することを心がけたいと思う。なかなか難しいけれど、とても大切なこと。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
8 月号
No. 626

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



為朝百合

〈表紙の花〉　櫻子

「立華時勢粧」には花材について詳しく解説されていて、その中に為朝百合も出てくる。そこには「為朝百合。鬼ゆりに対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。」と書かれている。為朝とは平安時代末期の武将、源為朝のこと。鬼にも勝る鎮西八郎為朝の勇ましさにあやかった命名だろうか。

現在の植物図鑑で調べると、タメトモユリは伊豆諸島に咲くサクユリのこととある。とても大きく咲く百合で白色大輪のカサブランカの母種らしい。源為朝は伊豆に縁があるためそう呼ばれてる。

しかし、現在京都で為朝百合と呼んでいるのはサクユリではなくて表紙にいけた百合をさす。黄色い帯に赤い斑点はヤマユリに似ている。おそらく古くからヤマユリの一種を京都周辺で栽培し、為朝百合と呼んでいたのだろう。この百合の美しさと風格は、人気絶大な人物の名をつけるのに相応しいと思う。

為朝百合の名がつけられた二つの百合。豪傑の武勇伝を語り継ぐということも、今ではなくなりつつあるけれど、花を通して古の時代の空気を想像するのは面白い。いつか伊豆諸島の為朝百合にも会いに行ってみたい。

花材　梅花躑躅（躑躅科）
　　為朝百合（百合科）
　　唐糸草（薔薇科）

花器　飴色釉花瓶



ブルーベリー

〈2頁の花〉　櫻子

ブルーベリーは夏櫨と同じ躑躅科・酢の木属の低木で、原産地は北アメリカ。近年、果樹として日本でも栽培が盛んになってきた。

私も数年前に、ブルーベリー狩りをしたことがある。熟した果実を夢中で集めるのは楽しかったが、上を向いて採るので、帽子をかぶっていても鼻の頭が日焼けして暫く痛かった。

撓わに稔った実はとても健康的で、太陽のようなファッションピンクの薔薇とよく似合っている。トルコで買ったブルーの絵柄の花瓶にもピタリとのった。赤紫色のアンスリウムを加えて、実が熟した色を想像して楽しんでいる。

花材　ブルーベリー（躑躅科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　薔薇（薔薇科）

花器　トルコ花文陶花瓶



花摘み

櫻子

少しでも涼を感じるようにと、白竹の平籠にいけてみた。タニワタリノキとミヤマナルコユリで緑の繁みをつくって、その間から小さな花たちを覗かせる。籠に野菜を盛るような感覚でいけてみた。こんな野の花を集めたようないけばなも好きなのだ。

最近、庭木や花の手入れをするようになった。米の磨ぎ汁も活用している。庭の草花が元気に伸びると、玄関の掛け花などにいけたりできるので嬉しい。

野の花を摘む楽しさは、太古からの遺伝子に書き込まれているのではないかと思う。摘み草料理が人気があるのも頷ける。自然の中で宝探しをしているような感覚。それによって心と体がよろこぶ感覚を、私達はきっと生まれた時から持っているのだ。

作例のタニワタリノキも、数年前に岡山の先生が庭から切っていけておられたので初めて知った花だ。不思議な白い球形の花だが、もとは南国の谷間や湿地の植物とのこと。今回は花屋に売られていた。他の花も、花屋さんで目に付いた花たち。これも私の花摘み。

花材　姫百合（百合科）
姫金魚草（胡麻の葉草科）
谷渡の木（茜科）
深山鳴子百合（百合科）
赤花歌仙草（菊科）

花器　楕円形平籠（公長齋小菅）

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2015 年
9 月号
No. 627

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





紅満作（べにまんさく）と白い蘭

〈表紙の花〉　櫻子

徳島県内の洋蘭園でつくられた新品種。東洋的な風情を感じたので、季節の枝と合わせてみた。花器の銀彩と白い蘭、金彩と葉の色づきがそれぞれ調和してくれた。

花材　丸葉の木・紅満作（満作科）
　　蘭「ホワイト・フェアリー」（蘭科）
　　鶏頭（莧（ひゆ）科）
花器　黒地金銀彩陶花器

柴栗（しばぐり）と鉄砲百合

〈3頁の花〉　櫻子

「美白」という鉄砲百合は蕾が雪のように白く、不思議な存在感がある。栗の枝を広げ、野の花と挿すと、草木を照らす月光のように見えてきた。

花材　柴栗（山毛欅（ぶな）科）
　　鉄砲百合「美白」（百合科）
　　金水引（薔薇科）
　　ポリゴナムの赤花（蓼科）
花器　青色釉陶花瓶

花フォーラム（in倉敷）

竹取物語

櫻子

今日は皆さんをいけばなで竹取物語の世界へお連れしたいと思います。

「竹取物語」は文章というよりも、絵としておぼえていらっしゃる方が多いのではないでしょうか？

最初の竹林の中で翁がパァーと光る竹を見つける場面。

クライマックスの、月の世界の御使いが降りてきて、かぐや姫がのぼっていく場面。絢爛豪華。にしき絵のような。印象に残りますよね。

子供のころ絵本で読んで、その美しい場面にほれぼれしたという方も多いのではないでしょうか。

今舞台では竹の大きな提灯にグロリオーサのあかりが灯っていきます。百合の仲間の花ですが、まるでかがり火のように舞台を照らしてくれます。

そして竹林には夏の美しいもみじが生けられていきます。

緑の濃淡、波打つ竹林の美しさ。風を感じるように。竹林に翁が入って行く様子を皆さんにも感じていただきたく思います。

桑原専慶流にも竹の翁のような方が居て、綺麗なこの竹を切ってきてくださいました。竹をいつも大切に扱っておられるので、こんな提灯の形や窓の開いた竹を作る事が出来られるのだと思います。いつも本当にありがとうございます。

「竹取物語」は、仮名文字で書かれた日本最古の物語といわれます。

成立は9世紀終わりから10世紀はじめとされますが、正確な成立年も作者も、わかっていません。

ただし漢文や和歌や仏教の知識がないと書けない文章ですから、作者はかなり身分の高い教養人であろうと思われます。

また、かぐや姫が帝の求婚をはねのけてしまうなど反体制的な内容が強いですから、当時権力を握っていた藤原氏方の人間ではなく、たとえば僧侶などではなかったかと推測されています。

「竹取物語」のお話は大きく三部に分かれます。

第一部では、翁が山奥でかぐや姫を見つけ、育てる。3か月で大きくなって、きれいな娘さんになるところまで。

第二部は、貴族たちの求婚です。なんと美しい、私と結婚してください。迫る5人の貴族に、かぐや姫は無理難題を押し付けます。

無理難題を押し付けられた貴族たち、ある者は金にまかせて中国の商人から取り寄せ、ある者は途中で懲りてほっぽり出し…

いずれもうまくいかず、結婚はできません。

第三部では、いよいよかぐや姫のうわさが帝の耳に届きます。

そんなに美しい娘がいるのか。ぜひ妻に迎えたいといってくる。しかし、かぐや姫は帝の求婚も拒否。

最後は御使いが迎えに来て、かぐや姫は昇天し、月の世界に帰って行くという、おなじみの筋書きです。

今舞台の中央では翁が白く輝く竹を見つけた時の情景をシマアシとダンチクで印象的に表現しています。

翁は野や山に出かけては竹を取ってきて色んな道具を作っていました。

笠、竿、笊、籠、筆、箱、筒、箸、筍は料理のために。その他簾、篩、皆さん、お気づきでしょうか、これらの漢字は全て竹かんむりの字です。今日演奏して下さっている箏も竹かんむりがついています。竹と縁が深いのです。

それ程竹を熟知して大切にしてこられた翁だからこそ、かぐや姫に出逢えたのだと思います。

「源氏物語」には「竹取物語」の影響が強くうかがえます。

源氏物語は平安時代半ばに書かれた物語です。

「源氏物語」17帖「絵合」の章では、竹取物語について語られています。

どんな風に語られているのでしょうか？そしてどんな場面でしょうか？

絵合わせとは、宮中のお遊びとして左右のチームに分かれて、互いに絵を見せあいます。平安時代に貴族の間でおこなわれました。そして優劣を競うわけです。

冷泉帝は絵を好み梅壺の女御の絵を愛好しました。梅壺の女御とは、光源氏の養女で冷泉帝の寵愛を受けておられますが、先に女御としておられた権中納言の娘の弘徽殿の女御もライバルです。帝の寵愛は、どちらも甲乙つけ難いのです。

親である光源氏と権中納言の見守る中、両陣営による帝の前での絵合わせが行われました。

その場面に「竹取物語」の絵巻物が出てきます。

「物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』」と紹介されます。

唐錦の縁がつけられてあって、赤紫の表紙、紫檀の軸で上品な絵巻物です。

絵巻物を鑑賞しながら互いが批評しあいます。ちょっと意地悪な感じです。お聞きください。

「竹取の老人と同じように古くなった小説ではあっても、思いあがった主人公の赫耶姫の性格に人間の理想の最高のものが暗示されてよいのです。卑近（俗っぽい事）なことばかりがおもしろい人にはわからないでしょうが」

とある方が言われますと、別の方が、「赫耶姫ののぼった天の世界というものは空想で作られたものです。この世の生活の写してあるところはあまりに庶民的すぎて美しいものではありません。貴族は多く出てくるのに宮廷の描写などはすこしもないではありませんか。赫耶姫は竹取の翁の一つの家を照すだけの光しかなかったようですね。貴族の若者が大金で買った毛皮がめらめらと焼けたと書いてあったり、にせ物をもって来てごまかそうとしたりと不愉快な事ばかりです。」

こんな事を言い合いながらいつまでも中々勝負が決まりません。

結局最後は光源氏の出した絵に誰もが息を飲みました。須磨の風景が描かれたその絵には、源氏が過ごした侘び住まいや海の様子が余す所なく表され、趣深い歌まで添えられていた。

それまでに出された絵のことは全て忘れ去り、人々は、この絵に心を奪われてしまいます。

絵合わせは、光源氏の勝利となり、敗れた権中納言は、娘に対する帝の寵愛が損なわれるのではないかと危惧するのでありました。

千年以上前に書かれた長編小説の源氏物語にもこのような形で現れています。

こんな風に竹取物語はその後の日本文学にも大きな影響を与えています。

皆さんにもかぐや姫が見えてこられましたか？…輝く光のようなものが見えてこられましたでしょうか。







岡山県本部主催　花フォーラム

花 HANA 音 OTO コラボレーション

会期：7月12日(日)　会場：ライフパーク倉敷

花：桑原仙溪・桑原櫻子　箏曲：山路みほ

入場者：260名　公開いけばな教室：20名



オクラとパニカム

〈10頁の花〉　櫻子

オクラはアフリカ原産の多年草だが、寒さに弱いため日本では一年草として栽培される。ちなみにオクラは英名。パニカムは黍(きび)属につけられた名前で、アメリカ原産のいくつかの品種が切り花になっている。脇役としてとり合わせに加えると、季節の風情が深まる感じがする。

赤いオクラをパニカムの中に立てると、優しい表情になってくれた。

花材　オクラ（葵(あおい)科）
　　パニカム（稲科）
　　薔薇「カルピデューム」
　　（薔薇科）

花器　トルコブルー手付陶花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
10 月号
No. 628

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



籠花

〈表紙の花〉　櫻子

秋の草花が出揃う頃になると籠に花をいけたくなる。

掛花も投げ入れも籠に代わり、又果物や南瓜、さつま芋も暫く籠盛りにして眺めている。

この竹籠は昔から家にあるものだが、唐人笠籠花入（とうじんかさかごはないれ）という籠に似ている。韓国の人がかぶる帽子を逆にしたような形から唐人笠と呼ばれる。

この籠には蔓（つる）の手が付いているので固苦しくなくどんな花でも気軽に飾っている。前方にやや傾いているような形で口元にもたっぷりの葉を添えられる。

秋明菊と鳥兜（しゅうめいぎくととりかぶと）、どちらも綺麗に咲く時季の短い季節の花だ。紅葉し始めた楓を添えた。

花材　秋明菊（金鳳花科）
　　鳥兜（金鳳花科）
　　楓（楓科）

花器　手付唐人笠籠



◆横から見た、いけばなの奥行き。



コスモス

櫻子

今では日本の秋を彩る花の一つになったコスモス。でも、元を辿るとメキシコの植物だ。メキシコ原産の花にはほかにもダリア、ポインセチアなどが馴染み深い。

メキシコというと熱くて乾燥したイメージを持つが、首都メキシコシティーの標高は二千メートル以上あり、昼と夜の温度差が大きい。コスモスは雨季から乾季へ変わる9月から10月に咲く野の花だ。

マリアッチのギター演奏のように、情熱的にコスモスをいけてみるのもいいかもしれないが、今回は日本の里の風景に溶け込んだ花としていけてみた。ただし和花と上下に分けて、印象的に見えるようにした。

花材　コスモス（菊科）
　　雪柳（薔薇科）
　　桔梗（桔梗科）
　　ピンポン菊（菊科）
花器　条文陶花瓶



◆横から見た、いけばなの奥行き。



ネリネ　アナベル　櫻子

アナベルは北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸種。白い装飾花が半球状に咲いたあと、作例のように緑色に変わって枝に残る。ちなみにカシワバアジサイも同じ北アメリカ原産。また、花序の大きなピラミッドアジサイ（ミナヅキ）は東アジア原産のノリウツギの園芸種だ。

ネリネは南アフリカ原産の球根植物で、日本や中国に分布する彼岸花やリコリスと同じヒガンバナ科だが、属は異なる。

私達は現在、昔よりも多くの花をあたりまえのようにいけられるようになったけれど、それらの原種の生態や、栽培のご苦労を知っておきたいと思う。それが一つ一つの花への愛着につながる。

ネリネの茎も生かすようにシンプルな構成にしてみた。

花材　ネリネ（彼岸花科）
　　アナベル（紫陽花科）
花器　角柱陶花瓶（宮下善爾作）



◆横から見た、いけばなの奥行き。



ぶらさがる

〈2頁の花〉　櫻子

春には美しい花の房を下げていた藤も、秋になると剽軽な長細い実が蔓にぶらさがっている。藤棚であれば、さしずめ自然のシャンデリア、ではないにしても、見ていて楽しい気分になる。

とは云え、これだけ沢山ぶらさがった枝をいけるのは容易ではない。重量バランスを考えつつも、花は前方へ出すことで、藤の実のボリュームに負けない奥行きをつくる。

取り合わせには4色のピンポン菊を選び、藤色の杜鵑をたした。藤の実にカラフルなピンポン菊がよく似合っている。

花材　藤の実（豆科）
　　ピンポン菊4色（菊科）
　　杜鵑（百合科）
花器　市松模様陶花瓶



◆横から見た、いけばなの奥行き。

しなりの美

〈3頁の花〉　櫻子

頭を垂れる稲穂を見ると、自然の恵みに感謝の気持ちが湧いてきて、心の中でこちらも頭を下げている。

今年も新米の季節がやってきた。

この時期、花屋にも少量の黒米が売られる。赤米や黒米は古代米と名付けられてから栽培が増えてきたそうだ。いけばなでも独特の存在感が出せる花材だと思う。

私達の命の糧、その元の姿を愛でることもまた、心の糧となって、より深く自然との関わりを感じることができる。

相手には、同じくしなる姿の上臈杜鵑に、大輪のピンクの菊を選んだ。

垢抜けた華やかさと可愛さを兼ね備えた菊は、恵みへの感謝の気持ち。

花材　上臈杜鵑（百合科）
　　黒米（稲科）
　　菊「飛騨マム」（菊科）
花器　籠花入（桑原健一郎作）





◆横から見た、いけばなの奥行き。

赤芽柳

〈表紙の花〉　仙溪

花型　生花　草型　留流し
花器　耳付銅花瓶

赤芽柳は別名をフリソデヤナギ（振袖柳）とも呼ばれ、花芽が大きくなって、赤い芽鱗片が落ちたあとの花穂はいかにも春らしい。

しかし、生花にいけるなら、まだ花芽が小さくて固い初冬がいい。

日の当たる側、いわゆる日表は、枝肌も花芽も赤みが強いので、日表の側が手前になるようにいける。

本数多くいけるなら、銅器がよく似合う。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
12 月号
No. 630

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



役目を終えて

〈表紙の花〉　櫻子

ノイバラや鈴バラが終わる頃、立ち姿のバラの実が少しだけ出回る。美しい花が咲き終わり、これだけ沢山の実をつけるには、株はかなりのエネルギーをつかうのだろう。

丈は短いが、実は大粒で艶々としていて美味しそう。でも実際は食べても種ばかりで野鳥も見向きもしない。餌の少なくなった冬の頃仕方なく食べるらしいが。

グロリオーサとアンスリウムの葉は片方に寄せておき、反対側にバラの実をかためて釣り合いをとっている。赤い器に、赤い実と赤い花。そこへ白いアマリリスを立てると12月らしい雰囲気になる。

花材　アマリリス（彼岸花科）
　　グロリオサ（百合科）
　　薔薇（ばら）の実「センセーショナルファンタジー」（薔薇科）
花器　赤色釉花器



◆横から見た、いけばなの奥行き。



季節感ととり合わせ

櫻子

色鮮やかな実がたわわについたマユミ（檀）の枝。まさに季節の輝きそのものだ。黄色の嵯峨菊で華やぎを加え、白椿で品良くまとめた。花器の紫色も格を高めてくれている。

作例の3種の花材と器。この4つのとり合わせのどれか一つが別のものになれば、違う雰囲気のいけばなになるだろう。この組みあわせがベストとは思っていない。でも私が出したいと思った晩秋の色合いは出せたのじゃないかと思っている。

マユミと白椿は組みあわせの定番だが、そこに鮮やかな黄色でしかも可愛らしさを備えた季節の花を加えたかったのだ。嵯峨菊がとてもよく似合うと思う。

花材　檀（まゆみ）（錦木（にしきぎ）科）
　　椿（椿科）
　　嵯峨菊園芸種（菊科）
花器　紫紅釉花器



◆横から見た、いけばなの奥行き。



プリンセチア

櫻子

ポインセチアが花屋さんの店先に並ぶと、ああ、もう12月なんだなと気づかされる。最近はクリスマスカラーのポインセチアばかりでなく、白やピンクの花も作られるようになった。

今年とても綺麗な色だなと買い求めたのはプリンセチアという品種。華やかなピンクの葉が隙間なく広がる新品種だ。軸も長いので、鉢植えから切り取り、オンシジウムと投げ入れにした。

メキシコ原産。トウダイグサ科のユーホルビアの仲間なので水切りして、切り口から白い樹液を流してからいけると、良く水を吸い上げて日持ちしてくれる。暖かな場所に飾りたいクリスマスの花。

花材　ポインセチア（燈台草科）
　　オンシジウム（蘭科）
花器　金彩ガラス花器



◆横から見た、いけばなの奥行き。



新春の彩り

＜3頁の花＞

櫻子

こんなに大きな仏手柑をいけるのははじめてだ。家元に頼んだら丈夫な枯れ枝に乗せる形で花器にとめてくれた。びくともしない。

仏手柑は文人的ないけ方が多いけれど、私は明るくモダンにいけたくなる。3色のバンダと白椿の組み合わせで、新春の彩りを。

花材　バンダ3色（蘭科）
　　仏手柑（蜜柑科）
　　白玉椿（椿科）
花器　陶コンポート（柳原睦夫作）



横から見た奥行き



カトレア

〈11頁の花〉　櫻子

徳島県の蘭栽培園からカトレアをいただいた。カトレアは栽培が難しく、また切り花は花だけが切られるのでとても短く、いけるのにはカトレアホルダーが必要となる。

いただいたカトレアはバルブ（親茎）つきで立派な葉もついている。大変貴重なものなのだ。

カトレアの色が映えるように、濃紺のガラス花瓶と南京櫨の白い実を選んだ。

見事な大輪の鮮やかさは、まさしく蘭の女王だ。

花材　南京櫨（燈台草科）
　　カトレア（蘭科）
　　ミリオクラダス
　　（百合科）

花器　濃紺ガラス花瓶
　　（コスタボダ製）



横から見た奥行き



クロコダイルファーン

〈3頁の花〉　櫻子

花材　クロコダイルファーン（裏白科）
　　カザリシダ（裏白科）
　　ガーベラ（菊科）
花型　盛花
花器　陶コンポート

羊歯の仲間を2種類一緒にいけてみた。後ろに2枚左右に立てたのがクロコダイルファーンで、まさに鰐皮のような凹凸がある。手前2枚と後方に入れたのがカザリシダの一種で、尖った葉の付き方が左右交互にギザギザに付いていて格好いい。クロコダイルファーンだけだと夏向きのいけばなだが、濃い緑色のシャープな形のカザリシダを加えることで、冬の部屋にもしっくりと馴染む。

観葉植物の葉を2種組み合わせることで、表現できる雰囲気というものもあることに気付いた。今後もいろいろ試してみたい。

横から見た奥行き





バンダとカーネーション

櫻子

先日雪柳とバンダをいける機会があった。枝の姿が自由に広がる真っ白な雪柳と濃いピンク色のバンダを取り合わせると、今年の満開の桜を思わせるように華やかに。

バンダは、東南アジアやオーストラリアで育つ蘭で、樹木や岩肌に根を張り付けさせて伸びていく着生植物である。上へ上へと伸びて大きな姿になる。野生の原種を原産地で見てみたいと思うような花だ。

長く伸びた気根から空気中の水分を吸ってくれるので、花器に収めずにそのままの姿を飾ることもでき、時折霧吹きで水をかけてやると立派な姿で美しく花を咲かせた。

花会が終わった後も家に持ち帰り、飾っているが、途中で花茎から折れてしまった花を食卓に。小さな姿になっても、花器の水が新鮮で澄んでいれば生き生きしてくれている。

元気のないときに、この花を見ると気持ちが晴れやかになるのは、きっとこの花が美しい鳥が飛び交う樹林の緑と強烈な太陽の輝きを想像させるからだと思う。

花材　バンダ2種（蘭科）
　　カーネーション（撫子科）
　　手毬草（撫子科）
花器　アンティーク・ガラス花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
3 月号
No. 633

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



桃とアナスタシア

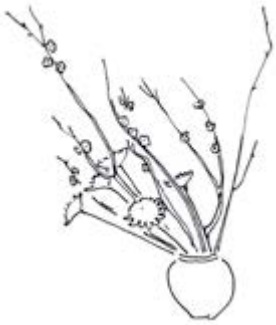
〈表紙の花〉　櫻子

花材　桃（薔薇科）
　　菊　品種名アナスタシア
　　（菊科）
花器　飴色釉陶壺

桃といえば菜の花と取り合わせる事が多いが、今回はアナスタシア（大輪菊）といけてみた。

アナスタシアは一年中出荷されているようで、見慣れているけれども毎回その見事な咲き方には驚く。満開の状態で出荷されるので花が痛まないように一つずつネットで包んで守られている。固い蕾から咲く菊とは随分イメージも違うが、日持ちはそれほど変わらない。

お振りで伸びやかな満開の花桃にも負けない力強さだ。桃の花がアナスタシアと美しさを競い合って、より美しく感じられる。



横から見た奥行き



春の草花

〈3頁の花〉　櫻子

花材　薇（薇科）
ラッパ水仙2種（彼岸花科）
スイートピー（豆科）
青麦（稲科）
花器　小判型陶水盤（伊藤典哲作）

春先になるとよく使う食器に乾山写し春草紋向付というのがある。スミレやワラビ、ツクシが描いてあって色絵の焼きものではないのに、その器に春のお料理を盛るとぱっと華やかで美味しそうに感じられる。

いけばなでもゼンマイやムギを添えるとほのぼのとした春の暖かさを感じるような季節感あふれる花になる。

実際に里山に行きゼンマイやワラビ、ゴゴミなどを摘むこともないし、自然の中ではその区別にも自信がないが、やっと訪れた待ち遠しかった春を料理でも花でも実感したい。



横から見た奥行き



エピデンドラム

〈2頁の花〉　櫻子

花材　エピデンドラム4色（蘭科）
　　スイートピー2色（豆科）
　　玉羊歯（蔓羊歯科）
花器　粉引陶水盤（伊藤典哲作）

色鮮やかなエピデンドラムを伸びやかに出して、スイートピーは水際近くに前方へ集めるようにいけている。広がるものと集まるもの。この対比がいけばなに躍動感を与える。
　ピンクの濃淡と紫の濃淡。そこに黄色を効かせて。淡い春の花色で絵を描くようにいけた。

横から見た奥行き





キンクサリ

〈3頁の花〉　櫻子

花材　金鎖（きんくさり）（豆科）
　　ギガンチウム（百合科）
花器　ブルーガラス花瓶
　　（ヨーラン・ヴァルフ作）

大好きな花の一つ、キンクサリ。ヨーロッパ中南部原産で藤に似た黄色い花が房状に垂れ下がる。寒冷地ではかなり大きく育つそうだ。安定のいいガラス花瓶に挿して紺色のバックに置くと、黄色い花が鮮やかに浮かび上がった。

キンクサリには十分な葉がついていたので、相手には大きな紫色の玉のように咲くギガンチウムを2本選んだ。反対色の紫色が黄色をさらに印象的にしてくれた。



ラナンキュラス　櫻子

花材　連翹（れんぎょう）（木犀（もくせい）科）
　　ラナンキュラス８色（金鳳花科）
　　菜の花（油菜科）
花器　中近東手付花器

シャルロット、オーロラ、ハーマイオニー。ここにいけたラナンキュラスの品種名だ。さてどれがどれでしょう。

ラナンキュラスは地中海原産。花びらの枚数が多いのが特徴で玉のように大きく咲く。普通は単色なのだが、シャルロットは色の濃淡が絶妙だ。数年前から市場に出ており、値段も高いが花持ちもいい。

そして今年はじめて見たオーロラとハーマイオニー。どちらも花弁がフリル状に縮れている。

春の太陽のような連翹の太枝に８色のラナンキュラスを添わせ、葉が厚く茂った菜の花で水際を隠した。

微妙な花色の変化が、地中海の碧い海と空の色をした花瓶に美しく映える。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
5 月号
No. 635

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



カーネーション

〈表紙の花〉　櫻子

花材　カーネーション3色
（撫子科）
シーグレープ（蓼科）

五月で十五世家元襲名から十二年になる。その同じ年の八月に母が亡くなった。今も多くの人の思い出の中に母はいてくれる。お弟子さん達のいけばなの中にも母の教えは生きている。

「大切なことは何度も何度も言ってあげたらいい」繰り返し繰り返し、丁寧に指導していたが、私も同じことをしているようだ。そんなことを思いながら、優しい色合いでカーネーションをいけた。



横から見た奥行き



藤（ふじ）　牡丹（ぼたん）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　藤（豆科）
　　牡丹（牡丹科）
花器　掛分釉大壺（清水保孝作）

藤の切り枝、牡丹の鉢。花屋で出逢った特別な花を、直感をたよりに大きな壺にさらっといけた。藤も牡丹もめったにいけられない。どちらも水揚げが難しい。経験と判断力が要る花だが、いける度に自然の奥深い美しさに少し近づけたかなと思う。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
6 月号
No. 636

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



大山蓮華（おおやまれんげ）

〈表紙の花〉　櫻子

大山蓮華は山に咲く蓮に似た白い花で、奈良の大峰山系などの自生地では国の天然記念物に指定されている。5～7月の梅雨時期に開花する。深山の林間に野生し簡単には見る事が出来ないので「天女花」とも呼ばれている。枝は分岐し幹は直立しない。

花は横を向いて咲く。同じモクレン科の木蓮や朴の木は大きな花が真上を向いて咲くのに、この花は不思議だ。蜜を出して蝶や蜂をおびき寄せるような事はしないらしい。そのかわり白く可憐な姿と素晴らしい香りだけで、虫も人もとりこになる。

この花は花屋で買い求めたのだが、多分中国原産の園芸種で、ホオノキとオオヤマレンゲの雑種であったウケザキオオヤマレンゲだと思う。ホオノキに似て葉が大きく成長が早いので出荷できるのだろう。それでも一年に一度出逢えるかどうかの花。無垢な美しさを鉄線と合わせてみた。



岐阜花フェスタ記念公園にて
横向きの花を上に向けて撮った



花菖蒲と紫陽花

〈3頁の花〉　櫻子

花材　花菖蒲（菖蒲科）
　　紫陽花（紫陽花科）

花器　カットガラス・コンポート

大きなガラス花器に立てた沢山の白い花菖蒲。大輪ピンクの紫陽花との色と量感のバランスを楽しんだ。美女二人と貴公子達?。



ネオレゲリア　　櫻子

花材　ネオレゲリア・アネックス
（パイナップル科）
胡蝶蘭（蘭科）
花器　ガラス花器

胡蝶蘭と取り合わせているのはネオレゲリア。熱帯から亜熱帯アメリカに分布するパイナップル科の着生植物。薄いピンク色に色づいているので花のようだが、硬い葉がこの様な形を作っている。花は株中心の筒部分に咲くが、あまり目立たないので葉が花の代わりをしているようだ。

4月の岡山での流展でもネオレゲリア・レッドパウワウとアマリリスの投げ入れをいけさせていただいた。このネオレゲリアの花は赤紫色の子株を沢山付けた形で面白く、変化がつけやすかった。エアープランツに近いので、水に浸けなくても良いが、中心部の筒に水を溜めるように与える。もともと真上を向いている植物なので、前に向けていける事は溜め込んだ水がこぼれてしまうから、迷惑な事だろうなと思いながら霧吹きで朝晩水をやり続けた。

花会の間は寝ても覚めても花のご機嫌を伺いその変化を眺める事ばかりだ。

胡蝶蘭も流展が終わってから松村先生から頂戴した。岡山産の切りたての花だったので、京都に持って帰らせていただいた。60℃程のお湯の中で水切りしてもと通りに。一ヶ月以上もの間美しく元気で嬉しかった。

岡山流展の思い出に何度も浸りながらこの花を見つめている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
7 月号
No. 637

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ファーン（シダ類）

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ディサ3種（蘭科）
　　アンブレラ・ファーン
　　（羊歯（しだ）科）
　　擬宝珠（百合科）
花器　ガラス鉢

オーストラリアにはユーカリ、プロテアやピンクッション、リュカデンドロン、カンガルーポーのようなオーストラリア固有の花であるワイルドフラワーがあり、普段のお稽古にもよくいけさせてもらっている。又最近ではユニークなグリーンの種類も増えてきた。

ファーンと呼ばれるシダ類は原生林の高木の下に一面に広がるように自生している。

今回初めて使ったアンブレラファーンは輪生の広がりを持つシダで、日本の山野草にもよく似合う。そして大変強いので二ヶ月以上も取り合わせを替えて飾って楽しんだ。

南アフリカに自生するディサという名前の蘭の花。これも海外から輸入されたもの。日本での栽培はとても難しいらしい。斑入り擬宝珠を加えて三種でいけたが、それぞれが違和感無く馴染んでいる。



パイナップル

〈3頁の花〉　櫻子

花材　パイナップル
（パイナップル科）
オクロレウカ（菖蒲科）
薔薇（薔薇科）
花器　赤色ガラス鉢

形は松笠に、味はリンゴに似ているところからパインとアップルでパイナップルだそうだ。美容と健康に良い栄養素が多く含まれて、夏バテにも効果的。そんなパイナップルに感謝をこめて同系色の薔薇と盛花にした。オクロレウカをエネルギッシュに広げて。



第 49 回 日本いけばな芸術展　テーマ「みらい、かける。」　5 月 11 日㈬～ 16 日㈪　大阪高島屋 7 階

5 人合作

花材／虫狩　オーク　芍薬 数種　　花器／焦茶色陶花器、黒釉陶花器 2 鉢　竹内眞三郎作　（写真④）

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2016 年
8 月号
No. 638

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





エレムルス

〈表紙の花〉　櫻子

花材　エレムルス（百合科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
　　モンステラ（里芋科）
花器　陶花器（市川博一作）

エレムルスはイラン、アフガニスタン、ヒマラヤ等に分布する宿根草。英名はデザートキャンドル（砂漠の蝋燭）またはフォックステイルリリー（狐の尻尾百合）。1本に300から500の花をつけ、高さ2mになるものもある。

花色は黄色を中心に、オレンジ、白、サーモンピンクなど。5月から7月頃に出荷される。

以前、飼い猫のレモンちゃんが野良猫と喧嘩したとき、相手を威嚇するためか尻尾がいつもの何倍にも膨れていたのを思い出す。表紙の満開のエレムルスはまさにその時の尻尾みたい。きっとエレムルスも乾燥地の厳しい環境に負けないぞ！と咲いてきたのではないかしら。

横から見た奥行き





クルクマ３色

〈２頁の花〉　櫻子

花材　クルクマ３種（生姜科）
　　向日葵（菊科）
　　ミリオクラダス（百合科）

花器　練込陶花器

クルクマの小輪種は優しいイメージ。夏には爽やかな白花を主に。

横から見た奥行き



ヒマラヤの百合

〈３頁の花〉　櫻子

花材　百合「クシマヤ」（百合科）
　　京鹿の子（薔薇科）
　　羽団扇楓（楓科）

花器　陶花瓶（鈴木爽司作）

ヒマラヤの百合「ネパレンセ」の改良種「クシマヤ」。淡緑色に臙脂色が入る。神秘的で美しい百合だ。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
9 月号
No. 639

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



囁くような・・・

〈表紙の花〉　櫻子

花材　竹似草（芥子科）
　　女郎花（女郎花科）
　　大手蓼（蓼科）

花器　白黒陶花瓶

山の林道脇などの日当たりの良い場所に背高く白っぽい姿で群生するタケニグサ。

初秋の秋草ととり合わせると、力強い姿で目立つ存在だ。

葉の形も複雑で、裏側が白く、とても柔らかい。ケシ科の毒草なので、鹿にも食べられず伸びやかに育ったようだ。

作例は実の出来た状態でいけているが、カシャカシャと静かな音が感じられる。ささやきぐさ「囁草」と呼ばれる所以。

茎が竹のように中空なので「竹似草」。竹と一緒に煮ると竹が柔らかくなり細工しやすくなるので「竹煮草」ともいわれるらしいのですが、本当でしょうか？



横から見た奥行き



月桃（げっとう）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　月桃（生姜（しょうが）科）
薔薇（ばら）2種（薔薇科）
ミリオクラダス（百合科）

花器　赤色釉花器

ゲットウの実を見てキャンディを想像する人は多いと思う。とても不思議な形をしている。去年の6月初旬、屋久島でゲットウの花に出逢った。白い蕾の先がほんのり赤くて、中国絵画に出てくる桃が頭に浮かんできた。

月桃という名前も不思議な名前だ。なぜ月なのだろう。

沖縄ではゲットウの葉で餅を包んで蒸したムーチーという菓子がある。葉の良い香りがするそうだ。いつか食べてみたい。





右・フイリゲットウの蕾。
左・ゲットウの花（屋久島にて）

真主型の花

〈3頁の花〉　櫻子

花材　唐胡麻（燈台草科）
　　鳥兜（胡麻の葉草科）
　　岡虎の尾（桜草科）

花器　青色釉花器

トウゴマ、ニューサイラン、トクサは真主型の花として小さい頃からよくお稽古した花で馴染み深い。子どもでも切りやすく挿しやすいからだろう。

トウゴマは長く直立した形にいけられることが多い。赤い茎や実が目立つようにかもしれないが、短く前に倒す形も軽やかで、葉を支える赤い茎が細くても力強いのがよくわかる。ヤツデに似た形の葉の葉脈も赤くて淡緑色を引き立てている。

うしろに高く立てるのではなく、前へ倒す花型。真主型では気がつかなかった姿を見つけた。

彩りを考え、トリカブト、オカトラノオと取り合わせた。



横から見た奥行き



南京櫨（なんきんはぜ）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　南京櫨（燈台草（とうだいぐさ）科）
　　鶏頭（莧（ひゆ）科）
　　ピンクッション
　　（ヤマモガシ科）
花器　デルフト焼陶花瓶

ナンキンハゼは白い実が印象的な花材だが、弾ける前の緑色の実も面白い。

作例では枝からぶら下がる実を造形としてとらえ、レモンイエローの鶏頭と鮮やかなオレンジ色のピンクッションをとり合わせて、西洋の陶花瓶にいけてみた。

ナンキンハゼは中国原産。ピンクッションは南アフリカ原産。ケイトウはインド原産。ある意味ミスマッチな出逢いでも、洋陶器にいけると違和感がなくなる。ただし花器の絵柄と花の色合いには注意したい。



横から見た奥行き



蓮台（れんだい）

〈3頁の花〉　櫻子

花材　蓮台（蓮科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　偽小判草（にせこばんそう）（稲科）
花器　白黒陶扁壺（林平八郎作）

見た感じが渋く暗い印象の花材でも、とり合わせを工夫することで、意外に面白いいけばなになることがある。

蓮台がその一つで、例えば蓮台に菊では面白みに欠けるが（菊の品種にもよる）、アンスリウムとでは違った印象になる。アンスリウムは赤、薄ピンク、グリンと変化をつけ、さらにニセコバンソウ（西洋小判草、ワイルドオーツ）を加えると、全体に優しい雰囲気になる。

器の選択も重要なポイントだ。この白黒の花器は、まるで救世主のように花たちを一つにまとめてくれる。有難い特別で不思議な器だ。



横から見た奥行き



山保呂之（やまほろし）

櫻子

花材　山保呂之の実（茄子（なす）科）
　　秋明菊（金鳳花（きんぽうげ）科）
　　桔梗（桔梗科）

花器　陶花器

大好きなヤマホロシの実。自然な動きの枝が器に留（と）まると、なんともいえない愛（あい）らしさを感じる。この愛（いと）おしい感じは何なのだろう。森の中で宝石を見つけたような感覚。ここに居るよという声が聞こえてきそう。

ヤマホロシはヒヨドリジョウゴとよく似ている。茄子の花を小さくしたような白または薄紫色の花が咲いたあと、実が緑色から黄色、赤色へと色づいてゆく。

作例のヤマホロシは、葉の形もなんだか可愛い。小さいのに、アピールがとても上手（じょうず）。

シュウメイギクとキキョウは充分に水揚げしておいて、さっといけた。

野山の風情だが、緑色の斑点の器にいけると、明るく飾っておける。花形は自然体で。

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2016 年
11 月号
No.641

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



梅擬と紫蘭

〈表紙の花〉　櫻子

花材　梅擬（鼠黐の木科）
　　紫蘭（蘭科）
　　白椿（椿科）
花器　耳付陶花瓶

梅擬の小枝を使って軽やかな投入にしたいと考え、色付き始めた紫蘭をとり合わせて、白椿で口元を引き締めた。

梅擬の艶やかな赤い実に白椿を添えると、凛とした美しさが生まれる。そこに紫蘭が加わることで雰囲気がずいぶん変わって見える。表情が柔らかくなり、優しさが加わる。

器も優しさを感じるものがいい。ほんのり赤みのある温かな風合い陶花瓶を選び、朱の敷板に飾った。



横から見た奥行き



ムラサキシキブ

櫻子

花材　紫式部（熊葛科）
　　上臈杜鵑（百合科）
　　秋桜（菊科）

花器　陶花瓶

ムラサキシキブのような色の実は他にあるだろうか。独特の美しさがあって好きな花材だけれど、とり合わせに悩む。でも今回のとり合わせは自分でも気に入っている。

紫とは反対色の黄色。そこに桃色が少し加わることで紫の鮮やかさが増した。

立ち上るムラサキシキブと垂れ下がるジョウロウホトトギスの形の対比も面白い。コスモスの優しい葉の緑が、紫色の小さな実の足元をほどよく包んでくれた。

濃色の艶やかな花瓶が、色彩の引き締め役になってくれた。



横から見た奥行き



赤い実に紅葉を

〈4頁の花〉　櫻子

花材　鈴薔薇（すずばら）（薔薇科）
　　木苺（きいちご）（薔薇科）
　　薔薇（薔薇科）

花器　三足蓋付陶深鉢

赤い実に紅葉が重なると、互いの相乗効果でより強く秋を感じられるのに加えて、実と花だけでは表現できない華やいだ明るさを感じることができる。そしてなによりも実の表情が優しくなるような気がする。

秋色を際立たせようと、純白のバラをとり合わせた。子孫を残す実とやがて散る赤い葉と大きく咲こうとする花の対照が美しい。

3種の花材を料理するような気持で、鍋型の器にいけてみた。



横から見た奥行き



黄金の舟形花器

〈3頁の花〉　櫻子

花材　ネリネ（彼岸花科）
　　槍鶏頭（ひゆ科）
　　ドラセナ（竜舌蘭科）

花器　金彩舟形花器

この舟形の器は両親がニューヨークで買ってきたもので、「花ふたり旅」にも使われている。金箔で装飾が施された煌びやかな器だ。軽い器なので重たい花材は似合わない。白いネリネと槍鶏頭、赤い縁取りのドラセナを膨らみのある扇型にいけてみた。

12月は赤と白の組み合わせをモダンにいけたくなる。そんな時の為の器を普段から見つけておきたい。

スターリンジア

櫻子

花材　スターリンジア(フトモモ科)
　　ガーベラ2色（菊科）
　　ステンレス玉
花器　赤色ガラス鉢

この白い小さな玉はスターリンジアといい、オーストラリア原産のフトモモ科の植物だ。フトモモ科といえばユーカリが思い浮かぶが、他にもワックスフラワー、ブラシノキ、それにグアバ、フェイジョアといった果樹などもフトモモ科の植物と覚えておきたい。

スターリンジアは赤や青に染められたドライフラワーのこともあるが、生の切り枝ははじめていけた。細い銀色にも見える毛が球形に生えて可愛らしい。赤と白のガーベラの鉢を見つけたので、鉢から土ごとはずしてビニールで包み、そのまま花器に入れて使った。毎朝少量の水を土に染み込ませて、長く飾っておけた。



横から見た奥行き



赤いメラレウカ

櫻子

花材　メラレウカ（フトモモ科）
　　ダリア２種（菊科）
花器　白地黒絵陶壺（森俊山作）

11月号では黄色のメラレウカに濃いオレンジ色のダリアを合わせている。日持ちがして香りもいい。色も鮮やかで、これから人気がでるだろうなと思っていたら、今度は赤いメラレウカが出てきた。

赤い葉は枝先だけなので、赤と緑が混じった感じ。若い葉が寒さで赤く色づくのだろうか。そういえばオタフクナンテンも常緑の葉が冬の間は赤く色付く不思議な木。この赤色のメラレウカも冬のいけばなに向いている。

今回は優しいピンク色の大輪ダリアを選び、赤いポンポン咲きを一本効かせてみた。モノトーンの広口壺にいけて朱塗りの敷板に置くと、花の品格が鮮やかに映える。



横から見た奥行き



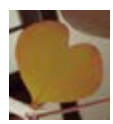
ハート形のユーカリ

櫻子

花材　ユーカリ・ポポラス（フトモモ科）
　　アメリネス（彼岸花科）
　　スイートピー（豆科）
花器　白条文陶花瓶（宮下善爾作）

このユーカリは葉が枝から少し離れたところについているので軽やかに見える。生まれたての葉は赤味が残り、暖かみが感じられる。

ユーカリ・ポポラスと呼ばれている。葉はおよそ丸形だが、希にハート形のものも混じっていて、とても可愛らしい。



とり合わせたアメリネスは初めて見る花材で、アマリリスとネリネの交配種。エクアドルからの輸入だそうだ。薄紫色のスイートピーと合わせると、優しい色の変化が楽しめる。器と敷物はユーカリの赤葉に合わせて選んだ。



横から見た奥行き



庭の千両

櫻子

花材　アスコ（蘭科）
　　千両（千両科）
　　黄実千両（きみのせんりょう）（千両科）
花器　結晶釉花器（前田五雲作）

家の庭には赤と黄色のセンリョウがある。2年前に植えたのが少ししっかりしてきたようで、実がついたのが嬉しくて、惜しいけれど、小枝を切ってオレンジ色の蘭といけた。アスコと呼ばれるランには葉がついていないので、艶（つや）やかなセンリョウの葉がよく似合う。

雪の結晶がちりばめられたような一輪挿し。オーロラのように輝いて、いつまでも眺めていたくなる。



雪柳

櫻子

花材　雪柳（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　スイートピー（豆科）
花器　波文陶花瓶（竹内眞三郎作）

3月になると京都御苑の雪柳が満開になる。小さい梅のような花がこんもりと枝先まで咲いて雪が積もったようになるほど力強い。鴨川の土手の雪柳も鮮黄色の連翹と咲き競いあって、それに急かされるように桜の蕾が膨らんでいくような気がする。

雪柳の香りや景色を思い浮かべながら、アイリス、スイートピーを取り合わせた。



3月、京都御苑にて。



蘭2種と菜種

櫻子

花材　パフィオペディルム2種
　　（蘭科）
　　カトレア（蘭科）
　　菜種（油菜科）
花器　乾山写手付鉢

パフィオペディルムという名前はギリシャ語のパフィア（ヴィーナス）とペディロン（サンダル、上靴）の二語からなり「ヴィーナスのスリッパ」という意味だそうだ。不思議な姿をしているので、よく食虫植物に間違われるが、花弁の一部（リップと言う）が袋状になっている。これは手前にいけたカトレアも同じで、この袋の中に虫が入ると花粉が付着して虫を介して受粉する仕組みになっている。

世界4大洋ランのパフィオとカトレアを一緒にいけるなんてとても贅沢な花だが、どちらも短くて悩んだ末、乾山写しの手付き鉢に盛り込んだ。

珍しいかたちを上から眺められるように。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
3 月号
No. 645

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



春の息吹

〈表紙の花〉　櫻子

花材　薇（ぜんまい）（薇科）
　　アネモネ（金鳳花（きんぽうげ）科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　手付陶水盤（柳原睦夫作）

ゼンマイはいけばなに春を感じさせてくれる。家の庭にも何種類かの羊歯（しだ）が生えているが、若芽が伸びて、可愛い渦巻きに今年も出会えるのを楽しみにしている。

花屋さんで茎まで渦を巻いているゼンマイを見つけたので、アネモネと盛花にいけた。花器に選んだ水盤の底には紺地に桃色と黄色で雲のような模様が描かれていてなんとも春めいている。そして偶然にも金色の手も渦巻き状だ。なんという偶然。

などと、一人で興奮しながら楽しくいけた。アネモネを低く挿して、ゼンマイの茎の動きを際立たせている。



横から見た奥行き



アルカンタレア・サングイネアルブラ

〈9頁の花〉　櫻子

花材　サングイネアルブラの実（パイナップル科）
　　チューリップ3種（百合科）
　　菜の花（油菜科）
花器　手付陶花瓶

ロケット状の硬い実が串の歯のようについていて結構な重みがある。サングイネアルブラという名でフィリピンからの輸入だそうだ。濃い色の花でシックにまとめるのもいいが、春らしい色彩の花と共に白い不思議な形の器にいけてみた。トロピカルに、リズミカルに。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
4 月号
No. 646

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



おしゃべりな花達

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ユーカリ（フトモモ科）
　　アマリリス（彼岸花科）
　　シンピジウム（蘭科）
花器　赤色ガラス鉢

毎年珍しくて美しいアマリリスに出会う。

今年はアマリリス・カリスマという品種。紅のインクを滲ませたような発色。花弁によって滲み方が違い単調ではない。

園芸品種ではあるが、偶然この色に染まったのか、自然の芸術家がこんな花を作り上げたのか不思議でしょうがない。すでに数百品種作られて今も増え続けている。

アマリリスはヒガンバナ科のヒッペアストルム属だが、ヒッペアストルムとは馬のように大きくて星のような花という意味らしい。

大輪のアマリリスには葉が付いていないので、今回はユーカリを添えた。

アマリリスがどっしりと豪華な花なので、動きのあるユーカリとピンクのシンピジウムを合わせて。

凄い賑やかな花だ。

皆んなが好きな方向を向いてペチャクチャおしゃべりしているようになってしまった。



横から見た奥行き

オンシジウム　櫻子

花材　オンシジウム・ハニードロップ（蘭科）
　　都忘れ（菊科）
花器　結晶釉水盤（前田保則作）

テーブルに低く花を飾りたい時、この平たい水盤は重宝する。主張しすぎず、上品な形。飾る場所に合った器を選ぶようにしたい。





カラー・エチオピカ

櫻子

花材　カラー「エチオピカ」（里芋科）
　　ポピー（罌粟科）
　　シンピジウムの葉（蘭科）
花器　黒色ガラス花瓶

花茎も太くて長いカラーエチオピカ。南アフリカ原産である。

この様な咲き方を吹き詰（ふきづめ）咲きという。日本では長野県だけで作られているらしいが、今までに数回しか見た事がないカラーだ。

根気よく育てられたらこんな風に咲くのだろうか。湿地を好む宿根性で肥料の与え方も難しいのだろうが、肥沃で暖かな土地も必要だろう。

日本では情熱をかけて野菜も花もめずらしいものが作られていて有難いと思う。

私もあと何度この花をいけることが出来るだろうかといつもその瞬間を大切にしている。

ポピーに精一杯開いてもらって足元に添えた。

切りたての一番綺麗な蘭の葉で軽やかな姿に変えて、とっておきのガラス器に飾った。



横から見た奥行き



薄暑（はくしょ）の花

櫻子

花材　花水木（はなみずき）（水木（みずき）科）
　　イリス・オクロレウカ（菖蒲（あやめ）科）
花器　陶花瓶（メキシコ人作）

八重桜が終わる頃、春の花会などの行事が一段落するせいか少し淋しい気分になる。そんな頃に一斉に咲き始めるハナミズキのお陰で又気分も新たになれるのが嬉しい。夏の最初、「薄暑」だ。初夏の服に着替えて、颯爽と出かけなければ！

水木の仲間で花が美しいので、ハナミズキと呼ばれている。初夏の日差しを受けて新緑の輝きが増す中で、枝を横に広げてのびのびと目立つ花を咲かせてくれる。投げ入れでそんな風にいけてあげたい。

オクロレウカはギリシャ語で、Ｉｒｉｓ（虹）Ｏｃｈｒｏｌｅｕｃａ（黄色みを帯びた）という意味。トルコ原産のアヤメ科の多年草で湿地に育つ。

今年は花菖蒲（はなしょうぶ）に代わってオクロレウカの方が花も葉も育ちが良く、お稽古花としても何度もいけさせてもらえた。

五月晴れの爽やかな青空を背景に元気いっぱい咲いてほしい。



横から見た奥行き



クロウフィッシュの器

櫻子

花材　カラー（里芋科）
　　カーネーション（撫子科）
　　玉羊歯（玉羊歯科）
花器　絵付陶鉢

ニューオリンズでは冬が終わり暖かくなり始める春頃からクロウフィッシュ（ザリガニ）のシーズンが始まる。釜茹でした真っ赤なザリガニをこの器に山盛りして、皆で味わうのだろう。

ザリガニと一緒にコーンやジャガイモ、ネギ、ニンニク、レモンも描かれている。レシピを忘れてもこの器を見れば買い揃えるものを忘れない。きっと待ちどおしい旬の器なのだろう。

そんな器に花をいけるなんて、ニューオリンズの人はどう思うかしら。両親が買ってきてくれた器なので、花器としてずっと大切に扱っている。

苞の大きく開いたカラーとギザギザな花弁のカーネーション、玉羊歯。5月の旬をいけてみた。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
6 月号
No. 648

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



フリチラリア

〈表紙の花〉　櫻子

花材　フリチラリア（百合科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　アロカシア（里芋科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　ガラス大鉢（近藤高弘作）

フリチラリアは黒百合や貝母百合の仲間で、イラン、トルコ、アフガニスタンなどに分布する多年草。頭頂部に小葉が集まってつく品種が一般的だが、写真のフリチラリアの先端に小葉はない。調べると、頭に小葉のあるのがインペリアス、今回いけたのはペルシカという品種のようだ。茎が太く丈夫で存在感がある。大輪のおばけアンスや、大きなアロカシアの葉といけても、それらに負けていない。茎に動きもあるので、アンスリウムと共にゆったりと立て、足元はアロカシアで引き締めた。

最後にミリオクラダスで水際を整える。





ライラック

〈3頁の花〉　櫻子

花材　ライラック（木犀科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　ガラス花器
　　（チェコ・モゼール）

ライラック（リラ）は水揚げの難しい花だが、優しい花色と甘い香りが大好きなので、皮を削り足元を割って短くいけ、少しでも長く楽しみたい。黄バラの潑剌（はつらつ）とした鮮やかさが加わることで、初夏の生命の輝きが感じられる。





横から見た奥行き



七夕飾り

〈2頁の花〉　櫻子

花材　笹（稲科）
　　鳴子百合（百合科）
　　姫百合（百合科）
　　桔梗（桔梗科）
花器　濃茶色陶花瓶

七夕飾りは短冊に願い事を書いて笹に飾る行事で、五節句のひとつ。桃の節句や端午の節句のように祝う行事ではないが、その時々の季節の行事を大切にしてきた日本らしい習慣だと思う。

家の南側の壁をきれいに直し、笹を植えたら良く繁ってくれている。それ以来、笹をいける事が多くなった。姫百合や桔梗の花も、笹といけると、七夕の星のように見える。

白斑（ふ）が多くて珍しいナルコユリはまるでＭｉｌｋｙ　Ｗａｙ（天の川）。



横から見た奥行き

広口花瓶にいける

〈3頁の花〉　櫻子

花材　美白百合（百合科）
　　胡蝶蘭（蘭科）
　　バンダ（蘭科）
　　クテナンテ（クズウコン科）
花器　デルフト花瓶

口の広い花瓶は、中に剣山を入れ、支柱を4本立てて十文字配りを固定しておくといけやすい。

お祝いのいけばなの参考に、白い百合と、ピンクの二種類の蘭のとり合わせでいけてみた。







スモークツリーと祭り寿司　櫻子

花材　スモークツリー（漆科）
　　柏葉紫陽花（紫陽花科）
　　レナンセラ（蘭科）
花器　練り込み陶花器

梅雨に入る少し前になるとスモークツリーが咲き始める。不稔花（種を結ばない花）の軸部分（花柄）が長く伸びて羽毛のようになった時が一番の見頃となる。

ヨーロッパ、ヒマラヤが原産地で乾燥気味を好むので、日本の梅雨時分に咲くのは迷惑だろう。雨の中ではなかなか爽やかな羽毛になりにくいと思う。

岡山のお弟子さんも庭にスモークツリーを育てておられる。風通しと日当たりの良い場所に植えておられるので、のびのび育っている。

6月の中旬には、スモークツリーを主材にしたお稽古を、もう2年通してさせてもらえている。庭の木を切ると、新鮮で枝ぶりも選べて、何よりもきれいな葉が付いてきて、活き活きとしたいけばなになるのが有り難い。切るときに樹液が出るが、松ヤニのような香りがする。ウルシ科の木だが、かぶれないようだ。

今年のお稽古は切りたてのスモークツリーに紫陽花やエレムルス、ギガチンウムなど、カラフルな花を一本ずつ合わせてみた。ふわふわした雲の中に、初夏の花が気持ち良く咲いているような花になった。スモークツリーには明るくて派手な花が合うように思う。

いけ終わって鑑賞した後は、家で作られた祭寿司でもてなして下さる。ちらし寿司の上にモガイやエビ、サゴシなど、岡山ならではの具が10種以上盛られる。京都の地味なちらし寿司とは違うな～といつも感激して頂戴している。

来年も又スモークツリーがのびのびと育ってくれます様に。



横から見た奥行き

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2017 年
8 月号
No. 650

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ピッチャープランツ（食虫植物）

〈表紙の花〉　櫻子

花材　黄花カラー（里芋科）
　　プロテア（ヤマモガシ科）
　　サラセニア（サラセニア科）
　　アンスリウムの葉（里芋科）
花器　濃赤色ガラス花瓶

虫をとらえて袋で消化するという、風変わりな生態を持つピッチャープランツと呼ばれるサラセニアの葉。北アメリカ原産で「ペテン師のトランペット」とかオウムのくちばし」などと呼ばれている。

食虫植物は大抵気持ち悪い姿のものが多いが、サラセニアの葉は赤い網目模様が美しく、個性的で側に飾りたくなる。昆虫を捕らえ消化して、やせた土地でも生き延びることが出来るので、その不思議な魅力に引きつけられているのかも。

初夏の頃咲く花も独特な形をしていて、ミシシッピーの沼地で育つ風景はまるで遠く離れた惑星の景色のようだ。

トロピカルな雰囲気があるのでカラーとプロテアを一緒にガラス器に生けてみた。



横から見た奥行き



グラジオラスとアジサイ

〈2頁の花〉　櫻子

花材　グラジオラス（菖蒲科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　ステンレス籠

近年、アジサイは輸入も増えて、一年中いけられるようになった。今回も2頁と3頁にアジサイをいけているが、ともに花色が鮮やかだ。赤い方にはグローイング・アルプスという品種名がついていたが、他の花色もあるようだ。

グラジオラスも時期が長くて花色も多い。アジサイとグラジオラスで、お気に入りの色の組みあわせを見つけたら是非2種でいけておきたい。あとは似合う器を考えるだけ。これがなかなか難しいのだが。

夏なので、ひんやりとしたステンレス製の籠を選んだ。大小二重に重ねると、銀色の森のように見える。籠には水が入れられないので、こういう時のために黒い器を合わせてある。



横から見た奥行き



タニワタリノキ

櫻子

花材　谷渡の木（茜科）
　　姫百合2種（百合科）
花器　通草籠

岡山の先生が育てたタニワタリノキを初めて生けたのは、4年程前で、それから花屋さんでも切り枝を見るようになった。

屋久島原産の珍しい常緑低木で、谷間に群生するところからこの名前になったらしい。クチナシやサンタンカと同じくアカネ科の木。花は丸く咲きルリ玉アザミに似ていてとても可愛らしい。

細長い雄しべが突き出すからか、人工衛星の木という名前もある。

夏の頃に艶やかな緑の広葉をつけた枝はありがたい。この時期の枝物は種類が限られていて、小さく生けても伸びやかさを感じさせてくれるひと枝だ。

アケビの籠にヒメユリと生けて、軽やかで涼しげな花として楽しませてくれた。



草紫陽花（くさあじさい）

＜2頁の花＞

櫻子

花材　草紫陽花（紫陽花科）
　　ベロニカ・ブルーエイリアン
　　（胡麻の葉草科）
　　ヒペリカム（弟切草科）
花器　通草籠（あけびかご）

クサアジサイはアジサイの仲間だが、アジサイより少し遅れて7月～9月に咲く。アジサイと比べて茎が細く、葉も薄くて細長い。やや湿った林に生える山野草だ。花は白または淡紅色。最初白花でも、やがて淡紅色に変化するものも多いそうだ。

あまり保ちの良い花ではないが、自然の風情がある。中央の両性花が結実する秋頃にもいけてみたい。

ルリトラノオを小さくしたようなベロニカ・ブルーエイリアンと、キンシバイの仲間のヒペリカムの実をとり合わせて、少し素朴な籠花にしてみた。

通草（あけび）の蔓で編まれていて、お買い物籠にも花籠にも使っている。



横から見た奥行き



オリーブの実

櫻子

花材　オリーブ（木犀科）
　　薔薇（薔薇科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　彩泥陶ビアジョッキ
　　（宮下善爾作）

オリーブの実が生った枝は、小さないけばなに向いている。いける機会が希な珍しい花材を主役としていける時は、とり合わせる相手の色やボリューム、器との相性に充分に気を配る。

艶やかな明るいグリーンの実と細長く固い濃緑色の葉。セピアがかったピンクのバラを添えると、西洋の香りがする。ダークブルーからモスグリーンへ、4段階の色土でデザインされたビアジョッキに挿すと、オリーブが心地よさそうにしてくれた。さらに軽やかな白のアンスリウムを足す。オリーブの故郷、地中海の光と風を感じる小品花。



横から見た奥行き



赤い葡萄

櫻子

花材　アマランサス（莧科）
　　スモークグラス（稲科）
　　葡萄（ぶどう）3種（葡萄科）
　　緑　シャインマスカット
　　赤　クイーンニーナ
　　黒　ピオーネ
花器　白ガラス花瓶
　　高足ガラス皿

今年も待ち遠しい秋が少しずつ近くなってきたようだ。

秋は果物の季節。岡山から頂戴した固くて大きな葡萄は一粒一粒が艶やかで工芸品のようだ。

新しい品種も実りを迎えた。「クイーンニーナ」という赤い葡萄は、至れり尽くせりで育てられたお姫様のよう。もったいなくてすぐには食べられない。いつもの事だが、テキストの写真に納めてからゆっくり楽しみたい。

同系色のアマランサスも岡山育ち。

いつも岡山の恵みをいただき感謝の気持ちを込めていけた花。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
10 月号
No. 652

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





パンパスグラス

〈表紙の花〉　櫻子

花材　パンパスグラス（稲科）
　　鶏頭2種（莧科）
　　ビバーナムの実（忍冬科）

花器　菱形紋陶花器

大きな庭でないと栽培が困難なパンパスグラス。雄大な自然の中で伸び伸びと育つイネ科の多年草。8月のお盆の頃出回る若い花穂は剥いても細くて柔らかくボリュームの無いまま萎んでしまう。

9月半ばまで待つと、やっと大きな花穂のパンパスグラスが出てくる。ふさふさした銀白色で絹糸のように光沢がある。私は先端を切り落として、風に揺れるような姿にいけるのが好きだ。

今回は花冠が扇型のボンベイ鶏頭と合わせた。インドの種から育ったボンベイ鶏頭。これも輝くような花が特徴だ。色づき始めたビバーナムの実を足元に添えた中秋のいけばな。



横から見た奥行き

アナベル

〈2頁の花〉　櫻子

花材　鈴蘭薇（薔薇科）
　　アナベル（紫陽花科）
　　薔薇（薔薇科）

花器　陶花瓶（伊藤典哲作）

アナベル…ヨーロッパの美しい女性を思わせるような名前。北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸品種で、真っ白で大きな花房になる。

日本のアジサイと同じく栽培が容易で、毎年良く開花するらしい。京都の御池通り沿いにも沢山植えられていて、咲き始めのグリーンから白、又グリーンへと色が変化していくのを見るのが楽しい。切り花でも夏から秋の頃まで出回るので、稽古花としても使うようになった。

秋の半ば頃、花房が大きくなり半分ドライフラワーのような感触になった頃が一番使いやすい。萎れる心配がないので大きく伸びやかにいける事ができる。長くて重いスズバラとバラをバランス良く繋げてくれる。



横から見た奥行き



自然の色を大切にする

櫻子

花材　丸葉の木（満作科）
　　鶏頭（莧科）
　　秋海棠（秋海棠科）
花器　陶花瓶

赤や橙や黄色に色付く葉をいけるのも、秋の楽しみの一つだ。なかでもマルバノキの色付きは特に好き。一本の枝にもグラデーションがあり、さらに一枚の葉の中にも色の変化がある。今年はどんな花と合わせてみようかと、毎年楽しみにしている。

はじめてシュウカイドウを合わせてみた。瑞々しい緑の葉が加わることでマルバノキの葉色がより鮮やかに見える。さらにピンクの花と赤い丸葉が優しく呼応してくれた。ケイトウの黄色と花瓶の紺色が、全体の色彩に厚みを与えてくれた。

こんな風に自然の色を自分なりに生かすことができた時、心から嬉しく思う。



横から見た奥行き



枝垂れを楽しむ

〈2頁の花〉　櫻子

花材　更科升麻（さらしなしょうま）・晒菜升麻（さらしなしょうま）（金鳳花科（きんぽうげ））
　　山鳥兜（やまとりかぶと）（金鳳花科）
　　木苺（きいちご）（薔薇科（ばら））
花器　陶花瓶（林平八郎作）

サラシナショウマの伸びやかな白い花穂は、一本一本かたちが違って自然味がある。とり合わせにも、自然の風合いが感じられる相手を選びたい。長く枝垂れたヤマトリカブトと共に長く前へ出し、足元に色付いた木苺を加えて両者をつないだ。



横から見た奥行き



ダンシング・レディース・ジンジャー

〈3頁の花〉　櫻子

花材　グロッバウィニティ（生姜科）
アンスリウム（里芋科）
夏蘿の実（蘭蹋科）

花器　白磁花瓶

ピンク色のやじろべえが幾つも繋がっているみたい。その手の先に黄色い花が顔を出している。非常に個性的な花だ。グロッバ・ウィニティはジンジャーの仲間で、ダンシング・レディース・ジンジャーとも呼ばれる。たしかに女の子達が両手を広げて躍っているような花だ。

淡い花色なので、深紅のアンスリウムを合わせると華やかになる。季節感を加えたくて、夏蘿の実だけになった枝を覗かせてみた。グロッバと一緒にステップを踏んでくれているみたいだ。



横から見た奥行き



シーグレープ

櫻子

花材　シーグレープ（蓼科）
　　アメリネス（彼岸花科）
花器　ガラス花器

シーグレープは浜辺葡萄とか心葉とも呼ばれる。丸い団扇のような葉が面白い。赤と黒のどっしりしたガラス花器にいけると、葉の葉脈の赤色が際立つ。





カンガルーポー

〈2頁の花〉　櫻子

花材　カンガルーポー2種
　　（ハエモドルム科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶製鍋（林 聡江作）

見れば見るほど不思議な花。先が6つに裂けていて、細い毛に覆われた筒状の花を咲かせるが、カンガルーの前足（ポー）に確かに似ているような気がする。カンガルーを近くで見た事がないので、なんともいえないが。

オーストラリア原産のハエモドルム科だが、ハエモドルムとは「血の贈り物」という意味。昔からオーストラリアの人達が、赤い地下茎を食用にしていたからという。花色は黄色だけではなく、赤、黒、オレンジ、紫と多彩だ。今回はピンクシルバーも混ぜてみた。土鍋にいけて暖かな雰囲気に。



横から見た奥行き



汽車ポッポ

〈3頁の花〉　櫻子

花材　ヒペリカム（弟切草科）
　　アルストロメリア
　　（アルストロメリア科）
　　ダリア（菊科）
花器　陶製機関車

「長らく流誌に続けてきた『ホッホチャンとケンチャン』は、素子と孫の健一郎の会話から生まれた、いわば『花遊び』のスケッチである。そして、その『花遊び』を通じて、いけばなに深い関心を持ってもらいたかったのである。」と父が本の序文に書いている。健ちゃんも21才になった。お友達を相手に先日はじめての稽古をしていたが、いけばなへの興味が深まってきたようだ。

　子供のためにいける花。そんな気持をこめて焼き物の機関車に花をいけた。シュッポシュッポと、童心に帰って、心は野山を駆け巡る。



横から見た奥行き



シンフォリカルポス

櫻子

花材　シンフォリカルポス（忍冬科）
　　ユーカリの蕾（フトモモ科）
　　デンファレ（蘭科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　鹿耳ワインクーラー

ムラサキシキブの実かな？と思うほど似ているが、実が密集してブドウのように固まって付いている。これは北アメリカ原産スイカズラ科のシンフォリカルポスという名前の木だ。寒冷地でも暖地でも良く育つので最近よく見るようになってきた。白い実の改良種もあるが、ワインレッド色は原種に近いらしい。葉が付いていても取り去っていけた方がいい。ミリオクラダスのようなたっぷりの緑を添える事で艶やかな姿になる。

グレーの実に似ているのはユーカ



横から見た奥行き

京都新聞10月21日㈯朝刊・京の彩時記「道を究める」に櫻子副家元のことが紹介されました。（車の広告企画連載として）

■京の彩時記
道を究める ①

企画・制作＝京都新聞COM

千年の歴史と伝統が残る古都・京都に通底する「おもてなし」と「美意識」。先人たちの教えと伝統を守り、未来へつなぐ思いが、京都をより豊かな文化都市へと育む。今回、華道桑原専慶流副家元の桑原櫻子さんに受け継がれる文化としてのいけばなについて伺った。



桑原櫻子　桑原専慶流副家元





いけばなの魅力は 花を通して四季を感じ 花との対話を楽しむ心の豊かさ。

桑原専慶流は、江戸時代前期、立花の名手とうたわれた第100華足利将軍家に仕えた桑原羽林仙流を流祖として300年以上の歴史を誇る華道の家元。六角通に面した邸宅は、半間ほどの格子戸を抜けると、水打ちされた細く長い石畳の露地が続く。水盤には季節の花が浮かび、玄関の土間掃き花が訪れる人を温かく迎える。一歩足を踏み入れれば、大型ビルが立ち並ぶオフィス街の一角とは思えないほどの静寂が辺りを包む。昭和のある時代面間、立花の名手とうたわれた第100華足利将軍家は、戦後、櫻



日の出

〈3頁の花〉　櫻子

花材　南天（目木科）
　　オンシジウム（蘭科）
　　アイリス（菖蒲科）
花器　舟形陶花器（宇野仁松作）

山で、海で、初日の出を拝まれた方も多かったのではないでしょうか。新春を言祝ぎ、お日様への感謝をこめて。日の光が世界を照らし、温もりが届きますように。アイリス（虹）の彩りを加えて。



ソロバンノキ

櫻子

花材　青文字（楠科）
　　チューリップ3種（百合科）
花器　陶鉢

別名ショウガノキ、ソロバンノキとも呼ばれるアオモジ。クスノキ科の落葉小高木で、昔からあるいけばな花材として秋頃から花屋に並ぶ。そのせいか、緑のつぶつぶを実だと思っている人が多い。桐や猫柳と同じ花の蕾なのだが。

淡緑色の苞に数個の蕾が包まれている。だんだん大きくなって、やがて苞が割れて蕾が顔を出す。暖かい部屋なら白い花が咲くこともある。

真冬にわざわざチューリップをいけなくてもよいと思うが、春を待つアオモジと取り合わせたくなった。木肌がうす汚れた緑色なので、いける時は幹を隠し蕾を目立たせたい。

最近お菓子の楊枝（ようじ）も黒文字よりも青文字の方が多いようだ。キリッとしたこげ茶色の楊枝で和菓子を頂きたいのだが。



横から見た奥行き



赤茶色のヒペリカム

櫻子

花材　アマリリス（彼岸花科）
　　ヒペリカム（弟切草科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　陶花器（近藤豊作）

秋が深まると枝も葉も実も赤茶色になるヒペリカム。夏までに剪定すれば9月にはもう一度花が咲くので緑の葉と赤い実が楽しめるが、剪定せずに 力強くなった枝はアマリリスの足元にもこんもりと添える事が出来た。昔からの冬の枝もの花材は少なくなったが、又新しい改良種が加わって彩りを添えてくれる。

冬にアマリリスをいける時は首元までしっかり芯棒を入れてあげる事。私の家のように皆が集まる部屋以外寒すぎる室内だと、飾っている花も凍てつく事がある。大輪の花が咲きそろっても、重さと寒さで折れ曲がらないようしっかりと支えてあげよう。



横から見た奥行き



薔薇（ばら）のように

櫻子

花材　葉牡丹（はぼたん）（油菜科）
　　ミニ・デンファレ2色（蘭科）
　　スイートピー（豆科）
花器　赤釉陶花器（宮本博作）

冬の寒さに晒されて葉緑素が抜け、クリーム色に色づいたハボタン。昨年は葉が縮れて切葉水菜のような品種を飾って楽しんだが、今年は丸くて小さいハボタンを選んだ。

ハボタンだけでは地味に見えるが、葉を広げて大きく見せ、スイートピーのような優しい姿の草花と合わせると大輪のバラのようだ。珍しい花ではないが、お正月にしか出荷されないので、一度は買いたくなる。私は料理が好きなので珍しい野菜を買い求めるような感覚で欲しくなるのかもしれない。

ハボタンに白いスイートピー。そこへピンクのミニ・デンファレを加え、赤い器にいけると、明るくて華やかな花になった。



横から見た奥行き



ネコヤナギ

櫻子

花材　猫柳（柳科）
　　ストック（油菜科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
花器　陶大皿（モロッコ製）

以前、アフリカのモロッコで花展をした時、幼稚園児が大勢で見に来てくれた。その時の子供達の笑顔を思い出しながらラッパスイセンをいけた。ネコヤナギの柔らかな感触が優しく寄り添う。



横から見た奥行き



ヴロァウン

櫻子

花材　オンシジウム（蘭科）
　　ミニ胡蝶蘭（蘭科）
　　ゲイラックス（岩梅科）
花器　鶴首陶花瓶
　　「ヴロァウン」2種

家元宅での初春の会には、新年のお料理が並ぶ宴席に、花の設えをして楽しんでいる。今年は鶴首花生けで「ヴロァウン」に花をいけて飾った。これは京都青窯会作陶展の50周年を記念して考案された焼きものである。

シンプルでモダンを基本とした一輪挿しが青窯会の作家や職人によって様々な技法で生まれていくのが楽しい。

西出真英作の「掻き落とし」、前田安徳作の「鉄釉」を並べて、オンシジウムと胡蝶蘭をいけた。「ヴロァウン」はスウェーデン語の「青い窯」という意味だそうだ。今後も青窯会の皆さんがつくる器が楽しみだ。



横から見た奥行き



お紅茶の代わりに

櫻子

花材　ラグラス（稲科）
　　アネモネ（金鳳花科）
花器　ティーカップ

ヨーロッパの美術には多くのアネモネが出てくる。ルノワールやマチスも好んでこの花を描いている。花姿は今とあまり変わらないが、深みのある花色と姿の調和が絵になりやすいのかもしれない。

好きな花は小さくいけて、身近に置いて眺めていたい。大きめのティーカップを花器にして、食卓に季節の彩りを加えるように。

このカップは父が毎朝お紅茶を楽しんでいたもので、母と色違いのお揃いだ。濃いめに淹れたお紅茶にお砂糖とミルクをたっぷり入れて…。何でも沢山入れる父にはぴったりのティーカップ。春に実るラグラスとアネモネを飾った。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
3 月号
No. 657

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ラナンキュラス・ラックス

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ラナンキュラス（金鳳花科）
「ラックス・ピュタロス」
チューリップ（百合科）
花器　トルコ製真鍮バケツ

ラナンキュラスの新品種「ラックス」は花弁に光沢があるスプレー咲き。今後人気がでるだろう。



横から見た奥行き



スネークボール　櫻子

花材　アリウム・スネークボール（百合科）
　　シキミア（蜜柑科）
花器　赤黒ガラス花器

はじめは3種でいけようと考えていたが、アリウムの曲がりくねった茎の重なり合いが思いの外面白かったので、赤いシキミアとの2種で赤い器にいけ、構成も色彩もシンプルにまとめてみた。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
4 月号
No.658

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





ブルビネラ

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ブルビネラ（ツルボラン科）
　　シーグレープ（蓼科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
花器　盃型ガラス花器

春の到来を告げる南アフリカ原産のブルビネラ。オーニソガラムなどにも似ていて、目立った特徴も無く平凡な花と思っていたが、この春一番に入って来たものは、カラフルで背も高く今までと違う花型にもなった。一本の花からは何百輪も花を咲かせるらしい。そのせいか花を支える茎がしっかりと固くて長くいける



横から見た奥行き



アンブレラファーン

〈3頁の花〉　櫻子

花材　カラー（里芋科）
　　ラナンキュラス（金鳳花科）
　　アンブレラファーン
　　（裏白科）

花器　青色ガラス鉢

オーストラリアから輸入される葉ものは種類が年々増えている。
シダ類のアンブレラファーンも傘の様な面白い形で洋とも和ともつかない不思議な雰囲気だが、全体に瑞々しさを与えてくれる。



横から見た奥行き

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2018 年
5 月号
No.659

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ビバーナム スノーボール

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ビバーナム（忍冬科）
　　鉄砲百合（百合科）
　　レナンセラ（蘭科）
花器　赤色釉花器（宮本博作）

長くて綺麗なビバーナム。こんなに長くいけても一週間しっかりと元気に咲いてくれた。足元を割り皮を削ってしっかりと剣山に挿す。水は毎日足して出来るだけ澄んだ深水にしてあげる。

一週間後には他の花も切り詰めて短く投げ入れに生け替えたが、まだ日持ちしてくれている。

ビバーナムは水が下がりやすいと言われるが、花が機嫌良く心地良ければ長く楽しめる。アジサイに近い花でオオデマリにも似ているが葉が柔らかく瑞々しい。花は緑色から白へと変わっていく。倉敷のお弟子さんが四月の花会でいけておられたビバーナムは大きくて真っ白のアジサイの様だった。ヒョウタンボクの間から溢れる様に咲くフワフワのビバーナムが印象的ないけばなだった。



横から見た奥行き

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2018 年
6 月号
No.660

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





花菖蒲と紫陽花

〈表紙の花〉　櫻子

花材　花菖蒲2種（菖蒲科）
　　オクロレウカの葉（菖蒲科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　オレンジ色ガラス花器

今年は花菖蒲の季節が早くやってきた様な気がする。4月末には早咲きの薄紫色に加えて白や濃紫色も売られ、華やかなお節句を迎えられた。

茎が太いものは殆ど3番目まで咲いてくれた。萎れた花の隣に次の花が出てくるのは嬉しいものだ。

勢いある葉はオクロレウカだ。ピンクのアジサイを足元に集めると、オレンジ色の花器と一体になってくれた。



横から見た奥行き



ライラック

〈2頁の花〉　櫻子

花材　ライラック（木犀科）
　　アマリリス（彼岸花科）
　　フィロデンドロン・レモンライム（里芋科）
花器　オレンジ色ガラス花器

ライラックの花弁の一つ一つは小さいのに、穂の様に集まって咲く姿を見ると心がとても豊かになる。色も綺麗で甘くて上品な香り、家族が好きだった花だけにこの季節は必ずいけて飾りたい。

切り花のライラックは一本立ちで売られる事が多いので、花型が単調になりやすい。たっぷりと厚みのある花姿になるようにいけてゆく。

水あげが悪いので、まず足元の皮を削り、さらに割って中心の髄をハサミで削り出す。そうしていけると良く日持ちしてくれる。

バラと合わせる事の多いライラックだが、細くて品の良いアマリリスといけた。レモンライムの葉を添えて。



横から見た奥行き



食卓の花

〈3頁の花〉　櫻子

花材　縞太藺（しまふとい）（蚊帳吊草（かやつりぐさ）科）
　　満天星（どうだんつつじ）（躑躅（つつじ）科）
　　都忘れ2種（菊科）

花器　カットガラス舟形花器

どこから見ても綺麗な食卓の花。シマフトイが軽やかで涼しそう。長くいけてもお料理の邪魔をしないように控えめに。四方正面で。



横から見た奥行き



姫空木（ひめうつぎ）とベル鉄線（てっせん）

櫻子

花材　姫空木（雪の下科）
　　ベル鉄線（金鳳花（きんぽうげ）科）
花器　丸紋染付花瓶

野に咲く小さな花を摘んで帰りたい、そんな気分にさせてくれる野趣（やしゅ）のある可愛らしい花材に出合うと、つい買ってしまう。ピンクのヒメウツギやベルテッセンもそんな花の一つだ。

ウツギは茎の中心が空洞なことから空木と名が付いた。ウノハナ（卯の花）とも呼ばれ、卯の花月とは陰暦の4月のこと。今の5月にあたり、丁度ウツギがいっせいに咲き始める。ウツギの名がついた植物は多い。ある種のウツギは材質が固くて木釘（きくぎ）の材料になる。花器の桐箱の木釘に使われているそうだ。

幾何学模様の染付花瓶で、全体に抑揚を与えている。



横から見た奥行き



竹島百合

〈2頁の花〉　櫻子

花材　夏櫨（躑躅科）
　　竹島百合（百合科）
　　撫子（撫子科）

花器　手付竹製バスケット

子供の頃、母と市場へ行く時はこんな買い物籠だった。今は季節の草木をざっくりいけて楽しんでいる。爽やかな初夏の籠花。



横から見た奥行き



アメリカ手毬下野

〈3頁の花〉　櫻子

花材　アメリカ手毬下野（薔薇科）
　　向日葵（菊科）
花器　陶水指

生活雑貨を扱う店で大きな水指を買った。安定がよく、実になり始めたアメリカテマリシモツケも大きな枝を伸び伸び挿せる。ヒマワリ2種を合わせると同系色の濃淡が美しい



横から見た奥行き



スモークツリー

〈3頁の花〉 櫻子

花材　スモークツリー（漆科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　ヘレンド窯花器

スモークツリーは小さな花が咲いたあと、結実するのはほんの僅かで、殆どの花は散った後花柄を煙状に伸ばして実を守るように取り囲み、やがて実と共に風に乗って飛んで行く。子孫を残すという目的のため、それぞれが役割をしっかりこなしている。

そんな事を知ると、スモークツリーが愛おしくより美しく見えてくる。その美しさを長く保ってほしいから、水揚げを充分にするようにしている。水の中で足元を切る。足元を割っておく。足元の皮を削る。いけた後も時々は切り直す。

ピンクのバラと赤いスモークツリー。ハンガリーの名窯、ヘレンドにいけると、気分はヨーロッパ貴族。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
8 月号
No. 662

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





ビバーナム・コンパクタ

〈表紙の花〉　櫻子

花材　カラー2色（里芋科）
　　ビバーナム（忍冬科）
花器　金彩ガラス鉢（ウルリカ作）

夏の時期、枝ものが少なくなるが、最近出回るようになった実もの。枝も太く立派で葉も実も多い。葉を間引いてやるとたわわな実がこぼれ落ちる様に見えてくる。

ウルリカ・ヴァリーンさんが描いたお魚が実を狙っている。紫色と白色のカラーもパクパク口を開けてる海藻かも。

深い海の中にいるような景色。

横から見た奥行き





ミニパイナップルと枯紫陽花（かれあじさい）

＜2頁の花＞ 櫻子

花材　ミニパイナップル（パイナップル科）
　　紫陽花（紫陽花科）
　　リビストニア（椰子（やし）科）

花器　水玉文陶鉢

観賞用のミニパイナップルにしては大きな実をつけていたので、剣山に太い茎をしっかりと挿した。猛暑も平気な実とヤシの葉。美しく枯れた紫陽花を添えて。



横から見た奥行き



バンクシア

〈3頁の花〉　櫻子

花材　バンクシア（ヤマモガシ科）
　　レナンセラ（蘭科）
花器　赤色ガラス花器

バンクシアはオーストラリア原産ヤマモガシ科の常緑低木。このバンクシアは松の枝葉に似た茎の中から穂状の花を咲かせる。世界中を航海して各地の珍しい植物を採取したジョセフ・バンクス卿に因んでいる。

這うように伸びる低木なので、大きくはいけられないが、こんな時は吸水性スポンジ（オアシス）を使うと良い。茎が直接水に浸かる場合と比べて水が汚れにくいのも有り難い。花器にぴったり詰めれば重たい枝も動かない。

ワインレッドのガラス器にいけたので、足元はレナンセラを挿した。

スポンジにしっかり水を吸わせていても毎日水を足してあげる事が大切。



横から見た奥行き



ピンクッション

櫻子

花材　ピンクッション（ヤマモガシ科）
羽毛鶏頭（莧科）
ローリエ（楠科）

花器　陶花瓶

ピンクッションも針山も知らないと若い学生は言う。家には無いし見た事もないのだろう。小さなソーイングセットくらいしかないのかもしれない。アフリカやオーストラリアには他の国とは違う独特の珍しい植物が沢山ある。

似ているものに例えられた名前も多くカンガルーポー、ブラシノキ、ライスフラワーなど、最初に見つけた人は嬉しくて夢中になって木や草に名前をつけたのだろうか。よくこんなにピッタリと思える名前を考えたなぁと感動する事も多い。

艶やかな光沢のあるウモウケイトウを葉のように添えた。

横から見た奥行き





セルリア

櫻子

花材　アンスリウム（里芋科）
　　セルリア（ヤマモガシ科）
　　斑入モンステラ（里芋科）
花器　青色ガラス花器

今年の夏は暑くて暑くて花が保たなくて、とても苦労した。それでも新しく花を生け替えると、スッとリフレッシュして自分も元気になる。

水がお湯にならないように何度も花器に氷を入れたり、夜寝る前に水を替えたり色々工夫した。日持ちする花を選んでいるので、今月号にはオーストラリアや熱帯の植物が多い。

アンスリウムの足元に添えたセルリアもオーストラリアからの輸入花材。南アフリカ原産の常緑低木で柔らかで繊細な花だ。他が枯れてしまった後もドライフラワーにして長く飾っている。英名のブラッシング・ブライドは「はにかんだ花嫁」という意味なので、ウエディングブーケに使われる花だそうだ。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
10 月号
No.664

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ハンギングヘリコニア

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ハンギングヘリコニア
（芭蕉科）
　　トルコ桔梗2種（桔梗科）
花器　陶コンポート（柳原睦夫作）

固い茎から花が長く釣り下がるハンギングヘリコニア。ピンク色した苞は折れやすいが、花茎は強くしなやか。茎を切るとバナナの良い香りがして、バショウの仲間の植物である事を感じさせてくれる。柳原睦夫さんのポップで艶やかな花器に良く似合う。



横から見た奥行き



スズバラ

〈2頁の花〉　櫻子

花材　鈴薔薇の実（薔薇科）
　　丸葉の木（満作科）
　　二輪菊2種（菊科）
花器　陶花器（小川欣二作）

スズバラという名前で流通しているバラの枝。お稽古花にも使えるくらい沢山切り枝として出荷されるが、正式な名前では呼ばれない。バラ科の常緑低木のロサ・グラウカ。葉も花も付かない姿なので、出来れば秋らしい彩りの葉を添えたい。



横から見た奥行き



ヒオウギとボンベイケイトウ

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ボンベイ鶏頭（苋科）
　　檜扇の実（菖蒲科）
　　ドラセナ・コルディリネ
花器　陶鉢

ヒオウギは秋になるととぼけた様な形の実になる。祇園祭に飾る優雅な姿からは想像できない程に。花の頃は真竜、黄竜という名の品種が揃うが、実は射干玉（ヌバタマ）と呼ばれるので、つい黒砂糖味の丸くて甘い和菓子を連想してしまう。

取り合わせも花の頃とはガラリと変わり、実になると秋に咲く可愛いネリネを添えたりするのも楽しい。

インドの種を日本で蒔いて育てたボンベイケイトウも数年前から出てきた新品種。どちらも万葉の時代から歌に読まれた知り合い同士だが、初めて一緒にいけてみた。



横から見た奥行き



山芍薬の実

〈2頁の花〉 櫻子

花材　梅花躑躅（躑躅科）
　　山芍薬の実（牡丹科）
　　桔梗（桔梗科）
花器　公長齋小菅籠

今年の秋一番きれいなヤマシャクヤクの実。みずみずしい葉に包まれるように育った一輪。弾けて赤（未成熟種子）と紺（種子）の実が派手に色を競い合う。春に清楚な白い五弁の花を咲かせていたとは思えないくらいの強さだ。大好きな公長斎さんの籠に飾った。



横から見た奥行き



穂に穂

〈10頁の花〉　櫻子

花材　ベルグラスモール（稲科？）
　　粟（あわ）（イネ科）
　　木苺（薔薇科）
花器　陶水盤（柳原睦夫作）

稲、粟（あわ）、黍（きび）、蜀黍（もろこし）に薄（すすき）、洋種のパニカムなど、秋には穂をいけることが多い。２種類の穂を立ててみるとこれが意外に面白い。紅葉したキイチゴを足元にいけると、穂が主役のいけばなになった。色んな穂の組み合わせで秋を楽しもう。



横から見た奥行き

シダレソリダコ

〈12頁の花〉　櫻子

花材　秋明菊（金鳳花科）
　　枝垂れソリダコ（菊科）
　　丸葉の木（満作科）
花器　手付竹籠

はじめていけるシダレソリダコはまるで打ち上げ花火のようだ。広がる黄色い小花の間を真っ直ぐにシュウメイギクが昇って行く。秋草たちの競演。



横から見た奥行き



家庭画報 11 月号
桑原櫻子が廣誠院の幻の京焼きを紹介。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
12 月号
No. 666

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



メラレウカ

〈3頁の花〉　櫻子

花材　メラレウカ（フトモモ科）
　　胡蝶蘭（蘭科）
　　磯菊（菊科）
花器　デルフト花瓶

この器も「花ふたり旅」のもの。オランダ編で登場するデルフト花瓶だ。旅先で器と花を調達し、風景の中に置いて撮影する。大変なエネルギーが必要だが両親はそんな旅を4度繰り返して本にした。お陰で花器の選択肢が増えたので、こんないけばなも生まれる。



横から見た奥行き



出逢い花（34）　櫻子

満天星（躑躅科）

椿（椿科）

花器　瑠璃色結晶釉花瓶

（前田五雲作）

花器の瑠璃色にドウダンツツジの紅葉が映える。

この器は高さ20センチの小さな花瓶なのだが、2種の小枝を挿しただけで、素敵ないけばなになってくれた。

この出逢い花の要はなんといってもツバキの花だ。これから春にかけて様々な種類のツバキが咲くだろう。小さな枝でいいので、いけて飾りたくなる。一種でいけるのもいいが、また新しい出逢いを楽しみたい。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
1 月号
No. 667

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ダイダイ

〈表紙の花〉　櫻子

花材　若松（松科）
　　橙（蜜柑科）
　　菊（菊科）

花器　角形陶花瓶

ダイダイの実は冬に色付き春に緑色にもどる。2～3年は枝に残るので「代々」から名付けられたそうだ。親戚から枝付きで頂いたので松と深紅の菊を合わせた。漲る力を感じる器にいけると、花から元気を貰える。



横から見た奥行き



クチナシの実

〈2頁の花〉　櫻子

花材　梔（茜科）
　　山茶花（椿科）
花器　漆塗麦酒盃
　　干支伏見人形「亥」

食品の色づけに使われるクチナシの実は血流を良くする薬にもなる。今年の干支の猪と飾ると形が似て面白い。健康な一年を願って。



横から見た奥行き

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2019 年
2 月号
No. 668

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ブルーチューリップの花器に

〈表紙の花〉　櫻子

花材　小手毬（こでまり）（薔薇科）
　　エピデンドラム（蘭科）
　　ラナンキュラス（金鳳花（きんぽうげ）科）
花器　トルコ製陶花器

早春に咲く花をチューリップ柄の花器にいけた。温かな光とぬくもりをいち早く感じて花を咲かせるラナンキュラス。花びらの枚数が百枚以上はあると思うが、ゆっくりと大きな花を開いて最後まで散ることなく萼（がく）に支えられて咲いてくれる。

コデマリも今年は豊かに花付きも良く力強い。1本からの枝分かれも多くてそのままの形をいける事が出来た。

エピデンドラムも小さな花の集まりで丸くまとまる花だ。同じかたちの花を取り合わせするのはとてもいけにくいのだが、こんな花器と花との組み合わせも今ならでは。



横から見た奥行き



晩白柚（ばんぺいゆう）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　チューリップ（百合科）
　　スイートピー（豆科）
　　菜の花（油菜（あぶらな）科）
　　晩白柚（蜜柑（みかん）科）
花器　紺彩陶水盤（重松康夫作）

久しぶりにテキストでバンペイユウを花といけてみた。暮れにいつも熊本の知人から戴く晩白柚を新年の座敷に飾らせていただくのを楽しみにしている。今年も南天と菊の投入れ、干支とバンペイユウを置いて良い香りを楽しんだ。

1月末にはチューリップや菜の花、スイートピーが長くてしっかりしていたので、相手を変えて再び後ろに置いてみる。早春の淡黄色が萌え出づるようで貴重な春が訪れた。災害を乗り越えて作られた尊い果物。



横から見た奥行き



ヒヤシンス

〈2頁の花〉 櫻子

花材　猫柳（柳科）
　　ヒヤシンス（百合科・雉隠科）
　　青麦（稲科）
花器　ブルーガラス鉢

2月の料理教室の食卓にはヒヤシンスだけを金属で作られた銀色の筒型花器に飾った。立春前のとても寒い日が続く頃、冷たい大地から春が溢れるように。花色は赤、ピンク、白、クリーム、オレンジ、黄色、青、薄紫、濃紫と豊富で、どの色を選ぼうかと迷うくらいだ。

もうずいぶん前から切花のヒヤシンスはミックスの多色で花屋さんで売られるようになった。安くはないがひとつの茎に沢山の花を咲かせてくれて、香りもうっとりするくらい素晴らしく、葉も沢山ついていて素敵な花だと思う。丈が短いので折れ曲がらないように竹串を通していけると日もちもしてくれた。野生は青紫色。ブルーの花器と敷物が似合う。



横から見た奥行き



母のスカーフ

〈3頁の花〉　櫻子

花材　アイリス（菖蒲（あやめ）科）
　　チューリップ（百合科）
　　宿根スイートピー（豆科）
花器　コスタボダ・ガラス器

母はショールやスカーフが好きで沢山持っていた。好きなものに出会うと迷わず一瞬にして自分のものにするのもひとつの才能？と思う事もあった。ゆっくり買い物する時間もなかったからかもしれない。ひとつひとつが思い出のあるものばかりなので、綺麗にして花の敷物にも使っていこうと思う。

ヒヤシンスの敷物はブルーのパシュミナ。チューリップとアイリスには昔のシャネルのスカーフ。違う使い方をすると新鮮に見える。父が愛用したジャケットの端切れでも妹が敷物を作ってくれた。裏にはMADE IN GREAT BRITAIN と書かれてあって驚いている。



横から見た奥行き

テキスト 670
2019 年 4 月

いけばな 桑原専慶流 テキスト

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



ミモザアカシア

〈表紙の花〉　櫻子

花材　ミモザ（豆科）
　　エピデンドラム数種（蘭科）
花器　紺釉陶鉢（フランス製）

3月3日の倉敷でのお稽古は新鮮なミモザをいけさせていただいた。お弟子さんの庭に育っていたもので、フワフワの花の付いた切りたての枝を沢山持って来てくださったので、バラとマーガレットを取り合わせて贅沢な稽古をすることができた。お弟子さん達も大喜び。

ミモザが黄色い花をつける季節、毎年3月8日は国際女性デーらしい。イタリアではこの日、男性から女性にミモザの花を贈り、女性達は家事からも育児からも解放されるそうだ。なんと羨ましい。残念ながら日本にはそんな習慣はないが、ミモザのお蔭で貴重な春の楽しいひと時になった。テキストではカラフルなエピデンドラムと取り合わせた。



横から見た奥行き

レオントキール

〈2頁の花〉　櫻子

花材　レオントキール（アルストロメリア科）
　　キャスケード・シンビジウム（蘭科）
　　ミリオクラダス（百合科）

花器　赤ガラス花瓶

レオントキールはライオンの手という意味だそうだ。アルストロメリアの仲間で、南米原産の蔓性植物。地面を這うように育ち、伸ばした花茎の先に丸く花が集まってつく。元々寝そべっていたものなので、あまり無理な長さにいけると茎の途中で折れるので注意したい。

キャスケードタイプのシンビジウムをからめるようにいけるとレオントキールとよく調和してくれた。背の高い赤いガラス花瓶に無造作に投入にしてみたが、花材の面白さで独特の雰囲気がつくれた。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
5 月号
No. 671

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



貝母（ばいも）　〈表紙の花〉　櫻子

花材　貝母（百合科）
　　海老根（蘭科）
　　都忘れ2色（菊科）
花器　陶水盤（モロッコ製）

倉敷の叔母宅には月一度の稽古で訪れるが、特に春は庭の花々を見るのが楽しみ。珍しい椿や林檎、花梨といった果樹の花も華やかだ。

高台にあるリビングの前庭には大きな木が茂っていて、その足元でバイモが70センチほどの背丈で咲いていた。花は小さくて地味な色なのにとても存在感があって可憐。いくらでも持って帰ってと言ってくれるので、沢山切らせてもらった。

バイモはユリ科の中では一番早く咲くらしい。葉の先端が細長く巻きひげのようになるのが可愛らしい。球根が大きくなると貝が合わさったように見えるので貝母と名づけられたそうだ。

叔母の庭で育つ貝母は花屋さんでは買えない大きさなので足元には春のエビネランとミヤコワスレをいけた。



横から見た奥行き



五月梅（さつきばい）　撫子（なでしこ）

〈2頁の花〉　仙溪

花材　五月梅（雪の下科）
　　撫子（撫子科）
花器　青磁花瓶（加藤敏雄作）

サツキバイとナデシコを大らかに投入にした。青磁の花瓶にいけると5月の爽やかな風を感じる。サツキバイは水切りし、足元をよく割っておく。



横から見た奥行き

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2019 年
6 月号
No.672

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



黄花海芋（きばなかいう）　大手毬（おおでまり）

〈表紙の花〉　櫻子

花材　黄花海芋（里芋（さといも）科）
　　大手毬（忍冬（すいかずら）科）
　　ミリオクラダス（百合科）

花器　ガラス鉢

アンティークピンクのオオデマリと赤いガラス器のハーモニー。



横から見た奥行き



ヘリコニア

〈3頁の花〉　櫻子

花材　ヘリコニア（芭蕉科）
　　向日葵（菊科）
　　スモークツリー（漆科）
花器　ガラス花瓶（フィンランド）

ヘリコニアの名前はギリシア神話の芸術と学問の女神ムーサが住む「ヘリコン山」に因む。



パイナップル

櫻子

花材　ミニパイナップル（パイナップル科）
　　グラジオラス（菖蒲科）
　　アロカシア（里芋科）
花器　ガラス鉢

パイナップルにはブロメラインというタンパク質分解酵素が含まれていて、食後に食べると消化を助けてくれる。また、まるごと買った時に残った芯は、刻んで肉と漬け込むと固いステーキが柔らかくなってくれるので役立っている。

そんなパイナップルへの親しみを込めて、優しいピンク色のグラジオラスと、個性的なアロカシアの葉をとり合わせ、青いガラスの器にいけた。見ていると元気をもらえる、そんな盛花。アロカシアの茎は見た目より弱いので、太めの針金を添わせて茶色のフローラルテープで巻いておく。場合によっては葉裏にも針金を這わせておくといい。





いけばなインターナショナル京都チャプター例会

会期　6月18日㈫
会場　京都ブライトンホテル
講師　桑原櫻子
助手　桑原健一郎　滝本慶由
　　二井慶博　島慶和

「初夏の出逢い花に想いをよせて　万葉集の花をいける」

新しい時代、令和が幕を開けました。奈良時代に完成した日本に現存する最古の歌集「万葉集」を典拠とする元号は初めてです。万葉の花を詠んだ美しい歌を、花と共にご覧いただきました。　櫻子



キキョウ

朝顔は　朝露おひて　咲くといへど
夕かげにこそ　咲きまさりけれ

朝顔（おそらく桔梗のこと）は朝露を受けて咲くというけれども、夕方の光の中でこそ、なお一層その美しさが際立つものなのですね。

写真②　七竈（ななかまど）　桔梗（ききょう）　撫子（なでしこ）
陶花器（幾左田（きさだ）昌宏作）



アジサイ

紫陽花の　八重咲くごとく　弥つ代にを　いませわが背子　見つつ偲はむ　　橘諸兄

アジサイの花が幾重にも重なって美しく咲いているこの佳き日。あなた様にはこれからも末永くお元気でご繁栄されますようにお祈りしています。これからもアジサイを見る度にあなたを想っています。



写真③　珍至梅（ちんしばい）　紫陽花（あじさい）
竹島百合（たけしまゆり）
手付大籠（公長斎小菅）

ハス

ひさかたの　雨も降らぬか　蓮葉に
溜まれる水の　玉に似たる見む

雨が降らないかしら、ハスの葉に溜まった水が玉のようにきら

めくのを見たいなあ

写真④　蓮　縞葦
ガラス花器

ユリ

道の辺の　草深百合の　花笑みに
笑みしがからに　妻と言ふべしや

道端の草の茂みのユリのように微笑んだだけなのに、（あなたは私の事を）妻だと言うのでしょうか、そうではないですね。

写真⑤　横縞太藺　笹百合
下野　半夏生（半化粧）
青白磁蛙耳花器（伊東陶山作）

イヌビワ（ちち）

ちちの実の　父の命　ははそ葉の
母の命　おぼろかに　心尽くして
思ふらむ　その子なれやも　ますらをや　空しくあるべき・・・・・

父母が心を尽くして思っておられるような、そんな子供であるのだろうか、武勇で後の世に語りつがれるようにならなければ

写真⑥　枇杷（犬枇杷とは別の木）　鉄線数種
陶花瓶（加藤敏雄作）

ハギ

我が衣　摺れるにはあらず　高松の
野辺行きしかば萩の摺れるぞ

私の衣はわざわざ染めたのではありません。高松の野辺（ハギの名所）を行くうちにハギの花の色に染まったのです。







写真①無双萩の着物を着て歌の世界を花と話でお伝えしました

・

和歌に詠まれた花の世界を、女性の視点でドラマチックに紹介。万葉人に親しみを感じる楽しいデモンストレーションだった。仙溪

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2019 年
9 月号
No.675

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



王様同士

〈表紙の花〉　櫻子



花材　キングプロテア（ヤマモガシ科）
　　葡萄（ぶどう）「マスカット」（葡萄科）
花器　ガラス花器（ドイツ製）

8月初旬に岡山から葡萄をいただいた。飾りたくなるほど綺麗な葡萄だ。酷暑の中丹精こめて育てられた大変さを思う。

8月半ばに山梨県のワイナリーへ見学に行ってきた。周りを山々に囲まれた丘の上に葡萄畑が広がっていた。標高が高く冷涼で日あたりにも恵まれているので、とても甘い葡萄が出来るそうだ。よく見る棚仕立ての他に品種によっては垣根仕立てもある。葡萄の木の足元には雑草が残してあり、あえて自然の植物と競争させていた。

雨避けビニールの屋根が木の上に被せてあったり低い実の部分に掛けてあったりと、きめ細かに一つ一つの葡萄が守られていた。どの畑にどのような品種が適しているのかも考えられているようだ。

葡萄もワインも愛情を込めて作られていて、風土を生かした繊細な味わいに感動した。

今回は切りたてのキングプロテアと取り合わせた。どちらも王様！



ローゼル

〈11頁の花〉 櫻子

花材　ローゼル（葵科）
　　リコリス・インカルナータ（彼岸花科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　陶製スープボウル

ローゼルの花はオクラやワタの花に似るが、蕾もしくは実の状態で収穫し、肥大した萼と苞がジャムやハーブティーに利用される。生で食べると酸味があるそうだ。ローゼルは西アフリカ原産で熱帯地方に分布する。日が短くなると咲く短日植物である。

リコリス・インカルナータは狸の剃刀とも呼ばれる中国原産のリコリスの原種の一つ。岡山の先生が庭から切ってきて下さった。

このアンティークのスープボウルに秋色のアジサイがよく映る。自分の感覚を頼りに三種の花を取り合わせたが、うまく調和してくれた。





かぼちゃのかたち

〈2頁の花〉　櫻子

花材　木苺（きいちご）（薔薇（ばら）科）
　　花茄子（はなすび）（茄子科）
　　透し百合（すかしゆり）（百合科）
花器　陶花器

ナスやトウガラシの仲間は花ナスや花トウガラシとして、昔からいけばなの花材に使われてきた。

暑くて枝ものの無い時に代りとして使う事もあったが、葉がついていないので、中々きれいに見せるのは難しく、苦手な花材だ。

かぼちゃ型の平たいかたちの実が枝に並ぶ。観賞用のナス科の品種でソラナム・パンプキンと呼ばれる。ナスとトマトが混ざったような感じ。食べても美味しくないらしい。大学の講義でいけてみた（時々講師としてお呼びがかかる）。キイチゴの紅葉した葉を添えると瑞々（みずみず）しく、秋らしい花になる。面白いかたちが学生達にも喜ばれた。



横から見た奥行き



山芍薬の実（やましゃくやく）

〈10頁の花〉　櫻子

花材　山芍薬（牡丹科）
　　糸菊（菊科）
　　蓼（蓼科）
花器　手付通草籠（あけびかご）

ヤマシャクヤクの学名は「ピオニア・ジャポニカ」でボタン科のボタン属。初夏の頃、透き通るような繊細な花を一輪だけ咲かせる。洋芍薬とは違い中々出会う事の出来ない貴重な花だ。器も取り合わせも特別なものを考えてあげないと綺麗に咲いてくれないような気がする。場所によっては絶滅危惧種にもなっていて、咲くのに6年もかかるので、育てている方は大変な事だ。その清楚な花からは想像も出来ないような派手な実。初秋には実が熟して結実しない赤色と結実した濃紺色の種子になる。

今年は入荷する数も少なく大切な一本となった。一輪菊とタデの花と籠花に。



いけばな 桑原専慶流 テキスト

2019 年
12 月号
No.678

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



月桃の実のいけばなとお茶

〈表紙の花〉　櫻子

花材　月桃（げっとう）の実（生姜（しょうが）科）
　　薔薇（ばら）（薔薇科）

花器　デルフト花瓶

沖縄から来た月桃の実。夏には可愛らしいキャンディの様な実になるので、稽古花材として良く使う様になった。緑、黄、オレンジ、赤と色づいて最後は薄茶色の実となる。沖縄ではとても身近なショウガ科の植物で生活の一部として使われる。葉は抗菌効果があるので食物を包んだり、乾燥させて虫除けにも。花は桃の実のように可憐だが中々いける事は出来ない。その花の蒸留水は化粧水にもなる。

寒い日の夜、月桃のハーブティは身体を温めてくれる。ワインよりもポリフェノールが多くノンカフェイン。乾燥した実を5分ほど煮出して、ピリッとしたエキゾチックなお茶。





バラの実「センセーショナル・ファンタジー」

〈3頁の花〉　櫻子

花材　メラレウカ（フトモモ科）
　　薔薇の実（薔薇科）
　　ダリア（菊科）
花器　ガラス花瓶（フィンランド）

バラの実「センセーショナルファンタジー」は一重の濃いピンクの花が咲いた後の実を鑑賞するためにつくられた品種だそうだ。樹勢が強いので栽培しやすく、今後出荷も増えてくるだろう。長く飾ったあとドライにしてさらに楽しめる。

実の足元に黄色のメラレウカをたっぷり加え、同色のダリアを覗かせた。赤い器にいけると実たちが元気に飛び跳ねて見える。喜んでくれているようだ。

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2020 年
1 月号
No.679

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元





年賀のいけばな　〈表紙の花〉　櫻子

花材　松（松科）
梅擬（うめもどき）「ウィンターベリー」（黐（もち）の木科）
水引草の紅葉（蓼（たで）科）
水仙（彼岸花科）
花器　陶花瓶（鈴木健司作）
干支（えと）　俵の鼠（ねずみ）（陶・鈴木健司作）

新年のお祝いとご挨拶の気持ちを込めたいけばなです。ウィンターベリーはアメリカ原産。明るく生命力溢れる赤い実から元気をもらえます。松と水仙を取り合わせて、色づいた葉を繋（つな）ぎ役に。





ラッパズイセンの白花

〈4頁の花〉　櫻子

花材　喇叭（らっぱ）水仙（彼岸花科）
　　チューリップ（百合科）
　　スノーフレーク（彼岸花科）
　　丸葉ルスカス（百合科）
花器　陶水盤

新年を迎えてお正月が過ぎ、休んでいた花市場が稼動しだすと、一斉に春の切り花たちが花屋に並ぶ。ナノハナ、チューリップ、ラッパズイセン、フリージア、スイートピー。近頃はユキヤナギやコデマリなどの春の花木も手に入る。家の外は木枯らしが吹いていても、家の中は冬の花と春の花が季節を超えて共存している。

丁度今の季節を感じる花もいいし、季節の先取りの花もいい。

白いラッパスイセンに白いスノーフレーク。同じ色の花を2種類組み合わせることはあまりしないが、いけてみると花色が印象深くなってくれた。花色の組み合わせを工夫できるのも、春ならではの楽しみ。





黄花の金魚草

〈10頁の花〉　櫻子

花材　木苺（薔薇科）
　　金魚草（胡麻の葉草科）
　　マーガレット（菊科）
花器　陶コンポート

キンギョソウにはいろんな色がある。色や大きさでとり合わせる相手も変わる。鮮やかな黄色のキンギョソウは春の緑と相性がいい。白いマーガレットもキイチゴの蕾も、キンギョソウと一緒に上へ上へと伸びようとしているようだ。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
4 月号
No. 682

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



薇（ぜんまい）と豆の花

〈表紙の花〉　櫻子

花材　薇（薇科）
　　エピデンドラム（蘭科）
　　豆の花（豆科）
花器　赤ガラスコンポート



この花をいけたのは3月初旬で、丁度沖縄からゼンマイが届いたところだった。花屋のバケツに入っていると目立たないのだが、飾ってみると小さく巻いた若芽が可愛らしくて、一気に春らしい花になった。柔らかくてひ弱そうに見えたマメノハナも添え木をしていけるとぐんぐん成長してくれている。

毎日花から元気をもらっている。



ドラセナ

〈4頁の花〉　櫻子

花材　ドラセナ・ソングオブインディア（竜舌蘭科）
カーネーション（撫子科）
スイートピー（豆科）

花器　陶鉢

ドラセナ・ソングオブインディアのフサフサした豪華な葉。足元隠しにとりあえず入れるのではなくて、主役に見せたいと思う。

大輪深紅のカーネーションは茎も太くて存在感がある。純白のスイートピーでメリハリがついた。



横から見た奥行き

いけばな 桑原専慶流 テキスト

2020 年
5 月号
No. 683

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



芹（せり）の花

〈表紙の花〉　櫻子

花材　レースフラワー
「ダウカスボルドー」（芹（せり）科）
胡蝶蘭3種（蘭科）

花器　レースガラス花瓶

軽くて柔らかいレースフラワー「ダウカスボルドー」中々見かけない珍しい色の花。大切にしているレースグラスの器に飾った。この花器に花を飾ると花全体が貴婦人の様な雰囲気になる。コチョウランも特別なものを取り合わせて。足元をクロスさせて器の中の茎を見せない様にしていけている。



白牡丹

〈2頁の花〉　櫻子

花材　牡丹（牡丹科）
　　薊（菊科）
　　八角蓮（目木科）
花器　煤竹手付籠

今日咲きました！というところをぱっと切らせてもらってハッカクレンとアザミを取り合わせた籠花。ボタンの花が大輪過ぎて挿す場所が中々決まらなかった。ストレスを感じさせない様に気を遣いながら：。





深山の宝石

〈2頁の花〉　櫻子

花材　山芍薬（牡丹科）
　　撫子（撫子科）
　　紅羊歯（雄羊歯科）

花器　陶鉢

ヤマシャクヤクは山の奥深くで白く輝く宝石のような花だ。そっと薄紅色のナデシコを添えた。





初夏の香り

〈2頁の花〉　櫻子

花材　深山南天（薔薇科）
　　杜若（菖蒲科）
　　笹百合（百合科）
花器　フランス製青練込陶鉢

過去の「テキスト」では白黒写真だったので、カラーで再掲載。

カキツバタの雅な色と、ササユリの優しい色は、白黒写真では伝わらない。

このササユリは奈良の知人が種から育てたものをいただいた。その時聞いたところによると、ササユリは生育が非常に遅く、一年目は一枚葉がやっと発芽するだけで、開花には7～8年かかるそうだ。

私たちがいける花には、それぞれにドラマがあると思うと、愛おしく、大切にしなければと思う。

四季咲きのカキツバタと軽やかなミヤマナンテンをとり合わせた。

高さを抑えて、枝の広がりを印象的に見せた。

（2006年7月　517号より）



こころは異国へ

〈4頁の花〉　櫻子

花材　ギガンチウム（百合科）
　　煙の木（漆科）
　　レリア（蘭科）
花器　陶花器（宮本博作）

今年も又新鮮なスモークツリーをいける事が出来た。岡山へは行けていないけれど、お弟子さんが箱詰めにして送って下さった。日当たりが良く風通しの良いお庭で、手入れをして大切に育てておられるので、年毎に大きく豊かにスモークしているようだ。

毎年お稽古させていただくのが楽しみで、薔薇や向日葵、柏葉紫陽花など季節の花を取り合わせている。今回はギガンチウムと、カトレアに似たレリアという細くて繊細な蘭と合わせてみた。

赤い花器にモロッコ刺繍の敷物で、異国にいる様。今は何処にも行けないけれど、こんな風に楽しんでいる。





温帯に育つバショウ

〈3頁の花〉　櫻子

花材　糸芭蕉（芭蕉科）
　　鉄砲百合「新美白」（百合科）
　　紫陽花（紫陽花科）
花器　染付深鉢

こんなに大きな葉を見ると、さぞかし暑い地方から来たのかと思ってしまう。

このイトバショウは別名リュウキュウバショウで、繊維を取るために沖縄で多く育てられてきた。バナナは熱帯性だが、イトバショウは温帯性なので京都でもよく見かける。

白いユリとアジサイを合わせた。染付けの大鉢にいけると花の藍色と馴染んでとても涼しそう。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
9 月号
No. 687

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



草紫陽花（くさあじさい）

〈表紙の花〉　櫻子

花材　狗尾草（えのころぐさ）（稲科）
　　草紫陽花（紫陽花科）
　　鉄線（てっせん）（金鳳花（きんぽうげ）科）

花器　金属装飾陶器（モロッコ製）

クサアジサイはアジサイに似ているが、草である事に由来してこの名前になったようだ。葉も互い違いに生えていてアジサイとは趣きが違っている。

控えめなクサアジサイだが、一輪添えただけで花全体が優しくなる。

ブドウやエノコログサと取り合せて秋が早く訪れる事を願う。





風に揺れる

〈6頁の花〉　櫻子

花材　矢筈薄（稲科）
　　グロリオサ（百合科）
　　九蓋草（胡麻の葉草科）
花器　陶花瓶

野生のグロリオサをインドで見たことがある。女性の奉仕団体のメンバーとして、その国際大会がインドであり、現地をバスで移動している時だった。空き地の草むらに赤い花が咲いているのを見つけた。真っ赤なグロリオサだった。

グロリオサは熱帯アジアおよびアフリカ原産の多年草。和名はキツネユリで、ユリ科またはイヌサフラン科に分類されている。

グロリオサは体を支えるために、葉の先を伸ばして他の草の茎などに巻き付く。炎のような花の姿も独特だが、葉先のクルクルも愛らしい。

インドの草むらで見たイメージでグロリオサをいけてみた。

グロリオサの葉を丁寧に残し、ヤハズススキと投入にすると、野原で他の草を頼りに、風に揺れながら咲いていた赤い花と重なる。色の効かしに薄紫のクガイソウを加えた。



コボウズオトギリ

〈7頁の花〉　櫻子

花材　ヒペリカム（弟切草科）
　　ガーベラ3色（菊科）
花器　デルフト陶花瓶

ヒペリカムは赤い実を小さなお坊様に見立てて、コボウズオトギリとも呼ばれる。

赤い敷物は灼熱の大地。そこに涼しげな青い絵付けの花瓶を置く。器の模様を雲と見れば、雲海を下に見る天上界に咲く光の花と修行僧のイメージに、とは大袈裟か。

以前、インドの高地にあるヒンズー教の聖地を訪れたことがある。聖なる山の宿坊に各地から巡礼者が何日もかけて集まってくる。そして皆、決まって頭を丸める。乳飲み子も含めて家族全員だ。私達を運んでくれた運転手も翌朝丸坊主で現れた。この地で坊主頭になることが長年の夢だったと目を輝かせて教えてくれた。そんなことを、この花の写真を眺めていて思い出した。





ビキーニョという唐辛子

〈7頁の花〉　櫻子

花材　丸葉の木（満作科）
　　ビキーニョ（茄子科）
　　蘭「グラマトフィラム」
　　（蘭科）
花器　角形陶花瓶

ブラジルから来たフルーティなトウガラシといわれる「ビキーニョ」を八百屋さんでなく、花屋さんで見つけた。赤、橙色、黄色でプチトマトのような実が枝分かれしてぶら下がっている。ユニークで可愛い沢山のトウガラシを紅葉の丸葉の木と投入れに。「グラマトフィラム」は夏から秋に咲く蘭の花。ほっそりと長く軽やかで、瑞々しい翡翠色が秋の実りに潤いを与えてくれる。



横から見た奥行き



シロシキブの実

〈3頁の花〉　桜子

花材　白実小紫（しろみのこむらさき）（熊葛（くまつづら）科・紫蘇（しそ）科）
　　杜鵑草（ほととぎす）（百合科）
　　水引草（みずひきそう）（蓼（たで）科）

花器　手付籠

小さな白い実が美しい。

シロシキブと呼んでいるが、シロミノコムラサキが正確な名前らしい。繊細な枝に沢山の実ができている。

白花のホトトギスを加えると、白い実と白い花が白さを競い合っているようにも、互いに助け合い讃（たた）え合っているようにも見える。

赤い花のミズヒキソウが優しく寄り添う。





シロミノコムラサキの花
出典：https://www.ootk.net/cgi/shikihtml/shiki_818.htm



メラレウカ

〈3頁の花〉　櫻子

花材　メラレウカ（フトモモ科）
　　柏葉紫陽花の葉（紫陽花科）
　　ガーベラ（菊科）
花器　ガラス花瓶（コスタボダ）

メラレウカをいける様になって6、7年になる。

オーストラリア原産でユーカリと同じフトモモ科の樹木である。

ティーツリーとも呼ばれるが、最近では日本でも暖かな場所では育てられ出荷される様になってきた。

繊細な黄金色の葉がガーベラを柔らかく包み込んでくれる。

手で葉を揉むと爽やかで清い香りがして自然の恵みを感じる。

飾る場所が清潔な空間になる様な気がする。

今年はお稽古で何度もいけさせてもらえたが、紅葉した木苺や雪柳のように、秋を彩る身近な花材となるようで嬉しい。



アメリカハナノキ

櫻子

花材　アメリカハナノキ（楓科）
　　月桃の実（生姜科）
　　ダリア（菊科）
花器　銅打ち出し壺

花屋さんの庭で紅葉したアメリカハナノキを切ってもらった。アメリカ北部～カナダに分布する落葉高木。公園や街路に植栽されている。別名アカカエデ、ベニカエデ。早春、葉よりも先に紅色の花が咲き、秋に美しく紅葉する。

赤い実と花を合わせて銅の器にいけた。









アメリカハナノキの花・葉・実

出展：http://www.forest-akita.jp/data/2017-jumoku/133-amerikahana/amerikahana.html



南天の姿を

〈2頁の花〉　櫻子

花材　南天（目木科）
　　デンファレ（蘭科）
　　ミリオグラタス
　　（百合科）
花器　陶花器（宇野仁松作）

真っ直ぐに立ち上がる姿の南天。縁起の良い木でお正月の花材として多く出荷されるが、今年は早くから紅葉のきれいなものが多かった。

足元には柔らかくしなやかな白いデンファレをいけた。

ミリオグラタスを添えて、硬くてゴツゴツした南天の枝を見えなくして軽やかに。

お庭に植っている雰囲気とは違う私好みの華奢で軽やかな姿にしてあげるのもいけばなの楽しみのひとつ。



いけばな 桑原専慶流 テキスト

2021 年
2 月号
No. 692

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



早春の色合い

〈表紙の花〉　櫻子

花材　白梅（薔薇科）
　　菜の花（油菜科）
　　スイートピー（豆科）
　　晩白柚（ばんぺいゆう）（蜜柑科）
花器　手付舟形陶水盤



今年の冬は暖冬なのか厳冬なのか、週代わりで気温が変化し温度調節が難しい年となった。

昨年末に訪れた植物園には楓の大木が紅葉していて見事だった。周りの道には色づいた落ち葉が敷き詰められて大地を温めているようで、スノードロップやナルキッサスの花が控えめに咲いていた。

今年も干支（えと）の置物と一緒に晩白柚（ばんぺいゆう）を新年の花として飾らせていただいた。その後も食べてしまうのがもったいなくて、早春のいけばなの彩りとして一緒に置き合わせた。

白梅と菜の花とスイートピー。大地から淡黄色が萌え出る。穏やかで平和な春がきますように。



トルコ染付けの器

〈12頁の花〉　櫻子

花材　青文字（楠科）
　　小手毬（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
花器　トルコ花文陶花瓶

トルコへ旅をした思い出に手に入れた花器。海外で大きな花器は中々見つからないし、もし見つけてもどうやって持ち帰ろうかと悩んだ末買うものは少ない。

イスタンブールのグランドバザールには伝統菓子などをはじめ、民族衣装、スカーフや絨毯、宝石、タイルなどありとあらゆる物が売られている。5000もの店が軒を連ねている中に一軒だけある染付けの陶器店でチューリップ柄の花器を買った。

そんな思い出の花器なのだが、花柄の器に花をいけるのは中々難しい。器の絵柄も引き立てながら負けない様に。青文字も小手毬もチューリップも満開のタイミングで。



横から見た奥行



早春のアマリリス

〈2頁の花〉　櫻子

花材　連翹（木犀科）
　　アマリリス（彼岸花科）
花器　ガラス水盤
　　（ウルリカ・ヴァリーン作）

国産のアマリリスは1月末から2月中旬頃に出荷される。花茎に芯棒を入れてあげないと凍てついて折れ曲がる事もある。

今年は寒い日もあったが、しっかりと支えられて花が力強く咲き出してくれた。外国産の花色に比べると色は薄いが、葉を沢山添えると鮮やかな赤橙色を感じる事ができる。レンギョウの鮮黄色もアマリリスの花色を引き立ててくれる。

コスタボダの金彩画の器に元気いっぱい咲いて。



横から見た奥行



八重咲きチューリップ

〈4頁の花〉　櫻子

花材　猫柳（柳科）
　　チューリップ（百合科）
花器　ガラス鉢

八重咲きのチューリップ、モンテオレンジとイエローマルガリータ。暖かくなると芍薬（しゃくやく）の様に豪華に咲く。

八重咲きの魅力は花の形も葉も丸みがあって可愛いらしく、いけるとミカンやレモンが並んだよう。

そういえば、店先に売られているキンカンを丁度見つけて食べたくなり、久しぶりに甘煮を炊いてみた。半割にしたキンカンの面はチューリップの笑顔のよう。

フワフワに膨らんできたネコヤナギの花芽も一緒に大きく膨らんできた。

毎日伸びるチューリップと競い合うように。



いけばな 桑原専慶流 テキスト

2021 年
4 月号
No. 694

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



春を迎える花

〈表紙の花〉　櫻子

花材　雪柳（薔薇科）
　　椿「岩根絞り」（椿科）
花器　陶花器

中庭の寒椿が昨年の11月18日にひとつめの花を咲かせた。一昨年より10日ほど遅かったので日付けを記しておいた。花のない時期に咲いてくれる貴重な椿だ。

この椿が冬の間中咲いてくれるお陰で、晩秋から春までの長い間、いろんな椿が咲き続けてくれる。

品種によって咲く時期が違うが、咲く順番は毎年変わらないように思う。

椿は浮かし花や掛け花になくてはならない花でもある。いけるのが待ち遠しい。でも庭の椿はあまり切りたくないが。

今年は大輪の「岩根絞り」を雪柳と取り合わせる事が出来た。雪柳と椿、桜と椿は大好きな組み合わせだ。

岩根絞りの様な派手なコントラストの花は、軽やかで伸びやかな雪柳がよく似合う。





アリウム・シルバースプリング

〈2頁の花〉　櫻子

花材
アリウム・ギガンチウム（百合科）
アリウム・シルバースプリング（百合科）
黄花アイリス（菖蒲科）
エメラルド・ウェーブ（茶筅羊歯科）
花器　ガラス花器

玉ねぎやラッキョウ、ニンニクが仲間のアリウム属の花は種類も多いが、それぞれにとてもきれいな花が咲く。百合科なので小さな六弁の花が球形になり花火の様にも見える。

毎年色んなアリウムに出会うが今年はシルバースプリングという中心に赤色が混ざるアリウムを見つけた。

アリウム・ギガンチウムと取り合わせると、畑に咲くネギの花が並ぶ感じ。初夏の青空の下で元気いっぱい咲いてくれるようで力強い。アリウムの葉は畑に残され太陽を浴びて栄養を球根に送る役割をする。代わりにエメラルドウェーブという葉を添えた。





薇と千鳥草

〈6頁の花〉　櫻子

花材　薇（羊歯の若芽）
　　千鳥草（金鳳花科）
　　紅羊歯（雄羊歯科）

花器　陶コンポート

春の芽吹いたシダ類と初夏の花を取り合わせる事はめったにしない。季節がちぐはぐになるからだ。きれいであれば何でも良いとは思わない。料理と同じで美味しければ良いとは思っていない。

でも今年の様な気候がこれから先も普通になるのであれば仕方ないかもしれない。一斉に花が咲き揃ったような感じだ。季節の区切りが曖昧になり、違和感を感じながら花も料理も考えなければならないけれど、今までとは違う新鮮なものも感じていこうと思う。

若葉の赤茶色が可愛い庭のシダを、園芸種のラークスパー（千鳥草）に添えられるとは思わなかった。

人々の自粛生活が緩んだのと同じように庭の植物達も……。





酢の木、夏櫨。

〈7頁の花〉　櫻子

花材　夏櫨（躑躅科）
　　鉄砲百合（百合科）
　　撫子（撫子科）

花器　陶花瓶（宮下善爾作）

ナツハゼはスノキ属。葉や実が酸っぱい木なのでスノキ。ブルーベリーもスノキ属だ。スノキ、ウスノキ、ナツハゼ、オオバスノキ等が夏櫨の名前で切り枝になる。ユリとナデシコを合わせて自然調にいけた。





ライラックの季節

〈12頁の花〉　櫻子

花材　ライラック（木犀科）
　　薔薇（薔薇科）
　　ユーカリ（フトモモ科）

花器　カットガラスコンポート

待ち遠しいライラックの花が咲く季節。日本では北海道や信州の高原で育ち、ヨーロッパでは街路樹としてもよく植えられている。

甘い香りを持ちハート型の葉とたっぷりとした房咲きに咲く華やかで可愛い花、紫やピンク、白のおしゃれな色。大好きな花。6月だけの限定品。

切り花として届くライラックがもう少し日持ちしてくれれば嬉しいのだが。

出来る限りの水あげをして深水のパンチボウルにいける。きれいなバラと取り合わせた。

ライラックが機嫌を損ねないよう気分良く咲いてもらいたいと願う。





カジノキの葉

〈4頁の花〉　櫻子

花材　梶の木（桑科）
　　蛍袋（桔梗科）

花器　角形染付花瓶

古代からカジノキは神に捧げる神木として尊ばれて、神社の境内などに多く植えられていた。カジノキの繊維から紙や布を作っていたことから、もとは裁縫の上達を願う行事でもあった七夕に縁が深い。「天の川へ渡る船の梶となって願いが叶えられる」と信じられていた。今日では短冊に願いを書いて笹に結ぶ風習となる。

庭でカジノキを小さな苗木から育てている。夏になり葉が大きくなると複雑な形に変わっていくのが楽しい。伸びた枝を少しだけもらってホタルブクロと飾った。



庭の祇園守り（木槿）とカジの浮かし花



煙（けむり）の木

〈7頁の花〉　櫻子

花材　煙（けむり）の木（スモークツリー）（漆（うるし）科）
　　カラー5種（里芋（さといも）科）

花器　ガラス鉢

涼しくて陽当たりの良いレストランの中庭に不思議な木があった。近づくとフワフワした雲の中に入り込むような感じ。いい香りがして柔らかく包まれるようだった。

初めてスモークツリーを見たのはドイツだった。ずいぶん昔の事なのでレストランの名前も思いだせないけれど、一緒にいたドイツの友人がドイツ語名で教えてくれた。難しくて聞き取れなかったけれど、意味はカツラの木。ウィッグの事らしいが、日本は煙だし、国によってずいぶん見方が違うのだ。

スモークしてとてもきれいな花となる。カラフルなカラーを集めて夢のような思い出の花に。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
8 月号
No. 698

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



縞すすき

〈表紙の花〉　櫻子

花材　縞薄（稲科）
　　アンスリウム数種
　　（里芋科）

花器　白磁扁平花器

縦ジマがはいるススキは縞薄。横ジマがはいるのは鷹の羽薄。

久しぶりにシマススキを見つけたので、アンスリウムを足元に固めてみた。

タカノハススキなら竹籠などに夏の草花と一緒にいけたいと思うが、シマススキは強靭な雰囲気なので洋花との取り合わせもいいかもしれない。

力強く立ちあがる葉もあり夏の夕立ちのよう。

今年の夏も無事乗り越えられますように。そんな事を願いながら少しでも長持ちしてくれるよう毎日水替えをしている。



横から見た奥行



暑さに別れを

〈2頁の花〉　櫻子

花材　七竈（薔薇科）
　　鶏頭（莧科）

花器　陶花器（前田保則作）

ナナカマドは北国に多く、ケイトウは南国由来の花だ。それなのにナナカマドの紅葉にはケイトウの秋色がしっくりとよく似合うのが不思議。ケイトウの瑞々しい緑の葉が両者を繋ぐ役目をしてくれている。

ケイトウを前へ出したので、ナナカマドを後ろに高く立てた。





花守として

櫻子

盧山寺源氏庭の東側には古くから桑原専慶流記念塔が建てられている。

楓の木と楠の木陰でいつもしっとりと苔生す姿で私を迎えてくれる大きな石碑だ。

師範認証式や行事がある時にはこの記念塔に献花するのは私の役割で、若い時からずっと花をいけてきた。

白い小花を穂の様に咲かせるサラシナショウマは初秋の山や高原に行かないと中々出会えない。

そんな貴重で珍しい花を秋の七草と取り合わせた。

白銀彩の花瓶を選んで、いつものように掃除をして水を打ち、静かにいけて飾らせていただいた。







キラキラ　鹿王院客殿

〈2頁の花〉　櫻子

花材　鍾馗水仙（彼岸花科）
竜胆（竜胆科）
男郎花（女郎花科）

花器　陶水盤　近藤豊作

屏風　藤井隆也作

無数の光の輪のようなこの屏風の色に合わせて、黄色と赤紫の花をいけ、絵と一体となるように白い花を加えた。水面にも敷板にも屏風の絵が映っている。花がキラキラ光って見えた。



純白のクリスマス

〈2頁の花〉 櫻子

花材　メラレウカ（フトモモ科）
　　シンフォリカルポス（スイカズラ科）
　　ダリア（菊科）

花器　ガラス花器

メラレウカとダリアの横に添えてある木はシンフォリカルポスという名のスイカズラ科の植物。英名はスノーベリー。秋の頃きれいな白い実をつける。何度聞いても覚えられない名前だが、調べてみるとギリシャ語で「房状になっている果実」という意味らしい。日本語では普通すぎる意味なのにギリシャ語ではすごくミステリアスな言葉になる。

純白の実がクリスマスらしい雰囲気を出してくれる。

最近では長い期間出荷されるようになったメラレウカ。足元をよく割っていけると日持ちしてくれて豊かでしなやかに花を引きたててくれる。

暖かそうなショールを巻いてあげたくなった。



器のチカラ

〈7頁の花〉 櫻子

花材　千両（千両科）
　　シンピジウム（蘭科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　陶花器（柳原睦夫作）

不思議な形の器だ。三方にお団子がついている。手に持つとコロンとした丸みが子犬のようで愛らしい。でも中を覗くとふくらみの内側は深い洞窟のようにも見える。色んな顔を持つ器。

この器には名前がある。「ふくら壺」という。ふくらは膨らみのことだが、「福良」と書くと縁起が良い。そう思って器を見ると福の神にも見えてくる。

器との出逢いで花の見え方が変わる。器のお陰で豊かな温もりを感じる花になった。





鮮やかな花色

〈2頁の花〉　櫻子

花材　赤芽柳（柳科）
　　アネモネ（金鳳花科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　ガラスコンポート

まだまだ寒い季節。心も体も萎縮しがちだが、部屋にアネモネがいけてあるだけで、気持ちが明るく晴れやかになる。

アネモネにはユキヤナギやコデマリのような小花の花木か、クロメヤナギやネコヤナギがよく似合う。





エジプト花瓶

〈2頁の花〉　櫻子

花材　雪柳（薔薇科）
　　菜の花（油菜科）
　　レリア（蘭科）
花器　金属花器（エジプト製）

エジプト製の真鍮銀象嵌瓶。つい磨きすぎて最初の頃よりも大分色が違ってきた。金ピカの花器になってしまって明るい春の花が似合うようだ。黄色い菜の花、カトレアに似たオレンジ、ピンク色のレリアをいけた。

今年は冷たい日が多く雪柳もまだ少し弱々しかったが、派手な色の中へ溶けこんで元気いっぱいに。





ラナンキュラス

〈12頁の花〉　櫻子

花材　ラナンキュラス（金鳳花科）
　　アルストロメリア（百合科）
　　蕗（ふき）の葉（菊科）

花器　金属装飾陶水盤（モロッコ製）

黄色の色鮮やかなラナンキュラス。大輪で茎もしっかりして長く咲き続ける花になったのはいつ頃からだろう。昔はひ弱で足元に添えるだけの花だったのに。今は春の花として一番人気かもしれない。

家の近くにある花屋さんに入ると、正面の一番目立つ処に春は色んな彩りのスイトピーが売られている。夏から冬の間は殆どトルコキキョウで時々ヒマワリ、リンドウが置かれる事がある。

同じ花が色違いで7～8種類並べられるのだから素敵でうっとりしていつも数種類同じ花を買ってしまう。この場所に並べられる花は一番良く売れるはず。ラナンキュラスはまだそこに置かれた事はないが、沢山の種類が揃えば飾ってほしい。

高価な花だがびっくりするほど長く日持ちする。もう暫くするとラナンキュラス・シャルロットという品種が出てくる。アネモネのような咲き方でエキゾチックな花。

食卓に一輪だけ飾りたい。





家にある中ではかなり大きい花器だと思うが、今回はとても小さく見えた。清水六兵衛氏の器にいけた四方正面の花。陽光桜は天城吉野と寒緋桜の交配種で、大きく成長すると見応えがある。今回いけたのは 3 メートルほどの大枝だったが、家元は簡単に留めてくれた。四方へ伸びた桜の枝に板谷名月や雪柳、レリア (蘭) が鮮やかに響き合う。太陽の光を象徴する陽光桜。平和の象徴として作られた桜をいけられた事が素晴らしい。

5

桜の四方正面　桑原櫻子（副家元）

花材／陽光桜（薔薇科） 河津桜（薔薇科） 雪柳（薔薇科） 板屋名月（楓科） レリア（蘭科）
花器／陶花器 清水六兵衛

4



桜の四方正面　桑原櫻子（副家元）

花材／陽光桜（薔薇科）　河津桜（薔薇科）　雪柳（薔薇科）　板屋名月（楓科）　レリア（蘭科）

花器／陶花器 清水六兵衛



家にある中ではかなり大きい花器だと思うが、今回はとても小さく見えた。清水六兵衛氏の器にいけた四方正面の花。陽光桜は天城吉野（あまぎよしの）と寒緋桜（かんひざくら）の交配種で、大きく成長すると見応えがある。今回いけたのは 3 メートルほどの大枝だったが、家元は簡単に留めてくれた。四方へ伸びた桜の枝に板谷名月や雪柳、レリア (蘭) が鮮やかに響き合う。太陽の光を象徴する陽光桜。平和の象徴として作られた桜をいけられた事が素晴らしい。



ブラサダという蘭

＜2頁の花＞ 櫻子

花材　クロトン2種（燈台草科）
　　ブラサダ・オレンジ・デライト（蘭科）
花器　金属装飾陶皿（モロッコ）

長くて尖った花が珍しい蘭の「オレンジ・デライト」見惚れて暫くは食卓に飾った後、クロトンと一緒にいけてみた。

クロトンもカラフルできれいなものが多く、細葉や赤い葉脈がくっきりと目立ち、リュウノヒゲとかコブラと呼ばれる様な品種もあるくらい多様な形と柄がある。

どちらも長く日持ちしてくれたが、枯れていく姿も美しく、器を変えながらこの組み合わせを楽しんだ。



横から見た花の奥行



パイナップルの仲間

〈5頁の花〉　櫻子

花材　オクロレウカ（菖蒲科）
　　黄花グロリオサ（百合科）
　　ネオレゲリア（パイナップル科）
花器　ガラス鉢

オクロレウカとグロリオサだけでは平凡なのでパイナップルの仲間であるネオレゲリアを足元に添えた。黄色のグロリオサと一緒に飛び跳ねる様なかたちが可愛らしい。赤く染まっている部分も全て葉だが、まるで花の様にみえる。

熱帯アメリカ原産のネオレゲリアは手に入れてから2ヶ月にもなるが、部屋にいけていても鮮やかで艶もあり生きているのがよくわかる。

木の上や岩盤などにくっついて生活する着生植物なので、根は退化していて水を吸い上げない。水は葉の中心部に霧吹きして鑑賞している。





たっぷりと

〈3頁の花〉　櫻子

花材　花菖蒲（菖蒲科）
　　撫子（撫子科）
花器　カットガラス鉢

縁あって沢山の花菖蒲がやってきたので、大きなガラス鉢にたっぷりといけて玄関に飾った。四方から見えることを意識していけている。どの花も一斉に咲いてくれて感謝。





おとぎ話のような

〈4頁の花〉　櫻子

花材　デルフィニウム
（金鳳花科）
茴香（芹科）
カンパニュラ（桔梗科）

花器　陶花瓶（フランス製）

この立派なデルフィニウムの故郷はヨーロッパから中央アジアにかけての山岳地帯だそうだ。冷涼な高地の草原湿地に咲く姿はさぞ幻想的だろう。

地中海沿岸原産のウイキョウとカンパニュラを合わせ、金の三日月模様の器にいけた。不思議な花たちが咲くおとぎ話のようないけばなになった。







源為朝（みなもとのためとも）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　作百合（さくゆり）（百合科）
　　唐糸草（からいとそう）（薔薇（ばら）科）
　　桔梗（ききょう）（桔梗科）

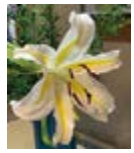
花器　陶花器（清水保孝作）

源為朝は平安時代末期の武将で、頼朝（よりとも）・義経（よしつね）兄弟の叔父にあたる。身長２ｍを超す豪傑で、九州・琉球・京都・伊豆諸島などに多くの伝説がある。

琉球のテッポウユリ、伊豆諸島のサクユリ、そして京都ではヤマユリ（の変種？）がそれぞれ為朝百合と呼ばれている。

蕾で買ったタメトモユリは赤い斑点の無いサクユリだった。写真で見たことはあるがいけるのは初めて。源為朝の伊豆での勇姿を想像して楽しんでいる。





サクユリ





クロトンの木

〈12頁の花〉 櫻子

花材　クロトン（燈台草科）
　　カラー（里芋科）
　　アンスリウム（里芋科）

花器　銅器

稽古でいけるクロトンは一枚ずつの葉としていける事が多い。水上げが悪いので、足元に添える葉として売られている。トウダイグサ科の植物なので、先端が黄、赤、オレンジ色に染まり、葉脈がくっきりと美しい。葉の形が槍の先の鉾（ほこ）に似ているので鉾葉系と呼ぶそうだ。今回は鉢のクロトンの木を切らずに根のまま包んで銅製花器にいけてみた。花器の口も中も広くてすっぽり包み込む大らかさ。根ごといけたのでよく保ってくれている。暑い時期で保たない花が多いが、取り合わせを色々替えながらお玄関の迎え花として飾っている。





カラジウムの葉

〈12頁の花〉　櫻子

花材　鶏頭（苋科）
　　カラジウム3種
　　（里芋科）

花器　陶鉢（アメリカ）

熱帯アメリカ原産のカラジウムは夏から秋に鉢植で手に入る。葉色や葉脈の表情が1枚ずつ違う。色の違う3種類のカラジウムで色と形に変化がつけられる。ケイトウと対等にいけた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
11 月号
No. 713

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元



今年も届いた烏瓜

〈表紙の花〉　櫻子

花材　烏瓜（からすうり）の実（瓜科）
　　白花杜鵑草（ほととぎす）（百合科）
　　蓼（たで）（蓼科）

花器　煤竹（すすだけ）手付籠

5年前からカラスウリをテキストに載せている。お弟子さんが庭で採ったものだ。過去に3作仙溪がいけて、今回は健一郎と私がいけた。それぞれに違う味わいがある。

私は赤と白の野草を合わせて籠花にした。煤竹の温かみのある色が良く似合っている。





烏瓜の花
7月撮影



オレンジ色

〈4頁の花〉　櫻子

花材　野茨（のいばら）の実（薔薇（ばら）科）
　　マリーゴールド（菊科）
　　木苺（薔薇科）

花器　小紋陶花瓶

橙色の濃淡は様々な色名で呼ばれてきた。蜜柑（みかん）色、萱草（かんぞう）色、山吹色、支子（くちなし）色、深支子（こきくちなし）、柑子（こうじ）色、柿色、照柿（てりがき）、鬱金（うこん）色、樺（かば）色（蒲（かば）色）、赤朽葉（あかくちば）、淡香（うすこう）、朱色、飴色、赤橙、蘇比（そひ）、丹色（にいろ）、鉛丹（えんたん）色、黄丹、金茶、鶏冠石（けいかんせき）、雄黄（ゆうおう）、琥珀（こはく）色、珊瑚色、朱華（はねず）、東雲（しののめ）色、曙（あけぼの）色…。

赤朽葉という色名も素敵だ。自然の中や生活の中で目にする色の微妙な違いを、そのものの名前で呼んで区別したのだろう。どんなものが印象深く目に映ったかを逆に想像できて面白い。

この花の色はマリーゴールド色と呼ぶことにしよう。



枯れヒマワリ

〈12頁の花〉

花材　枯れ向日葵（ひまわり）3種（菊科）
芭蕉（ばしょう）の枯葉（芭蕉科）
薔薇（ばら）2種（薔薇科）
木苺（きいちご）（薔薇科）

花器　陶花器（近藤豊作）

日本いけばな芸術展出品作
3人合作

枯れヒマワリと呼ばれるけれど、無数の実りが詰まったその顔は艶やかで美しい。その美しさを知っている栽培家によって種が欠けてしまわぬように大切に梱包され、乾いた茎には添え木までされている。

そういえば、3月の流展で私がいけた桜はとても大きな枝で、束を解（ほど）くと数百箇所の小枝が丁寧に紐（ひも）で絞（しぼ）られていた。気の遠くなるような作業だ。この老桜をどれほど大切にしていたのだろうと想像しながらいけていたら、いつのまにか桜の立花を立て終えていた。

いける花を届けてくれた人のことを思うことで、その花への思いはより深くなる。いけばなは外見的には花と器の世界だが、そこには多くの人の思いが加わっているのだ。